

様式第2号の1-①【(1)実務経験のある教員等による授業科目の配置】

※大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の1-②を用いること。

学校名	東海大学
設置者名	学校法人東海大学

1. 「実務経験のある教員等による授業科目」の数

学部名	学科名	夜間・通信制の場合	実務経験のある教員等による授業科目の単位数				省令で定める基準単位数	配置困難
			全学 共通 科目	学部 等 共通 科目	専門 科目	合計		
文学部	文明学科	夜・通信	新旧 同一 57			新旧同一 57	13	
	歴史学科 日本史専攻	夜・通信					13	
	歴史学科 西洋史専攻	夜・通信					13	
	歴史学科 考古学専攻	夜・通信					13	
	日本文学科	夜・通信					13	
	英語文化コミュニケーション学科	夜・通信					13	
文化社会学部	アジア学科	夜・通信					13	
	ヨーロッパ・アメリカ学科	夜・通信					13	
	北欧学科	夜・通信					13	
	文芸創作学科	夜・通信					13	
	広報メディア学科	夜・通信					13	
	心理・社会学科	夜・通信					13	
教養学部	人間環境学科	夜・通信					13	
	芸術学科	夜・通信					13	
児童教育学部	児童教育学科	夜・通信					13	

体育学部	体育学科	夜・通信	新旧同一 57			新旧同一 57	13	
	競技スポーツ学科	夜・通信					13	
	武道学科	夜・通信					13	
	生涯スポーツ学科	夜・通信					13	
	スポーツ・レジャーマネジメント学科	夜・通信					13	
健康学部	健康マネジメント学科	夜・通信					13	
法学部	法律学科	夜・通信					13	
政治経済学部	政治学科	夜・通信					13	
	経済学科	夜・通信					13	
経営学部	経営学科	夜・通信					13	
国際学部	国際学科	夜・通信					13	
観光学部	観光学科	夜・通信					13	
情報通信学部	情報通信学科	夜・通信					13	
理学部	数学科	夜・通信					13	
	情報数理学科	夜・通信					13	
	物理学科	夜・通信					13	
	化学科	夜・通信					13	
情報理工学部	情報科学科	夜・通信					13	
	コンピュータ応用工学科	夜・通信					13	
	情報メディア学科	夜・通信					13	
建築都市学部	建築学科	夜・通信					13	
	土木工学科	夜・通信					13	

工学部	航空宇宙学科	夜・通信	新旧同一 57			新旧同一 57	13	
	航空宇宙学専攻	夜・通信					13	
	航空宇宙学科	夜・通信					13	
	航空操縦学専攻	夜・通信					13	
	機械工学科	夜・通信					13	
	機械システム工学科	夜・通信					13	
	電気電子工学科	夜・通信					13	
	医工学科	夜・通信					13	
医学部	生物工学科	夜・通信				新旧同一 57 新 21 旧 39	13	
	応用化学科	夜・通信					13	
医学部	医学科	夜・通信			新 21 旧 39	新旧同一 57 新 21 旧 39	19	
	看護学科	夜・通信			新旧同一 12	新旧同一 69	13	
海洋学部	海洋理工学科	夜・通信					13	
	海洋理工学専攻	夜・通信					13	
	海洋理工学科	夜・通信					13	
	航海学専攻	夜・通信					13	
人文学部	水産学科	夜・通信					13	
	海洋生物学科	夜・通信					13	
人文学部	人文学科	夜・通信				新旧同一 57	13	
文理融合学部	経営学科	夜・通信					13	
	地域社会学科	夜・通信					13	
	人間情報工学科	夜・通信					13	
農学部	農学科	夜・通信					13	
	動物科学科	夜・通信					13	
	食生命科学科	夜・通信					13	

国際文化学部	地域創造学科	夜・通信	新旧同一 57			新旧同一 57	13	
	国際コミュニケーション学科	夜・通信					13	
生物学部	生物学科	夜・通信					13	
	海洋生物科学科	夜・通信					13	
(備考)								

2. 「実務経験のある教員等による授業科目」の一覧表の公表方法

大学ホームページ TOP > 各種情報・お問い合わせ > 情報の公表 > 「修学上の情報等」
 についての公表 > 授業について > シラバス又は年間授業計画の概要

<https://tips-syllabus.u-tokai.ac.jp/campusb>

「シラバスを検索する」をクリックする。時間割年度を入力し、対象の学部を選択する。キーワードに「実務経験のある教員」と入力し、「検索開始」をクリックする。

3. 要件を満たすことが困難である学部等

学部等名
(困難である理由)

様式第2号の2-①【(2)-①学外者である理事の複数配置】

※ 国立大学法人・独立行政法人国立高等専門学校機構・公立大学法人・学校法人・準学校法人は、この様式を用いること。これら以外の設置者は、様式第2号の2-②を用いること。

学校名	東海大学
設置者名	学校法人東海大学

1. 理事（役員）名簿の公表方法

<https://www.tokai.ac.jp/about/trustee/>

2. 学外者である理事の一覧表

常勤・非常勤の別	前職又は現職	任期	担当する職務内容 や期待する役割
非常勤	株式会社役員	2025.6.18 ～ 2029.6	法人運営への意見
非常勤	株式会社役員	2025.6.18 ～ 2029.6	法人運営への意見
(備考)			

様式第2号の3 【(3)厳格かつ適正な成績管理の実施及び公表】

学校名	東海大学
設置者名	学校法人東海大学

○厳格かつ適正な成績管理の実施及び公表の概要

1. 授業科目について、授業の方法及び内容、到達目標、成績評価の方法や基準その他の事項を記載した授業計画書(シラバス)を作成し、公表していること。	
(授業計画書の作成・公表に係る取組の概要)	
本学では、教育課程年度ならびに開講授業科目毎にシラバスを作成・公表している。シラバスの内容は、学科目、科目キーワード、科目と関連する実務経験、アクティブラーニング科目、地域志向による学修内容、他科目との関係、科目の要旨・概要、実務経験に基づく学修内容、アクティブラーニングによる学修内容、地域志向による学修内容、大学全体レベルのDP、学位プログラムレベルのDP、本科目の学修成果目標(ラーニングアウトカム)、成績評価の基準・方法、課題・試験・レポート等のフィードバック方法、履修上の注意点、教科書、参考図書・その他の教材、授業スケジュールである。 シラバスは、担当教員がシラバスデータベースシステム上で上記項目を入力後、科目管理者が点検・承認するというプロセスを経て公開される。 公表時期については、当該授業科目開講前に本学ホームページへ掲載し、広く周知している。	
授業計画書の公表方法	https://tips-syllabus.u-tokai.ac.jp/campus/b
2. 学修意欲の把握、試験やレポート、卒業論文などの適切な方法により、学修成果を厳格かつ適正に評価して単位を与え、又は、履修を認定していること。	
(授業科目の学修成果の評価に係る取組の概要)	
各科目の成績評価の客観性や厳格性を担保するために、シラバスに成績評価の基準が明記され、適性に成績評価がなされている。 また、学修成果の評価のひとつとしてGPA制を導入しており、修得単位数と合わせて、学修の評価基準となっている。	

3. 成績評価において、GPA等の客観的な指標を設定し、公表するとともに、成績の分布状況の把握をはじめ、適切に実施していること。 (客観的な指標の設定・公表及び成績評価の適切な実施に係る取組の概要) 本学では GPA 制度を導入している。GPA 制度の評価方法は、科目の成績を 5 段階で評価したものに、S=4.3、A=4、B=3、C=2、D・E=0 のグレード・ポイント (GP) を付与し、その科目の GP に各授業科目単位数を乗じて、その総和を登録科目総単位数で割って算出する。 学生ポータルサイトの学生個人画面にて、セメスターごとに履修した対象科目を基にした「学期 GPA」と、入学後から現在までに履修した全ての科目（累積成績）を基にした「通算 GPA」を表示している。大学生生活全般の履歴は「通算 GPA」が、現在の学修状況を確認するには「学期 GPA」が参考になる。GPA 値により得られる評価は下記のとおりとなり、学修状況を把握することができる。「学期 GPA」のセメスターごとの推移を見ることで、「上り調子」「下降している」等が判断できる。 4.3～4.0 S 評価～A 評価を平均的に修得 非常に優秀。問題はない。 3.9～3.0 A 評価～B 評価を平均的に修得 問題はないが、セメスターごとに下がってきている場合は注意が必要。 2.9～2.0 B 評価～C 評価を平均的に修得 ぎりぎり合格しているレベル。本人の学修姿勢により、急激に不合格が増える可能性もあり注意が必要。 1.9～ 不合格の割合が多い 学習面、生活面で問題を抱えている場合が多い。指導対象にもなるため、学修状況や生活面での見直しが必要となる。	
客観的な指標の算出方法の公表方法	https://www.u-tokai.ac.jp/education-research/gpa/

4. 卒業の認定に関する方針を定め、公表するとともに、適切に実施していること。	
(卒業の認定方針の策定・公表・適切な実施に係る取組の概要) 本学は、創立者松前重義の示した建学の精神を受け継ぎ「明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材を育てること」を目指している。そのために、大学として、教育目標と学位授与方針及び育成する人材像（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー）として明確に設定している。 ディプロマ・ポリシーの内容は次の通りである。 専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解し、文理融合の幅広い教養を身につけ、学則に定める修了要件を満たすとともに、自らの考えをもち、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、改善していく自主性や創造性を身につけたと認められるものに学位を授与する。 学位授与方針を、本学の学修をとおして身につけるべき社会的実践力「4つの力(12構成要素)」は下記のとおりである。 <自ら考える力> 対象を見据え、その本質を掘り下げ、可能性を広げる力（学習力、思考力、探求力） <集い力> 多様な人々の中で生き、その集団の形成・維持に寄与する力（関係構築力、コミュニケーション力、アイデンティティ獲得） <挑み力> 困難な問題に主体的に向き合い、解決・達成に向け踏み出す力（問題発見力、構想力、行動力） <成し遂げ力> 目標達成の途中で生じる失敗や挫折を乗り越えて、目標に近づく力（セルフマネジメント、継続力、改善・修正力） なお、卒業要件については、学則並びに授業要覧に、卒業単位数を修得し、所定の試験に合格すること等が明示されている。学部及び大学での卒業判定会議を行っており、卒業判定を適切に行うための措置がなされて、適切な学位授与が行われている。	
卒業の認定に関する 方針の公表方法	https://www.u-tokai.ac.jp/about/philosophy-history/policy/ 及び各学部ページに掲載

様式第2号の4-①【(4)財務・経営情報の公表(大学・短期大学・高等専門学校)】

※大学・短期大学・高等専門学校は、この様式を用いること。専門学校は、様式第2号の4-②を用いること。

学校名	東海大学
設置者名	学校法人東海大学

1. 財務諸表等

財務諸表等	公表方法
貸借対照表	https://www.tokai.ac.jp/information/financial_data/
収支計算書又は損益計算書	https://www.tokai.ac.jp/information/financial_data/
財産目録	https://www.tokai.ac.jp/information/financial_data/
事業報告書	https://www.tokai.ac.jp/information/financial_data/
監事による監査報告(書)	https://www.tokai.ac.jp/information/financial_data/

2. 事業計画(任意記載事項)

単年度計画(名称:	対象年度:	)
公表方法:		
中長期計画(名称:	対象年度:	)
公表方法:		

3. 教育活動に係る情報

(1) 自己点検・評価の結果

公表方法:	https://www.u-tokai.ac.jp/about/hyoka/annual-report/
-------	---

(2) 認証評価の結果(任意記載事項)

公表方法:	https://www.u-tokai.ac.jp/about/hyoka/accreditation/
-------	---

(3) 学校教育法施行規則第 172 条の 2 第 1 項に掲げる情報の概要

①教育研究上の目的、卒業又は修了の認定に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針、入学者の受入れに関する方針の概要

学部等名
教育研究上の目的（公表方法：各学部学科ページに記載 https://www.u-tokai.ac.jp/education-research/undergraduate-department/)
(概要) 文学部 文学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した 4 つの力を踏まえ、人文科学に関する幅広い教養と高度な専門的知識及び的確な分析法を身につけ、現代社会が抱える多様な諸問題と向き合い、問題の根幹はどこにあるのかを正しく理解して課題を見据え、対処策や解決法を導き出せる創造力と実行力をもった人材を養成することです。 以上の目的を達成するために、文学部では 4 学科 3 専攻に学士（文学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。 【文明学科】 文学部文明学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、文明論・比較文明的な視野を養いつつ、古来人類の知的営為が生み出してきた東西の優れた哲学や思想についての基礎的な素養を身につけることにより、悠久の時間軸の中で人間の生き方や社会のあり方を根本的に捉え、現代の社会が抱える地球規模の多様な問題の一端を自分にとっての切実なものとして受け止めることにより、感性豊かな適切な言葉でそれを的確に他者に伝えることのできる市民としての人材を養成することです。 【歴史学科 日本史専攻】 文学部歴史学科日本史専攻の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、史・資料を客観的に分析し、歴史事象を論理的に思考する能力や、分析・思考の成果を他者に的確に伝える能力を鍛え、過去から現在に至る日本史の流れや人々の営みを正しく理解することによって、歴史的な視点で現代社会の課題を認識し、他者を公正に理解しながら、よりよい社会の形成に主体的に関与しようとする人材を養成することです。 【歴史学科 西洋史専攻】 文学部歴史学科西洋史専攻の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、ヨーロッパとその関連地域から構成される西洋世界について歴史的視点から多角的に学ぶことによって、幅広い知識を習得するとともに、思考力や判断力を養い、異文化の特質を正しく理解し、教育や文化をはじめ、様々な分野で国際的にも活躍できる優れた人材を養成することです。 【歴史学科 考古学専攻】 文学部歴史学科考古学専攻の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、考古学と周辺諸科学に関する幅広い教養と高度な専門知識、ならびに考古学的分析手法を修得し、人類史を広い視野で見つめる力を養い、その視点をもって現代社会の多様な問題に向き合い、根幹を的確に理解し解決策を創造・実行できる人材を養成することです。 【日本文学科】 文学部日本文学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、古代から現代に至る長い伝統を持ち、また現代社会や文化とも密接に関わっている日本の文学や日本

語について学び、日本の文化に関する幅広い教養と言語運用能力をもとにして、現代の社会に対して貢献できる人材、また次世代の社会建設に向けて創造的に関わってゆける人材を養成することです。

【英語文化コミュニケーション学科】

文学部英語文化コミュニケーション学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、英語と文化とコミュニケーションに関わる幅広い人文科学系の基礎知識と、高度な各専門知識と技術をもって、英語による実践的コミュニケーション能力と、それを支える教養や専門研究の力を兼ね備え、問題解決の方策を導き出せる創造力及び実践力をもった人材を養成することです。

文化社会学部

文化社会学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、人文社会系の研究・教育の成果を土台としつつ、(1)多文化理解の促進、(2)高度な言語表現力の育成、(3)メディアの理解・利用・創造、(4)自立と共生を実現する知識と力、を柱とする研究教育を通じて、人・社会・自然の共生に立脚した社会生活の基盤の構築に寄与できる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、文化社会学部では6学科に学士（文化社会学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【アジア学科】

文化社会学部アジア学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、多様性に満ち、グローバル化のなか急速な変化を遂げているアジアについて学識を深めることで、異文化に向き合い中長期的な展望をもって現代のさまざまな課題に取り組み、国際社会、地域社会に貢献できる人材を養成することです。

【ヨーロッパ・アメリカ学科】

文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、西洋世界について古代から現代までの包括的な理解を深め、さらに「文化・芸術」「社会・人間」「歴史・地域性」という多角的な視点からの学びを通じて、第一に、変動する世界情勢の中でも揺るがない洞察力を持ち、新たな文明を創造するエネルギーに溢れた人材を養成します。第二に、多様性を尊び、共生を志向する精神を持って未来を切り開き、暮らしを豊かにする知恵をもつ人材を養成することです。

【北欧学科】

文化社会学部北欧学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、「共生社会の構築に貢献できる自律した人材の育成」という目的へ向け、(1)北欧社会の先進的な取り組みや文化について学ぶことで広い視野と柔軟な発想力を備え、多様な価値観を受容することのできる人材、(2)言語学習や留学・海外研修などを通じて自らの考えを発信する力を高めた人材、(3)グローバルおよびローカルな視点から北欧を研究することで批判的考察力を身につけた人材、(4)自己と社会との関わり方や自律した生き方を主体的に構想し、日本社会が抱える課題の克服に積極的に取り組むことのできる人材を養成することです。

【文芸創作学科】

文化社会学部文芸創作学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、文芸の創作と批評を通じ、(1)人と社会のありかたを柔軟に理解し、正確に分析し、問い直していく力、(2)自分を取り巻く状況と自分の考えを、論理的かつ表現力豊かに言語化していく力、(3)文芸と諸芸術から学んだ豊かな教養を生かして、魅力ある未来を自己と社会

の両面にわたって構想する力、という三つの力を備えた人材を養成することです。

【広報メディア学科】

文化社会学部広報メディア学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、単なる技術の習得にとどまらず、メディアに関する理論的・歴史的・制度的な研究成果を土台としつつ、混沌としたメディアの現状に対応できる人材、社会的価値のあるメッセージを創造・発信できる人材、メディアや企業・行政の広報・広告部門で活躍できる人材を養成することです。

【心理・社会学科】

文化社会学部心理・社会学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、心理学と社会学の学修と、組織された実験やフィールド実習等を通じて、人間関係の形成に必要な対話する力を有し、社会的な課題の解決に貢献するための新しいアイデアやそれを実現する方法を考える人材を養成することです。

教養学部

教養学部教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、幅広い教養を身につけるとともに、学科における専門性を基礎としながら、同時に学科を繋ぐ学際的かつ実践的な教育を通して、社会の変化に柔軟に対応し、社会での自らの役割を自覚するとともに、様々な問題に対応できる創造力、独創力や実践力を有した人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、教養学部では2学科に学士（教養学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【人間環境学科】

教養学部人間環境学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、私たち人間を取り巻く環境について「自然環境領域」、「生活文化領域」、「社会環境領域」の異なる領域から分析し、それらをトータルに把握するとともに、その専門性を基礎として、自らの社会的役割を自覚し、国際性と独創性、創造性を有した人材を学際的かつ実践的な教育を通して養成することです。

【芸術学科】

教養学部芸術学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、「身体指向」「社会指向」「発表指向」を目標とする芸術教育の実施により、音楽・美術・デザインなど個々の適性に合わせた専門能力、かつ「学際芸術」のコンセプトの下にそれらを統合する能力をも兼ね備え、様々な場面に対応できる判断力・行動力を持った視野の広い人材を養成することです。

児童教育学部

児童教育学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、子どもとそれを取り巻く社会状況及び教育・保育の役割を理解し、子どもの発達と学びを適切に支えることができる基礎的な知識・技能を基盤として、子どもの多様な発達と学びを総合的かつ連続的に捉える視野を持ち、そこで見出した社会・地域の課題に他者と協働的に向き合い、解決に向けて取り組むことのできる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、児童教育学部では児童教育学科に学士（児童教育学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、

「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【児童教育学科】

児童教育学部児童教育学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、社会について幅広く学び、“子どもに係る諸課題は社会全体の課題である”ことへの理解を深めながら、「教育・保育の基礎的な知識と技能」と、「多様な子どもに向き合い、見通しを持った教育・保育を展開できる力」に加え、「教育・保育の課題を地域の課題として実際に向き合い、他者と協働してその解決に向けて主体的に行動できる力」を教育体系の中で養成し、「多様な子どもを、継続的に見通す力」を身につけ、教員や保育者といった専門職において活躍するだけでなく、広く子どもに関わる各分野（公務員、一般企業）において、身につけた人間性や能力を活用して、これからの社会に貢献する人材、共生社会の実現を目指す人材を養成することです。

体育学部

体育学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、体育・スポーツ科学の学修を通じて、その知識・技能・態度を修得すると同時に心身を錬磨し、これらの英知を生かして柔軟な思考力と総合的判断力を有する人材を育成すると共に、体育・スポーツ科学の専門家としての指導力及び実践力をもった、平和で健康的な社会の創造に貢献することのできる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、体育学部では5学科に学士（体育学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【体育学科】

体育学部体育学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、身体を多面的に把握・理解する能力の育成に重点を置き、人文社会科学や自然科学に基盤を置いた幅広い知識・技能・態度を修得し、身体教育学およびスポーツ科学の学修を通じて、学校・企業・地域社会などあらゆる場面において、身体教育およびスポーツに関する学問研究の文化的諸成果を、周囲の人々や未来を担う子どもたちに発展的に継承することのできる実践力・指導力のある人材を養成することです。

【競技スポーツ学科】

体育学部競技スポーツ学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、体育・スポーツに関わる人文社会学、理工学などの幅広い基礎知識と、高度な各専門知識と技術をもって、自己及び他の競技者の競技力向上に寄与しうる能力を高めるに留まらず、アスリート、コーチ、トレーナーを目指す活動を通して、自己の専門分野における理論と実践面におけるリーダーとしての資質向上を目指し、国内はもとより世界のスポーツ界をリードしていくことのできる、より高度な知識と指導力及び実践力を有する人材を養成することです。

【武道学科】

体育学部武道学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目標に沿って、武道の特性を踏まえ、体育・スポーツ科学の視点から、武道を幅広く研究することにあります。そして、実践を通して武道の精神と専門的な知識を身につけ、技術を体得し、国際性に富んだ広い視野を培い、指導力・自己開発能力に長けたリーダーシップのとれる、社会に貢献する人材を養成することです。

【生涯スポーツ学科】

体育学部生涯スポーツ学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、生

涯にわたり健康で豊かな生活を送ることのできる社会の実現に寄与するため、生涯スポーツに関する理論及び実践を科学的に探求することを通じて、人々の健康の維持増進と生活の質（QOL）の向上を促す確かな知識と技術を修得し、優れたコミュニケーション能力とリーダーシップを持ち、スポーツ・健康増進施設、教育機関、企業など、地域社会で幅広く活躍できる人材を養成することです。

【スポーツ・レジャーマネジメント学科】

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、思想・歴史・文化など幅広い教養と豊かな見識を持ち、平和で豊かで美しい地球社会の発展に役立とうとし、人間が人間らしく生きていくために必要不可欠な人権の一つである「スポーツ・レジャー」分野において、自他に対してその実現に寄与し、科学的・創造的思考に卓越し、国際的なコミュニケーション能力を有してグローバルに活躍できる人材を養成することです。

健康学部

健康学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、未来に向けて「健康社会」を実現するために、多様な分野から成る総合学問としての健康学を学び、“専門領域や職種を超えてネットワークを構築し市民と協働する力”、併せて”国境も超えて多様な人々とも連携、協働できる力”、“複合的な視点で解決策を創造する力”を備え、マネジメントできる人材を養成することです。

健康学部は、これらの教育研究を進めることによって、身体的、精神的、社会的な側面から「健康」を総合的に捉え、実践的かつ専門的な教育と研究を通じて、国内外の健康に関わる諸問題の解決に貢献します。

以上の目的を達成するために、健康学部では健康マネジメント学科に学士（健康マネジメント学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【健康マネジメント学科】

健康学部健康マネジメント学科の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、未来に向けて「健康社会」を実現するために、多様な分野から成る総合学問としての健康学を学び、“専門領域や職種を超えてネットワークを構築し市民と協働する力”、併せて”国境も超えて多様な人々とも連携、協働できる力”、“複合的な視点で解決策を創造する力”を備え、マネジメントできる人材を養成することです。

健康学部健康マネジメント学科は、これらの教育研究を進めることによって、身体的、精神的、社会的な側面から「健康」を総合的に捉え、実践的かつ専門的な教育と研究を通じて、国内外の健康に関わる諸問題の解決に貢献します。

法学部

法学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、社会の諸問題を法的に分析し、その解決方法を構築・説明することのできる法的素養（リーガル・マインド）を涵養することにより、人間の尊厳と人権の尊重を基調とする現代の社会において、責任ある行動をし、ジェンダー・障がい者差別等のないインクルーシブかつ平等な社会を志向することのできる自立した人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、法学部では法律学科に学士（法学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【法律学科】

法学部法律学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、法学的素養（リーガル・マインド）と能力を活かして自分自身を人間的に成長・発展させ、法律専門職・公務員・ビジネスパーソン・その他さまざまな団体の構成員として、そして地域社会、日本、ひいては世界の一市民として、自身の活動を通して平和でインクルーシブな社会の形成・発展に寄与しうる人材を養成することです。

政治経済学部

政治経済学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、我が国および国際社会の一層の発展と向上に寄与しうる「冷静な頭脳と温かい心」に立脚し「社会力」をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、政治経済学部では2学科に学士（政治学・経済学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【政治学科】

政治経済学部政治学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、21世紀におけるグローバル化、情報化、少子高齢化を視野にいれると同時に、環境、人権等、現代の政治課題に対応できるよう、地域社会から国際社会に及ぶ複雑な政治現象を客観的、多面的に分析し、現実社会の諸問題に取り組み解決を図る態度と能力を身に着けた人材を養成することです。

【経済学科】

政治経済学部経済学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目標に沿って、社会で求められる状況判断・意思決定の能力と密接に関係する①経済現象の仕組みや因果関係を理論的に解明できる力（理論的に考える力）、②経済現象について資料を集め科学的に分析できる力（実証分析する力）、③経済問題を多面的に検討して政策提言できる力（政策提言する力）、以上3つの力を備えた人材を養成することです。

経営学部

経営学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、複雑化する課題解決に対し、スキルと強い意志をもって行動できる人材を育成していくことを目的に、経営学の理論・知識とデータ分析能力を持ち、問題解決に向けた新しいプロセスをデザインしながら新しい解決策を模索することができる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、経営学部では経営学科に学士（経営学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【経営学科】

経営学部経営学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、複雑化する課題解決に対し、スキルと強い意志をもって行動できる人材を育成していくことを目的に、経営学の理論・知識とデータ分析能力を持ち、問題解決に向けた新しいプロセスをデザインしながら新しい解決策を模索することができる人材を養成することです。

国際学部

国際学部国際学科の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、グローバル化の加速する社会において必要な「地球規模の課題を理解するための幅広い知識と思考力」、「言語・文化を超えて協働できるコミュニケーション力」、「高い倫理観をもって積極的に行動する実践力」を持つ人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、国際学部では国際学科に学士（国際学）の学位プログラムを設置し、「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【国際学科】

国際学部国際学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目標に沿って、グローバル化の加速する社会において必要な「地球規模の課題を理解するための幅広い知識と思考力」、「課題解決に向けたプロセスを構想し言語・文化を超えて協働できるコミュニケーション力」、「高い倫理観をもって積極的に行動する実践力」を持つ人材を養成することです。そのために、頭で学ぶだけでなく、体とそして心を使った実践的に使える知識と人間力を身につけ、複雑化するグローバル社会における課題を発見するとともにその解決に寄与し、多文化社会の中で活躍できる人材の養成を目指しています。

観光学部

観光学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、総合学問としての観光学の研究・教育の成果を土台として、観光の現象と構造を多角的に学び、観光と密接に関連する文化・社会・自然の多様性の理解及び科学技術への関心に基づく広い視野をもち、社会の変化に柔軟に対応できる創造力と実践力を備え、価値を共創し、もって持続可能な社会の発展に貢献できる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、観光学部では観光学科に学士（観光学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【観光学科】

観光学部観光学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、観光の諸現象に関する幅広い基礎知識、観光を多角的に理解するための観光学の専門知識とその応用としての問題発見・解決力、日本語や英語等多言語でのプレゼンテーション・コミュニケーション力、ホスピタリティと協調性を備えつつ独自性を発揮して挑戦できる自己管理能力等をもって、観光・サービス産業やそれらの研究分野の発展に貢献できる人材を養成することです。

情報通信学部

情報通信学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、人々の生活の質的变化・価値観の変化に大きな影響を与えている情報通信技術をどのように発展させ、イノベーションを起こすためにどのように活用し、持続可能な社会を構築していくかの解決を目指し、多様性と国際性を兼ね備えた広い視野とコミュニケーション能力を有するとともに、情報通信に関する専門知識と技術を身につけ、それらを社会で十分に活用できる柔軟な思考力と活用力を備えた、情報通信技術者としての使命感、倫理観をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、情報通信学部では情報通信学科に学士（情報通信学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【情報通信学科】

情報通信学部情報通信学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、グローバル化・デジタル化が進展する高度情報化社会において、多様化する価値観を受容しつつ活躍できる“コミュニケーション力”を有し、“柔軟な思考力・活用力と計画力”と他分野・他者との協働により解決を目指す“リーダーシップ・協調力”をもって、諸課題に対して、“情報通信の専門性と技術力”を駆使し、また“情報通信技術者としての使命感と倫理観”に基づき“自ら考え行動し、解決を目指すことができる能力”をもった人材を養成することです。

理学部

理学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、理学部独自の内容を教育に生かした指導を行い「専門性に対応できる基礎力」「総合的な判断力」「協力し合って問題に対処できる能力」をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、理学部では4学科に学士（理学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【数学科】

理学部数学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、現代数学の基礎を教授し、「数学に関する基礎的知識、専門性に対応できる基礎力」「数学の最新の研究動向に精通した総合的な判断力」「様々な分野において数学特有の論理的思考法で諸問題に対処できる能力」をもった人材を養成することです。

【情報数理学科】

理学部情報数理学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、人工知能(AI)やデータサイエンス分野などの高度情報化社会に対応するため、「数理科学および情報科学の基礎知識と専門性に対応できる基礎力」「数理から情報にかけて蓄えた知識を応用する能力」「幅広く現象や情報を収集・解析し、人と協力して問題に対処する能力」をもった人材を養成することです。

【物理学科】

理学部物理学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、あらゆる物質、素粒子、宇宙、生命の謎に挑み、現象を支配する法則の解明のため、実験と理論の両面から学問を深め、現代物理の幅広い領域にわたる教育・研究を通して、「物理学への知的探究心」「物事の本質を知る習慣と能力」「自ら考え他者と協力する力」をもった人材を養成することです。

【化学科】

理学部化学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、化学の基礎から専門分野に至るまでの学習と研究を通じて、「知識の応用力」「課題解決力」「社会での協調性」を備えた人材を養成することです。

情報理工学部

情報理工学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、情報に関する幅広い基礎知識と高度な専門知識と技術を備え、現代の情報社会が抱える多様な課題を正しく理解し、それらの課題に対する解決策を的確に導き出せる創造力

及び実践力をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、情報理工学部では3学科に学士（工学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【情報科学科】

情報理工学部情報科学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って普遍的な科学研究と革新的な着想を追求し、情報分野に関するグローバルな視野と新しい情報処理技術を創成する素養を持った国際社会に貢献する人材を養成することです。

【コンピュータ応用工学科】

情報理工学部コンピュータ応用工学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、これからの高度情報化社会、高福祉化社会の技術的基盤として必要とされている、「コンピュータ工学」および「知能ロボティクス」の専門的な知識と実践的技術を習得するとともに、急速な技術革新に対して自らを進歩させ柔軟に対応できる応用力、リーダーの資質、そして英語によるコミュニケーション能力を備えた、国際的にも活躍できるような人材を養成することです。

【情報メディア学科】

情報理工学部情報メディア学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、急速に進化する情報技術と多様な価値観を柔軟に受け入れ、現代社会を支える中核的人材の育成を目指し、「情報理工学に関する幅広い基礎知識をもとに、解決が急務の課題を的確に発見する力」、「情報メディアに関する高度かつ専門的な知見を活用して、課題解決のための新たな価値を創出する力」、「情報分野の技術者・研究者としての使命を自覚し、社会への貢献を志向する姿勢」を持ち、今後ますます複雑化・多様化する世界的課題に果敢に挑み、その解決に寄与する人間力と専門性を兼ね備えた人材を養成することです。

建築都市学部

建築都市学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、従来の「工学」の枠組みを越え、最新かつ高度な専門知識・技術力と、人間・社会・生活・文化・歴史に対する幅広い視野と柔軟な発想力を持ち、ソフトとハードの両面から建築・都市の未来に向けて抱える課題に対し、自ら調査・発見し、地域と協働して解決を図ることができる「柔らかな技術者」の育成を目的とします。

地域に根ざした建築・都市のあり方を、既存の建築・土木分野のみならず、社会学・経済学など文系分野の教員の参画等により多角的に学ぶことで、住環境から都市環境、地球環境まで及ぶ広い視野と高い技術力を備え、持続可能な社会システムの構築をめざすグローバルな人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、建築都市学部では2学科に学士（工学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【建築学科】

建築都市学部建築学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、技術の進歩、環境の変化、社会の変化を捉える幅広い視野と、建築学の幅広い専門性を兼ね備えた「柔らかな技術者」の育成を目指し、「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」をカリキュラムの柱とし、文系・理系の枠にとらわれず、新しい視点を持って地域と社会の発展に継続的に寄与できる人材を養成することです。

【土木工学科】

建築都市学部土木工学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、従来のライフラインの整備、国土保全、社会基盤の建設から、自然環境の保全、災害の軽減、エネルギーなど、持続可能社会の構築を視野に入れた土木工学の幅広い専門性を有し、社会経済や自然環境の変化に加え、想定外の環境変化にも対応できる柔軟性をもった人材を育成します。具体的には、「都市と防災」「都市と環境」をカリキュラムの柱とし、身に付けた技術力をもって、地域の発展に還元することができる技術力と実行力を伴った人材を養成します。

工学部

工学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれを具現化した4つの力を踏まえ、工学に共通する基本的知識と、学科固有の専門知識に加え、世界の趨勢に目を向ける国際性および多様化する価値への寛容性をもって、世界が直面する技術的課題や現代社会が内包する社会的問題に対し、科学技術者の視点から積極的かつ創造的に取り組み、持続可能な社会の発展に寄与する志をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、工学部では7学科2専攻に学士（工学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【航空宇宙学科 航空宇宙学専攻】

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻は、大学・学部教育目的に基づき、航空工学、宇宙工学および宙空環境科学の学際的複合領域において、理論と実践を融合した教育研究を展開しています。航空機やロケット・人工衛星などの設計・開発に関わる専門知識と技術を体系的に修得させるとともに、航空宇宙分野が直面する先端的課題に挑戦する創造性と問題解決能力を養います。

【航空宇宙学科 航空操縦学専攻】

工学部航空宇宙学科航空操縦学専攻の教育研究上の目的は、大学・学部教育目標に沿って建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、航空機操縦と運航に関する知識と技術を修得し、豊かな人間性と確かな操縦技倆を兼ね備えて社会の負託に応え、常に向上心を持った信頼されるプロフェッショナル・パイロットを育成することで、あわせて米国留学の機会も活用し国際性と語学力を身に着けた人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、工学部航空宇宙学科では航空操縦学専攻に学士（工学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【機械工学科】

工学部機械工学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、国際化が進んだ現代社会で積極的に課題解決ができ、かつ独創的な機械エンジニアを養成することであり、また、幅広く社会貢献可能な全人的な教育を行うことです。さらに、アクティブラーニング科目や卒業研究などの実践的教育を通して、機械工学を学ぶ上で必要とされる基礎知識を広く修得すると共に、専門科目の学修を通して高度な専門知識を身に着け、技術者としての倫理観をもった人材を養成することです。

【機械システム工学科】

工学部機械システム工学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、加速化する高齢化社会を支えながら人と共生する機械システムを創造するために必要な専門知識を習得するとともに、機械工学とシステム工学の融合に立脚した先進的な考え方や確固たる技術者倫理観、そして人と人、人と情報を結びつけるコーディネート力を身に付けることで、生活の質向上に資する機械システムの在り方や社会との関わりを正しく理解し、

目まぐるしく変貌する現代社会が抱える諸問題に対し技術的かつグローバルな視点より解決策を導き出すことができる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、工学部機械システム工学科では学士（工学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【電気電子工学科】

工学部電気電子工学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、豊かな人間性を備え、技術者としての使命を理解し、電気電子工学および情報・通信工学分野の技術を活用して、調和のとれた社会の構築に寄与できる能力を備えた技術者を育成することです。また、今後ますますグローバル化が進む社会を見据え、論理的な思考によって主体的に課題の発見と解決に取り組むことができる技術者を養成することです。

【医工学科】

工学部医工学科の教育研究上の目的は、先端医療を支えさらに発展させるための医療技術、医療機器、医用システムの研究・開発、応用、及び工学的評価を担う生体医工学技術者と、工学分野と医学分野の知識・技術を持ち、これらを有機的に結び付けてチーム医療を通して社会貢献できる臨床工学技士を養成することです。そのために、医療技術・医療機器・医用システムの仕組みと生体機能・生体情報の工学的処理手法・工学的評価方法を理解・応用し、これからの医療に必要な医工学技術を研究・開発するための基礎学力と、医工双方の発想の差異を超えた円滑な対人関係を専門性に基づいて構築できるコミュニケーション能力を習得するカリキュラムを用意しています。その結果として、医療系企業で医療機器・医用システムを医工学境界領域の専門知識を駆使して開発・販売・メンテナンスするサービスエンジニアや、医療機関でチーム医療に従事する臨床工学技士を養成します。また、工学系大学院・医学系大学院へ進学して、医療技術・医療機器・医用システムを企画・研究・開発するエンジニアや学術研究者の養成を目指しています。

【生物工学科】

工学部生物工学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、生物学および化学に関わる基礎知識と、医薬品・食品などの関連分野へ生物学を応用するための専門知識を高めることです。また、これら知識を実践で利活用するための基本的・専門的技能を身につけることによって、生物学・化学に関連した科学技術とそれを適切に社会に還元するための倫理感をあわせ持ち、世界が直面する医療や健康にかかわる社会的課題に対する方策を導き出せる創造力及び実践力を有する人材を養成することです。

【応用化学科】

工学部応用化学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目的に沿って、化学を中心とした基礎的・専門的知識と技能を通し、日本の基幹産業である製造業界において、論理的判断ができる人材を養成することです。また、社会的・国際的な視野を備え、高度情報化が進む科学技術の発展に対応しながら化学的かつ工学的な視点で自己研鑽を重ね、積極的に問題解決に取り組むことができる人材を養成することです。

医学部

医学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、“科学とヒューマニズムの融和”の精神のもとで、保健・医療の幅広い知識と確かな技能とともに豊かな人間性を有し、創造的な「生命科学研究」を実践できる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、医学部では2学科に学士（医学・看護学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミ

ッション・ポリシー」を定めています。

【医学科】

医学部医学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、「科学とヒューマニズムの融和」の精神を基盤とし、生命の尊厳を深く理解した上で、多様な価値観を尊重しながら患者・社会に貢献する良医を育成することです。とくに以下の6つのコンピテンスを有する、豊かな人間性と高度な専門知識・技能を兼ね備え、国際的にも責任ある医療活動を行える人材を養成します。

- (1) プロフェッショナリズム：
豊かな人間性と知識・技能を兼ね備え、良医として責任を持った行動ができる。
- (2) 社会的役割の実践：
文化・地域・社会を認識し、医師の社会的役割を実践できる。
- (3) 科学的探究心：
医学的課題を発見し、論理的に分析・発信することができる。
- (4) 応用可能な医学的知識：
正常な構造・機能や病態、病気の診断・治療・予防を修得し、臨床的に応用できる。
- (5) 医療実践技能：
基本的診療技能を修得し、チーム医療に参画できる。
- (6) グローバルな視点：
医療・医学に国際的な視点で対応できる。

【看護学科】

医学部看護学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、さまざまな健康レベルの人々が、あらゆる生活の場で、その人らしい健康な生活を支援する看護が実践でき、温かな人間性をもつ専門職を養成することです。そのための幅広い教養、知識、技術を持ち、人権擁護を基盤としたヒューマンケアが実践できる人材の育成を目指します。

海洋学部

海洋学部の教育研究上の目的は、建学の精神とそれを具現化した「4つの力」（社会的実践力）に基づき、海洋に関する幅広い知識と高度な専門性、地球規模の課題について海洋を通じて正しく理解し、創造力と実践力をもってその解決策を導き出す力を備えた人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、海洋学部では3学科2専攻に学士（海洋学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【海洋理工学科 海洋理工学専攻】

海洋学部海洋理工学科海洋理工学専攻の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、巨大かつ複雑な地球システムおよび気候システムの中核をなす海洋の状態・現象の科学的理解を目指し、人類を含む生物圏のハビタビリティを考慮した海洋技術イノベーションの創出を通して、持続可能な人類社会の構築に貢献する人材を養成することです。

【海洋理工学科 航海学専攻】

海洋学部海洋理工学科航海学専攻の教育研究上の目的は、大学・学部教育の目的に沿って、海事に関わる人文社会学、自然科学などの幅広い基礎知識と、高度な海技士としての専門知識と技術をもって、海運界、海事関連産業が抱える多様な諸問題に対して、その全体像を正しく理解し、さらに、これらの問題に対する対処・解決の方策を導き出せる海技従事者となる人材を養成することです。

【水産学科】

海洋学部水産学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、水生生物を食品の源ととらえて、その生態と生活環境、保護育成や増養殖などの水産資源に関する知識を有し、生物の多様性を維持した生物資源の持続的な利用に貢献できる知識と技術を備え、かつ食品の加工・製造、食の安全・安心に関する知識と技術を身に付けた、計画力と実践力に富み、生物と人との関わりを考慮できる社会貢献度の高い人材を養成することです。

【海洋生物学科】

海洋学部海洋生物学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、海洋生物とそれを取り巻く環境に関する正しい知識を身につけ、それを礎として海洋生物の多様性の維持と海洋環境の保全を目指すことのできる情報リテラシー能力を有し、さらに自らの意見を持って海洋生物の有効利用への寄与と人間社会の発展に貢献し得るような社会的責任感のある人材を養成することです。

人文学部

人文学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、私たちが直面する様々な課題に立ち向かい魅力ある未来社会を創造するため、人文学の基礎的知識を修得するとともに多岐にわたる人文社会系の学問分野をつなぎあわせて、社会変化に対応していく人材を養成することです。人間社会が内包する多様な価値観や文化を相対的・総合的に理解したうえで、地域における課題の解決と新たな価値の創出に貢献し、変化する世界に柔軟に対応しうる発想力と行動力をもった人材の育成を目指します。

以上の目的を達成するために、人文学部では人文学科に学士（人文学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【人文学科】

人文学部人文学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、現代あるいは将来において生じるであろう問題や変化に対して、新しい価値観を持って対応していく人材を養成することである。人間の多様なあり方を探求する人文学の専門知識を活用して、身近な地域に存在する歴史や文化、自然を基礎に新たな価値を構築し発信する力、グローバル化や技術の進展に伴う諸問題の実態に迫り、その解決法を探る思考力、変化する世界に対応したライフスタイルや社会経済活動のあり方を提案する発想力と行動力をもった人材を養成することです。

文理融合学部

文理融合学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、超スマート社会「Society5.0」で必要とされる、情報活用能力と、現代の複雑な問題を文系・理系の枠を超えた視点でとらえ、解決できる能力を身につけ、国連が提唱するSDGs（Sustainable Development Goals＝持続可能な開発目標）の達成が不可避となった現在の世界の課題解決や21世紀を通じた社会づくりを地域の視点で研究するとともに、それを実践していく人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、文理融合学部では、経営学科、地域社会学科、人間情報工科の3学科に、学士（それぞれ、経営学、社会学、工学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【経営学科】

文理融合学部経営学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、「理論と実践」を深化させ、文理融合の学びを生かした複眼的視点から、ビジネスにおける3分野「企業経営分野」、「スポーツビジネス分野」、「アグリビジネス分野」における経営上の「新しい知」を創出していくことです。

この目的を踏まえ、経済・経営面の利益の向上だけでなく、社会的利益、環境的利益の向上を考える専門的知識と技術を身に付けた上で、地域社会だけではなく、国際社会で貢献できる人材を養成します。

【地域社会学科】

文理融合学部地域社会学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、文理融合の複眼的視点を持って地域の諸問題を読み解き、「地域観光」と「心理・広報メディア」の双方から地域の活性化を継続的に推進し、近未来地域づくりを創出していくことです。

この目的を踏まえ、急速に変化している高度情報化社会において多様性とグローバル化の中にある地域社会の可能性を見出し、その継続的な活性化に向けて近未来地域づくりをプロデュース・マネジメントしていける人材を養成することです。

【人間情報工学科】

文理融合学部人間情報工学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、電気電子・情報工学及び医用工学に関する幅広い基礎知識と高度な技術をもって、現代の社会が抱える多様かつ複雑な問題に対処するための創造力と実践力を兼ね備えた人材を養成することです。具体的には、先端的な情報技術と医療技術に関する深い専門知識を習得し、文理を横断する広い視野と柔軟な発想力を備えることで、自然環境や社会倫理に配慮しながら、人工知能（AI）や半導体などの先端技術を活用して課題解決に寄与できる技術者を育成します。

農学部

農学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、食料の生産と利用、生命の仕組みの理解、生態系との調和への探究等について、それらの理論に加え、「活用する実践的技術」や「応用して問題を解決できる能力」を身に付け、地域や国内はもとより世界の持続的発展に「食の重要性」と「生命の尊さ」をもって貢献できる人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、農学部では3学科に学士（農学）の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【農学科】

農学部農学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、実験・実習を通じて直接植物に触れ、地域の自然や農業に接する体験型の教育を通して、「地域の持続的発展に貢献するための食料生産に関する専門的知識を実践的に身に付けていくこと」に加え、刻々と変化していく社会に対して「確固たる自然観や生命観を有し、揺るぎなく進むべき道筋を見出す創造性」、「自然環境の保全や人類の未来に対して、責任ある社会貢献を継続できる態度と能力」を身に付けた豊かな人材を養成することです。

【動物科学科】

農学部動物科学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、動物生産科学、動物生命科学、人と動物との共生科学に関する確かな専門知識を持つこと、地域の生態系や文化を理解すること、持続的かつ安全な動物生産、動物にかかわる新たな技術開発および、科学的根拠に基づく人と動物との適正な関係を創出すること、を目指して、実践

的な対処・解決の方策を導き出せる力と、複眼的な視点に基づく倫理観を持って、責任ある社会貢献ができる人材を養成することです。

【食生命科学科】

農学部食生命科学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目的に沿って、生命現象を科学的に理解し、より良い食品の創造と食を通じた健康について考える力を培うために、「食健康科学・予防医学」、「発酵・食品加工学」及び「生命科学」における専門知識と新しい技術を修得するとともに、様々な課題に対応できる解決能力と向上心や協調性を併せ持つ人材を養成することです。

国際文化学部

国際文化学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、人文科学、社会科学に関する高度な専門的知識に加え、環境適応力、人間関係構築力、高度な外国語運用能力をもち、国籍や文化の差異を超克して良好かつ平和な人間関係を構築できる「国境なき社会人」としての資質をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、国際文化学部では2学科に学士(教養学)の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【地域創造学科】

国際文化学部地域創造学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目標に沿って、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、人文科学、社会科学、自然科学に関する高度な専門的知識に加え、環境適応力、人間関係構築力、外国語運用能力をもち、国籍や文化の差異を超克して良好かつ平和な人間関係を構築できる「国境なき社会人」としての資質をもった人材を養成することです。この「国境なき社会人」の育成を達成するために、地域創造学科ではグローバルな思考から地域特有の価値を創造できる「グローバル人材」の育成を目指します。

【国際コミュニケーション学科】

国際文化学部国際コミュニケーション学科の教育研究上の目的は、大学・学部の教育目標に沿って、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、人文科学、社会科学、自然科学に関する高度な専門的知識に加え、環境適応力、人間関係構築力、優れた外国語運用能力をもち、国籍や文化の差異を超克して良好かつ平和な人間関係を構築できる「国境なき社会人」としての資質をもった人材を養成することです。この「国境なき社会人」の育成を達成するために、国際コミュニケーション学科では寛容性を発揮してインクルーシブ社会の実現に資する「ユニバーサル人材の育成」を目指します。

生物学部

生物学部の教育研究上の目的は、建学の精神及びそれらを具現化した4つの力を踏まえ、人類が培ってきた文化・文明と自然・地球環境を一体とした視野を持ち、生物多様性の保全、生物資源の持続可能な利用を目指す行動型国際人であり、さらに地球と人類の抱える諸問題に対して、陸上と海洋のフィールドにおける理解を深め、文理融合の学際的知識と化学物質から生態系に至る専門知識・技術を主体的・複眼的に活用して、自ら課題に取り組み解決する能力をもった人材を養成することです。

以上の目的を達成するために、生物学部では2学科に学士(理学)の学位プログラムを設置し、各々に「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、「アドミッション・ポリシー」を定めています。

【生物学科】

生物学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目標に沿って、分子・細胞レベルから個体群・生態系レベルに至る広範な生物学の基礎知識と、高度な各専門知識と技術をもって、生物・自然・人間の関わり方を論理的かつ創造的に探求し、生物の持続的利用や自然環境維持などの問題に対する対処・解決の方策を導き出せる構想力及び実践力をもった人材を養成することです。

【海洋生物科学科】

生物学部海洋生物科学科の教育研究上の目的は、大学・学部教育目標に沿って、海洋生物やそれを取り巻く環境に関する基礎知識と、高度な各専門知識と技術をもって、生物・自然・人間の関わり方を論理的かつ創造的に探求し、生物の持続的利用や自然環境維持などの問題に対する対処・解決の方策を導き出せる創造力及び実践力をもった人材を養成することです。

卒業又は修了の認定に関する方針（公表方法：各学部学科ページに記載

<https://www.u-tokai.ac.jp/education-research/undergraduate-department/>）

（概要）

文学部

【文明学科】

文学部文明学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文学）」を授与します。

『知識・理解』

人類の叡智と歴史認識とを学び、人文学の各専門分野において自らの問題意識に則して現代社会の諸問題を的確に理解する基礎能力。

『技能』

主体的に設定した専門分野の課題を論理的に分析・考察し、自らの見解を様々な表現形式を通じて積極的に発信してゆく能力。

『態度・志向性』

激しく変動する現代社会の課題と主体的に向き合い、市民の一員として新たな社会の構築に貢献しようとする姿勢。

【歴史学科 日本史専攻】

文学部歴史学科日本史専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文学）」を授与します。

『知識・理解』

未来に向かって歴史をつくってきた先人の営みに対する共感を基礎としつつ、現代社会もそのような歴史の過程にあることを念頭におき、日本史上のさまざまな歴史事象を体系的に理解する能力。

『技能』

主体的な問題関心に基づいて、先人の営みに関する史・資料の読解、分析、考察を積み重ねることによって、自らの歴史像を構築し、その成果を適切な方法で表現する能力。

『態度・志向性』

多様な価値観をもつ人々が共存する現代社会の一員であることを自覚しながら、歴史的な視点から現代社会の課題を分析・把握して、よりよい社会の構築に積極的に取り組もうとする姿勢。

【歴史学科 西洋史専攻】

文学部歴史学科西洋史専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文

学)」を授与します。

『知識・理解』

未来に向かって歴史をつくってきた世界史的事象に対する理解を基礎としつつ、現代社会もそのような歴史の過程にあることを念頭におき、西洋史上の様々な歴史事象を体系的に理解する能力。

『技能』

外国語読解能力及び西洋世界における事象に関する史・資料の読解・分析と論理的な思考を、主体的な問題関心をもって鍛えかつ積み重ねることによって、自らの西洋に関する歴史像を構築し、その成果を適切な方法で表現する能力。

『態度・志向性』

多様な価値観をもつ人々が共存する現代社会の一員であることを自覚しながら、異文化への理解と歴史的な観点に立って現代社会の課題を分析・把握し、よりよい社会の構築に積極的に取り組もうとする姿勢。

【歴史学科 考古学専攻】

文学部歴史学科考古学専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文学）」を授与します。

『知識・理解』

考古学を通じて培った歴史認識と問題意識を基盤とし、過去だけでなく現代社会の諸問題も的確に理解する基礎能力。

『技能』

主体的に設定した課題を論理的に分析・考察し、自らの見解を文章や図表など多様な表現形式で説得力をもって示し、積極的に発信する能力。

『態度・志向性』

人類史的な視野に立ち、激動する現代社会の課題に主体的に向き合い、平和な未来の構築に貢献しようとする姿勢。

【日本文学科】

文学部日本文学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文学）」を授与します。

『知識・理解』

これまで人類が培ってきた叡智と歴史とを学び、特に日本語・日本文学の分野において充実した知識を有し、自らの問題意識に則して現代社会の諸問題を的確に理解する基礎能力。

『技能』

自らが設定した専門分野の課題を論理的に分析・考察し、特に日本語・日本文学の分野において、自らの見解を様々な言語活動を通じて積極的に発信してゆく能力。

『態度・志向性』

多様な価値観を持った人々が共存する現代社会の課題と主体的に向き合い、特に日本語・日本文学の知識と能力をもとにしながら、現代社会・世界の問題について深く思考し、新たな世界の構築に貢献しようとする姿勢。

【英語文化コミュニケーション学科】

文学部英語文化コミュニケーション学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（文学）」を授与します。

『知識・理解』

英語圏の文化を含め、世界に存在する様々な文化についての知識と教養を身につけ、グローバル化の進む多様化した社会で円滑なコミュニケーションを行うことができる基礎力。

『技能』

論理的に物事を考えて分析し、自らの見解を効果的かつ適切に発表できる表現力。

『態度・志向性』

豊かな知的好奇心を持ち、言語や文化における多様性を理解・尊重し、コミュニケーションを通じて他者との良好な関係性を構築・維持しながらよりよく協働・共存していこうとする態度。

文化社会学部

【アジア学科】

文化社会学部アジア学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（文化社会学）」を授与します。

『知識・理解』

アジアの歴史、文化、社会についての学びを通して、中長期的な展望に立ってものごとを考え、異文化と向き合っていくための専門知識。具体的には、アジアに関する地理的歴史的専門知識、アジアの文化や社会に対する洞察力、すなわち一元的な見方を排した多面的多角的な理解力。

『技能』

予測困難な時代において情報を的確に収集し分析していく技能。

複雑にして困難な状況に対しても深い思考をめぐらせることのできる技能。

国際的な相互理解を深めるに十分な言語的技能。

『態度・志向性』

グローバル化が進展するなか多様性に満ちあふれたアジアを舞台に行動していこうとする姿勢。

過去に学び予測不能な時代を楽しもうとする態度、現代の課題に自ら取り組み、自分自身の意見をしっかり持つとともに、多様な人びとと協力して世界に貢献しようとする姿勢。

【ヨーロッパ・アメリカ学科】

文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文化社会学）」を授与します。

『知識・理解』

ヨーロッパとアメリカの社会・文化・歴史に関する知識を身につけ、その知的伝統を読み解き、分析するための基本的な力。

『技能』

異なった価値観をもつ他者の意見に耳をかたむけ、議論を通じて考察すべき問題の所在を的確に掴み、解決までのプロセスを実践する能力。

『態度・志向性』

さまざまな情報やものごとを批判的に考察し、なによりも自分自身の思考によって問題の解決を模索し、共存や共生の道を探る姿勢。

【北欧学科】

文化社会学部北欧学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文化社会学）」を授与します。

『知識・理解』

北欧社会の先進的な取り組みに関する知識・理解。

北欧の文化や歴史の特質に関する知識・理解。

『技能』

北欧語を用いて意思疎通ができるコミュニケーション技能。

北欧語等外国語や日本語で自らの考えを発信できる技能。

『態度・志向性』

物事を批判的に考察し、自律した多様な生き方を構想する姿勢。

社会課題の解決や文化芸術の発展に積極的に取り組む姿勢。

【文芸創作学科】

文化社会学部文芸創作学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士「文化社会学」」を授与します。

『知識・理解』

文芸の創作と批評を通じて、人と社会のありかたを柔軟に理解し、正確に分析し、問い直していく力。

『技能』

文芸の創作と批評を通じて、自分を取り巻く状況と自分の考えを、論理的かつ表現力豊かに言語化していく能力。

『態度・志向性』

文芸の創作と批評、そして諸芸術から学んだ豊かな教養を生かして、魅力ある未来を自己と社会の両面にわたって構想していく態度。

【広報メディア学科】

文化社会学部広報メディア学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（文化社会学）」を授与します。

『知識・理解』

メディアに関する理論的・歴史的・制度的な研究成果を土台として、メッセージの社会的価値（政治的・経済的・文化的価値など）とは何かを理解する力。

『技能』

各メディアに関する基本的な機能・効果の利活用能力と実践・創造的技術を身につけ、「情報」を社会的価値の高い「メッセージ」に変える能力。

『態度・志向性』

現代社会を構成する人々の多様性・包摂に対するメディアの寄与を理解し、未来のメディアやコミュニケーションの「使命」「役務」を構想していこうとする姿勢。

【心理・社会学科】

文化社会学部心理・社会学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（文化社会学）」を授与します。

『知識・理解』

- 心理学についての専門的知識の理解。
- 社会学についての専門的知識の理解。
- 心理学と社会学の観点からの現代社会の仕組みや課題の理解。

『技能』

- 現代社会の仕組みや課題について、自ら問いを立てる技能。
- 科学的方法論と豊かな感受性にもとづいて、批判的、創造的に考察する技能。
- 考察した内容を主体的に発信する技能。

『態度・志向性』

- 多角的な視点で物事について考える態度。
 - 一人ひとりが違った個性や価値観をもつ個人であることを尊重する姿勢。
- 誰もが希望を持って自分らしく生きることができる共生社会の構築に貢献する姿勢。

教養学部

【人間環境学科】

教養学部人間環境学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（教養学）」を授与します。

『知識・理解』

人間を取り巻く環境に対して自然科学・社会科学・人文科学の視点から基本的内容を理

解し、持続可能な社会の実現に向け、広範な知識を有する。

『技能』

演習や実験に基づく実体験を通して獲得した知識や経験を活かし、持続可能な社会を実現するための問題解決能力を有する。

『態度・志向性』

異なる科学分野の複眼的な視点から知識や経験を蓄積するとともに、持続可能な社会の実現に向けて自ら考え行動する力を有する。

【芸術学科】

教養学部芸術学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（教養学）」を授与します。

『知識・理解』

人文・社会・自然科学に関わる広い視野からの、芸術に関する知識と理解。

『技能』

変化する現代社会の状況を理解し、修得した芸術の技能を柔軟に活かす能力。

『態度・志向性』

問題発見・解決に向けた社会的役割を自覚し、音楽・美術・デザイン等の専門領域を統合し、創造的な場面において積極的に行動しようとする姿勢。

児童教育学部

【児童教育学科】

児童教育学部児童教育学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（児童教育学）」を授与します。

『知識・理解』

子どもとそれを取り巻く社会状況及び教育・保育の役割を理解するとともに、子どもの発達と学びを適切に支えることができる基礎的な知識を有している。

『技能』

個々の子どもの発達と学びを総合的かつ連続的に捉えるとともに、適切な教育・保育を構想し、それを実践することができる。

『態度・志向性』

子どもを取り巻く課題に他者と協働して取り組み、新たな価値を創出することで、子どもの健やかな成長を支える共生社会の発展に貢献することができる。

体育学部

【体育学科】

体育学部体育学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（体育学）」を授与します。

『知識・理解』

- 身体教育学に関する知識。
- スポーツの人文社会科学に関する知識。
- スポーツの自然科学・医科学に関する知識。
- 以上の知識が学校における体育や保健、世界共通の文化であるスポーツを発展させるものであるという理解。

『技能』

- 身体教育学およびスポーツ科学の知識を介して様々な情報や知識を複眼的、論理的に分析・表現する技能。
- 理論的知見に立脚した指導を遂行する技能。

- 他者と合理的なコミュニケーションを図りつつ、協働して研究を遂行する技能。
- 『態度・志向性』
- 身体教育やスポーツ文化の指導的後継者であるという自覚に立脚した倫理感や社会的に責任ある態度。
 - 他者との協働を通じて問題解決を目指す志向性。

【競技スポーツ学科】

体育学部競技スポーツ学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（体育学）」を授与します。

『知識・理解』

- 競技スポーツおよびスポーツ科学における専門的知識。
- 競技スポーツにおけるアスリート、コーチ、トレーナーに求められる専門的知識。
- 現代社会におけるアスリート、コーチ、トレーナーの使命と役割の理解。

『技能』

- アスリートとして、“実戦”重視の教育から身につけた理論を実践する技能。
- コーチとして、“実戦”重視の教育から身につけた理論を実践する技能。
- トレーナーとして、“実戦”重視の教育から身につけた理論を実践する技能。
- 競技スポーツにおける問題を発見し、解決する技能。

『態度・志向性』

- アスリート、コーチ、トレーナーとしてリーダーシップを発揮しようとする態度。
- 競技スポーツを通して社会に貢献しようとする志向性。

【武道学科】

体育学部武道学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（体育学）」を授与します。

『知識・理解』

- 体育およびスポーツ科学に関する専門的知識。
- 武道学に関する専門的知識。
- 現代社会における武道の役割、武道伝道者としての使命についての理解。

『技能』

- 武道の実践を通して身につけた技術をもとに、国内外に日本独自の伝統技能を普及、発展させうる能力。
- 武道の実践で得た経験を活かし、社会の変化に応用することができる能力。

『態度・志向性』

- 礼節を尊び武道の精神（心技体）を活かし社会に貢献することができる能力。
- 武道の伝統を尊重し、広く国際的な発展に貢献しうる能力。
- 過去と現代を比較し、武道に関する諸問題を解決する能力。

【生涯スポーツ学科】

体育学部生涯スポーツ学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（体育学）」を授与します。

『知識・理解』

- 生涯スポーツに関する専門的知識。
- 生涯スポーツによる健康の維持・増進と生活の質（QOL）の向上に関する知識。
- 生涯スポーツの支援に関する知識。
- 体育及びスポーツ科学に関する専門的知識。

『技能』

- 多様なライフステージや特性に合わせて、生涯スポーツを実践・指導・支援する技能。
- 多様なスポーツを指導し、健康を維持・増進する技能。
- 健康を維持・増進する環境を整備する技能。

『態度・志向性』

- 生涯スポーツの実践者、支援者、指導者として高い倫理観を持ちながら、優れたコミュニケーション能力とリーダーシップを発揮しようとする態度・志向性。
- 生涯スポーツの実践者、支援者、指導者として、生涯スポーツの発展と啓発に貢献し、生涯スポーツ社会を創出しようとする態度・志向性。

【スポーツ・レジャーマネジメント学科】

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（体育学）」を授与します。

『知識・理解』。

- 人間の文化としてのスポーツ・レジャーに関する専門知識。
- スポーツ・レジャーのマネジメントに関する専門知識。
- 国際感覚を備えた実践的な経験から学ぶ専門知識。

『技能』

- スポーツ・レジャーを通じた社会課題の解決や新たな価値の創造を可能にする科学的なマネジメント技能。
- スポーツ・レジャーを通じた社会課題の解決や新たな価値の創造を可能にする実践的なマネジメント技能。

『態度・志向性』

- スポーツ・レジャーという世界共通の文化を学び続ける態度。
- 人間の幸福やゆとり、クオリティ・オブ・ライフ（QOL）を構築し続けようとする志向性。

健康学部

【健康マネジメント学科】

健康学部健康マネジメント学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（健康マネジメント学）」を授与します。

『知識・理解』

健康を多角的に捉える知識・技術とデータ分析・コミュニケーションの方法を活用し、未来の健康社会の実現に必要な実践的な能力を有している。

『技能』

健康をマネジメントするために、多角的な知識・技術・方法を活用し、連携と協働ができるネットワークを築き、創造的な解決策を見いだすことができる。

『態度・志向性』

誰もが自分らしく過ごすことができる未来の健康社会の実現に向け、積極的に協力することができる。

法学部

【法律学科】

法学部法律学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（法学）」を授与します。

『知識・理解』

法学についての知識、時代の変化に対応する法の役割を理解・表現する基礎能力。

『技能』

社会的諸問題を法的に分析し、解決方法を構築・提示・説明することのできる基礎的な法的技能。

『態度・志向性』

人間の尊厳と人権の尊重を基調とする現代の社会において、多様な価値観を受入れ、多角的視野の下、インクルーシブかつ平等で平和な社会を志向し、自らそのような社会の形成・発展に貢献できる能力。

政治経済学部

【政治学科】

政治経済学部政治学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（政治学）」を授与します。

『知識・理解』

政治学の知識を活用し、政治現象を制度と現実の両面から理論的に考える能力。

行政学の知識を活用し、政治現象を制度と現実の両面から理論的に考える能力。

国際政治学の知識を活用し、政治現象を制度と現実の両面から理論的に考える能力。

『技能』

国内外の政治・行政の現象を客観的かつ多面的に分析する能力。

政治・行政・国際政治の制度と政策を分析する能力。

『態度・志向性』

グローバル社会において創意をもって現実の諸問題に取り組む姿勢。

政治学科で学んだ専門知識・技能を活用して問題解決策を提案する能力。

【経済学科】

政治経済学部経済学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（経済学）」を授与します。

『知識・理解』

経済現象を理論的に理解し分析することができる。

『技能』

経済現象をデータに基づき解析することができる。

『態度・志向性』

経済問題に対して積極的に改善策を提言することができる。

経営学部

【経営学科】

経営学部経営学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（経営学）」を授与する。

『知識・理解』

経営学の「戦略・組織」、「マーケティング」、「アカウンティング&ファイナンス」、「マネジメントシステム」、「IT・データ分析」についての専門知識および理論の習得・理解。

『技能』

経営学およびデータ分析に関連する専門知識や理論を土台に、経営の諸課題を見出す力、解決の道筋を繰り返して思考する態度と解決に向けて行動する力、そして多様な変化に対応するために、既成概念にとらわれずに課題解決に向けたプロセスの設計を行うデザイン思考力。

『態度・志向性』

グローバル、すなわち俯瞰的、国際的、複眼的な視点からビジネス活動に参画できる能力と、既成概念にとらわれずに問題解決に向けて強い意志をもって行動していく姿勢。

国際学部

【国際学科】

国際学部国際学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（国際学）」を授与します。

『知識・理解』

- (1) 国際関係の歴史理解を基盤として現代の国際的・社会的諸問題について詳しく学び、国際学の基本的な学識を身に付け、地球規模の多様な課題を理解することができる。
- (2) 特定の立場に偏らない幅広い観点から適切な情報を収集・調査し、国際学の多角的視点を理解することができる。

『技能』

- (1) 地球規模の課題を理解するための社会科学の分析手法を習得し、現代世界の政治・経済・社会・文化等様々な事象の背後にある原因やメカニズムについて論理的に考察して課題解決までのプロセスを構想することができる。
- (2) グローバル社会で多様な人々と言語・文化の違いを超えて協働するためのコミュニケーション力を有している。

『態度・志向性』

グローバル市民としての自覚をもち、地域社会から国際社会に至るさまざまなレベルの課題に対して、相手の立場や背景も考慮しながら高い倫理観をもって多様な人々と協力しながら積極的かつ主体的に取り組む姿勢を身につけている。

観光学部

【観光学科】

観光学部観光学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（観光学）」を授与します。

『知識・理解』

観光と密接に関連する文化・社会・自然の多様性及び観光に関する体系的かつ広範な知識を有し、それらを問題の発見・解決に実践的に応用できること。

『技能』

観光・サービス産業の場で様々な問題の解決に役立てるためのコミュニケーションスキル、情報リテラシー、論理的思考力などの基本的技能を身につけていること。

『態度・志向性』

観光・サービス業の発展に寄与するために必要な自己管理能力、協調性、社会的責任感を身につけていること。

『総合的な学修経験と創造的思考力』

獲得した知識、技能及び態度・志向性を総合的に活用し、観光・サービス産業及びその研究分野に関して自らが立てた課題にそれらを適用し、その解決を図り、新たな価値の創造を目指すことができること。

情報通信学部

【情報通信学科】

情報通信学部情報通信学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士(情報通信学)」を授与します。

『知識・理解』

- 高度情報化社会が要求する“多様な情報通信技術の基礎的理解”。
- 柔軟に社会における諸課題に対応するために必要な“先端的情報通信技術の専門知

識”。

『技能』

- 情報通信技術の駆使を含めてグローバル社会で活躍できる”コミュニケーション力の技能”。
- 他分野・他者と協働することができる”リーダーシップ・コーディネート・計画力の技能”。

『態度・志向性』

- 情報通信技術者としての”使命感、責任感、倫理観をもって行動する姿勢”。
- 高度情報化社会のあり方を”総合的に把握し、自ら考え行動し、解決を目指す態度・志向性”。

理学部

【数学科】

理学部数学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（理学）」を授与します。

『知識・理解』

数学に関する基礎的知識。

専門的な数学に対応できる基礎的理解。

『技能』

数学の最新の研究動向を理解し、正確に認識できる技能。

数学を含めた科学、さらに理学を含めた文化を総合的に理解できる技能。

『態度・志向性』

自由な精神のもとに数学に対する研究心を持ち続け、現代社会の様々な分野において数学特有の論理的思考法で諸問題に対処できる能力を有している。

【情報数理学科】

理学部情報数理学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（理学）」を授与します。

『知識・理解』

数学と情報に関する基礎知識、専門性に対応できる基礎力を有している。

『技能』

数理と情報についての思考力を身に付け、蓄えた知識を応用することのできる能力を有している。

『態度・志向性』

現実世界の様々な現象や情報を幅広く収集・解析し、人と協力して問題に対処する能力を有している。

【物理学科】

理学部物理学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（理学）」を授与します。

『知識・理解』

物理学への知的探究心を持ち、多種多様な自然現象の源である物理法則を理解する基礎力を有している。

『技能』

物事の本質を知る習慣と能力を身に付け、先端科学・技術につながる科学的かつ総合的思考力を有している。

『態度・志向性』

自ら考える力を持ち、他者と協力しながら地道に問題を解決していく力を有している。

【化学科】

理学部化学科では、以下の能力を備えていると認められる者に、学位「学士（理学）」を授与します。

『知識・理解』

化学分野に関する専門知識

専門的な日本語および英語の教科書や文献を正確に理解し、学んだ化学の知識を活かし、物事を深く観察し洞察する力。

『技能』

化学を通じて問題を発見し、解決する技能

実験を通じて多様な技能を習得し、実際の問題解決に応用できる技能。

『態度・志向性』

探求心を持ち、論理的かつ客観的に思考し、実験や観察を通じて事実を追求する態度
自らの意見を整理し、相手の考えを尊重しながら、社会の中で協調して生きる力。

情報理工学部

【情報科学科】

情報理工学部情報科学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

理学と工学の両面から情報に関する幅広い基礎知識と人工知能、計算科学、数理工学、情報計測・可視化等に関する専門知識をあわせ持ち、さらに現代社会における様々な課題、ニーズを柔軟に理解する能力を有している。これらの知識は、理工系基礎科目や情報科学共通科目、AI・計算科学・数理工学分野および情報計測・可視化分野の各科目を通して修得する。

『技能』

情報分野の技術を応用し、時代の多様なニーズに対して理学および工学的な立場から解決策を見出すことができる。これらの技能は主に、情報技術者基幹科目およびコンピュータ実習科目を通して修得する。

『態度・志向性』

情報技術者のモラルと使命を理解し、情報分野の理学および工学的な発展に寄与し、社会に貢献することができる。

【コンピュータ応用工学科】

情報理工学部コンピュータ応用工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

情報工学に関する幅広い基礎知識と「コンピュータシステム」、「知能ロボット工学」等に関する専門知識をあわせ持ち、さらに現代社会における様々な課題、ニーズを柔軟に理解する能力を有する。

『技能』

情報分野に関するソフトウェアおよびハードウェア技術を応用し、時代の多様なニーズに対して情報工学的な解決策を見出すことができる。

『態度・志向性』

情報技術者のモラルと使命を理解して、情報分野におけるソフトウェアおよびハードウェア技術の発展に寄与し、社会に貢献することができる。

【情報メディア学科】

情報理工学部情報メディア学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

情報理工学に関する幅広い基礎知識。

メディアコンテンツ分野に関する専門知識。

メディアコミュニケーション分野に関する専門知識。

『技能』

情報メディアの専門知識を社会が直面する多様な課題の解決に応用する技能。

『態度・志向性』

情報分野の技術者・研究者としての使命と責任を自覚し、自分の持つ知識と技能をもって社会に貢献しようとする高い倫理観と主体的な姿勢。

建築都市学部

【建築学科】

建築都市学部建築学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

都市・建築空間創出のための「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」に関する3つの専門知識。

『技能』

3つの専門力「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」を基盤として様々な分野との協働により問題解決に向けて実践していくための汎用的技能。

『態度・志向性』

文系・理系の枠にとらわれず、新しい視点を持って地域と社会の発展に継続的に寄与しようとする態度。

【土木工学科】

建築都市学部土木工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

幅広い教養を身に付け、社会や自然における土木技術の役割をしっかりと理解し、土木工学分野の基礎知識を持つと共に、専門分野の土木技術の知識と技術を持つこと。

『技能』

土木工学の専門知識と専門的技術を活用し、都市が抱える諸課題に対して土木技術者として挑戦する実践力を持つこと。

『態度・志向性』

土木技術を駆使した安心安全で豊かな国土を創造し、持続可能な都市の実現のあり方を自ら考えるとともに、身に付けた技術力をもって、地域の発展に還元する姿勢を持つこと。

工学部

【航空宇宙学科 航空宇宙学専攻】

工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

航空工学、宇宙工学および宙空環境科学の基礎理論と応用技術を体系的に理解し、航空機、ロケット、人工衛星などの設計・開発・運用に必要な専門知識を修得していること。特に流体力学、材料力学、熱力学、応用力学などの基盤となる学問分野と、それらを統合した航空宇宙システム全体についての深い理解を有すること。

『技能』

航空宇宙分野が直面する社会的課題（新産業創出、環境負荷の低減、極限環境における安全性と信頼性の確保など）に対して、専門知識を応用し、先端的な ICT 技術の活用能力、およびグローバルな環境で活躍するための英語コミュニケーション能力を駆使して、創造的な解決策を導き出せること。また、複雑な問題に対して論理的思考力を発揮し、チームの一員として効果的に協働できること。

『態度・志向性』

国際的な視野と豊かな人間性を持ち、航空宇宙分野の急速な技術革新に対応するために自律的・継続的に学修する姿勢を有すること。多様な実験を通じた実証的探究力を磨き、科学的検証を重視する姿勢を身につけていること。高い倫理観と社会的責任感をもって、人類の活動領域の拡大と持続可能な発展に貢献しようとする志を持ち、科学技術の発展を主体的に担う意欲を有すること。常に問題意識を持って新たな課題に挑戦し、社会変革の担い手として自らのキャリアを開拓する姿勢を身につけていること。

【航空宇宙学科 航空操縦学専攻】

工学部航空宇宙学科航空操縦学専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

航空機操縦と運航に関する知識と技術の修得および応用力、ならびに英語力。

『技能』

新しい技術・変わりゆく環境に、自ら積極的に思考し、対応していく力。

『態度・志向性』

社会の負託に応える使命感と信頼される人間性。

【機械工学科】

工学部機械工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

機械工学を学ぶ上で必要とされる幅広い基礎知識と技術を持つと共に、素材から応用に至るまで機械工学全般に関わる専門知識と技術を持つこと。

『技能』

機械工学全般に関わる専門知識とアクティブラーニング科目や卒業研究などの実践的教育を通して修得した実践力を活用し、自ら積極的に課題解決できる力を持つこと。

『態度・志向性』

技術者としての倫理感を持ち、機械工学に関連した基礎知識とその応用力・実行力を基に、多角的な視点から継続的に新しいものづくりに貢献する意識を持ち続けること。

【機械システム工学科】

工学部機械システム工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

機械システム工学の基礎知識を持つと共に、それらの知識をロボットやモビリティといった具体的な機械システムの創造に向けて適用・展開する応用力を持つこと。

『技能』

解決しようとする問題の本質を正しく理解し、問題解決に向けた道筋を描くと共に必要な実験手段・方法を選択し、得られた結果に対する解析・考察を与え、さらには結果を他者に伝達するための発信力を持つこと。

『態度・志向性』

多様な価値観や文化的背景を持つ人々と効果的に協働していくために必要な寛容性、積極性、倫理観および語学力、そして今見える未来ではなく、その先の更なる未来を思い描く探究心を持つこと。

【電気電子工学科】

工学部電気電子工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

電気電子工学及び情報・通信工学の分野に関する専門知識。

電気電子工学及び情報・通信工学の分野についての体系的な理解。

『技能』

問題解明のために能動的に調査や実験等を実施し、得られた情報やデータを多面的かつ論理的、定量的に分析でき、その結果を説明する技能。

問題解明の過程で見出した課題を解決するために、主体的に方策を立案し、提示する技能。

『態度・志向性』

社会の一員としての倫理観を身に付け、客観的事実やデータ等に基づいて自分の考えや意見を述べることができる。また、他者の意見に耳を傾け、他者と協働して目標に向かって踏み出すことができる。

【医工学科】

工学部医工学科では、以下の能力を十分備えたと認められる者に学士「工学」を授与します。

『知識・理解』

先端医療技術、医療機器、医用システムの原理や生体機能・生体情報の工学的評価法を理解し、応用できる基礎学力。

『技能』

医療技術と医療機器・システムの技術進歩に柔軟に応じて、これらを安全かつ有効に管理・操作する力。また、生体医工学の発展に寄与するために、医療機器や医用システムを開発したり、生体機能・生体情報の解析・応用手法を企画立案したりする基礎力。

『態度・志向性』

工学の規範に即した志と倫理観を有すること。また、確かな専門知識・技術をもって社会変化の中に課題を発見し、論理的な分析と考察を加えて問題解決を図る態度。さらに、チーム医療に必要な専門性に基づく関係を円滑に構築できるコミュニケーション力と、相互に意図・考え方を理解・尊重して適切に伝えようとする態度。

【生物工学科】

工学部生物工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

生物学および化学の基礎知識、および、それらを医薬品や食品などに応用するための専門知識。

『技能』

実験科目、および、卒業研究・ゼミ科目等の学びを通して修得される生物学・化学の分野の技術・技能を実践する能力。

『態度・志向性』

生物学および化学の分野の知識と技能を総合的に活用し、倫理的規範に則り、課題を発見・解決して社会に貢献できる姿勢。

【応用化学科】

工学部応用化学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

社会の発展とグローバル化する社会情勢に対応し得る教養と知識を身につけ、多様化する科学技術を自らが培った化学的知識を駆使し理解できること。

『技能』

産業界で活躍するために必要な化学技術者としての技能を修得し、多様な諸問題を解決し得る能力とスキルを持つこと。

『態度・志向性』

修得した化学的知識や技能を人類の発展や社会の問題解決に活かし、グローバルな視点に立脚しながら知識や技能に対して継続した研鑽と獲得する態度を持つこと。

医学部

【医学科】

医学部医学科では、掲げる 6 つのコンピテンスに沿って、以下の資質・能力を備えたと認められる者に学位「学士（医学）」を授与します。

『知識・理解』

1. 豊かな教養と基礎医学・臨床医学の知識
 - 幅広い教養知識と、正常な構造・機能、病態生理および各疾患の診断・治療・予防に関する知識を修得し、科学的根拠に基づいて臨床へ応用できる。
 - 医療・医学の分野における情報科学や研究手法を理解し、新たな医学的知見を探究できる。
2. 社会的役割と国際的視点の理解
 - 医師の法的責任や医療制度・社会保障制度を理解し、地域医療・公衆衛生へ貢献できる。
 - 異なる文化や社会情勢に対応し、国際的な医療・医学情報を活用できる。

『技能』

1. 論理的思考力・批判的分析力
 - 医学的課題を的確に発見し、論理的・科学的に分析できる。
 - EBM (Evidence-Based Medicine) を活用しながら治療方針を立案できる。
2. 医療実践技能とチーム連携
 - 医療面接や身体診察、基本的な検査・手技を適切に行い、鑑別診断と治療計画を立案してプレゼンテーションできる。
 - 多職種連携（チーム医療）を実践して、互いの専門性を活かして協働できる。
3. コミュニケーションと教育・啓発の技能
 - 患者や家族の多様性や背景を理解して良好な信頼関係を構築し、病状説明や患者教育に参画できる。
 - 医療者・学生・市民への教育・啓発活動に寄与し、予防医学や健康増進に貢献できる。

『態度・志向性』

1. プロフェッショナリズムと自己管理
 - 常に生命の尊厳を尊重し、品格・礼儀をもって他者に接し、科学とヒューマニズムの融和の精神に基づいた行動ができる。
 - 医療安全を最優先に考え、自己の心身の状態を省察してアンプロフェッショナルな行為を自制できる。
2. 生涯学修・研究意欲
 - 高い探究心と倫理観をもって医学研究に参画し、医学の発展に貢献できる。
 - 社会や医療の変化に対応し続けるため、生涯にわたって自己研鑽を継続できる。
3. グローバルで多様性を尊重する姿勢
 - 医学英語を学修して国際的視点で医療・医学を捉え、人種・民族・宗教・ジェンダーなど多様性を尊重したコミュニケーションを実践できる。
 - 海外研修や留学、国際的な共同研究などを通じて、幅広い文化や価値観に柔軟に対応できる。

【看護学科】

医学部看護学科では、大学・学部の学位授与の方針に従い、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（看護学）」を授与します。

『知識・理解』

生活、人間、健康、地域・社会、環境、看護に関する専門的知識の理解ができる。

『技能』

コミュニケーション力、問題解決能力を基盤とし、対象に適した看護実践上、求められる対応策を見出すことができる。

『態度・志向性』

「その人らしい健康な生活を支援する看護」を実践するために、自ら学び、国内外で貢献しようとする力を有している。

海洋学部

【海洋理工学科 海洋理工学専攻】

海洋学部海洋理工学科海洋理工学専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（海洋学）」を授与します。

『知識・理解』

海洋を中核とする地球システム上で生起するさまざまな時空間スケールの諸現象を、物理学・化学・生物学を基礎とする自然科学に関する知識の修得を通して、その成因、進化、時空間構造とその変化を理解できる。海洋開発のための浮体技術、水中技術、計測技術を俯瞰して理解できる。そして、海洋環境と海洋開発の双方に配慮した持続可能なアプローチを理解できる。

『技能』

海洋・地球の自然科学および工学の専門的知見と多様な方法論の修得を通して、ICT を活用し、情報を収集・分析することができる。また、科学的根拠に基づいてその情報を可視化し、論理的に伝えることができる。

『態度・志向性』

確固たる自然科学の基礎知識に裏付けられた海洋に関する専門的知見に基づいて、自然現象と人類社会の調和について考察し、さまざまな問題に対してその背景を理解した上で前提を疑い、合理的な根拠に基づいて議論できる。

【海洋理工学科 航海学専攻】

海洋学部海洋理工学科航海学専攻では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（海洋学）」を授与します。

『知識・理解』

海（自然現象、気象、海象など）に関する科学的な基礎知識と、船を運航・管理するために必要な海事に関する基礎知識を併せ持ち、さらに海技士としての専門分野での応用的知識を有している。

『技能』

海技従事者としての専門分野における最新の知識・技術に精通することを通して、具体的な問題に対する対処・解決の方策を導き出せる。

『態度・志向性』

海運界や海事関連産業で海技従事者として活躍するために必要となる国際感覚を備えたリーダーシップを発揮できる力を有している。

【水産学科】

海洋学部水産学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（海洋学）」を授与します。

『知識・理解』

水産全般にわたる科学的な基礎知識を基盤とし、水産資源を含む海洋資源の保全と、その持続可能な形での利用のため、以下①～⑤に示す、水産資源の保全・増養殖から食品等への利活用に至る先端的な知識や技術を有する。

- ① 水生生物・水産・自然科学に関する基礎知識・技能。
- ② 希少・深海生物を含む水産資源とその増養殖の専門知識。
- ③ 水産資源の持続的利用及び海洋生態系の保全。
- ④ 水産化学の基礎知識及び食品・医薬品等への応用。
- ⑤ 安全安心な食品製造及び高付加価値の食品開発。

『技能』

水産基礎・応用教育を通じて様々な知識を修得し、その体现である実験や実習、卒業研究を介して以下①、②に示す技能を、実社会で普遍的に活用できる論理的な思考力と実践力を有する。

- ① データ解析し課題解決する技能。
- ② 意図や情報を明確に伝える技能。

『態度・志向性』

市民として社会の発展のために寄与できる以下①～③に示す態度・志向を有する。

- ① 状況に応じた目標・計画を設定する態度。
 - ② 周囲と協調し目標に向かう態度。
- 適切な倫理観を持って判断する姿勢。

【海洋生物学科】

海洋学部海洋生物学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（海洋学）」を授与します。

『知識・理解』

多様で多彩な海洋生物とそれらを取り巻く環境について正しい知識と深い理解を有する。

『技能』

我々が直面する局地的あるいは地球的規模の生物多様性の危機や環境問題の解決に取り組むことができ、広く社会に貢献するための情報リテラシー能力（知る・書く・伝える力）を有する。

『態度・志向性』

幅広い視野で物事を理解し、知識と経験を活用することによって多種多様な海の生き物と人間との共生を目指し、積極的に新しい知識を吸収し、将来を見据えて社会のために貢献する社会的責任感を有する。

人文学部

【人文学科】

人文学部人文学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（人文学）」を授与する。

『知識・理解』

人文学の基礎知識を理解するとともに、現代文明の持つ問題について、自らを取り巻く社会的状況と関連づけて具体的に理解できる。

『技能』

人文学の本質を踏まえた上で、社会における多様な取り組みを理解、分析することを通して論理的思考力及び問題の発見と実践的な対処・解決の方策を導き出すことができる。

『態度・志向性』

人文学の学びで培った発想力を基盤にして、各個人が社会の一員として自らの役割と責務を全うする社会的責任感をもって行動にうつすことができる。

文理融合学部

【経営学科】

文理融合学部経営学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（経営学）」を授与します。

『知識・理解』

グローバルな競争の中で、社会面と環境面に配慮しながら、実業界、スポーツ、農業等の多岐にわたる分野において経営学的知識・ツールを獲得することによって、組織及び個人が勝ち抜く能力を有する。

『技能』

経営学的思考方法を学び、経営学、会計学、情報等のツールを身に付けることによって、様々な分野でビジネスプランを作成し実行できる能力を有する。

『態度・志向性』

文理融合的な複眼的視点で、能動的・主体的に自ら経営手法を考え、他者と協働する能力を身に付けながら、経営目標達成のために果敢に取り組む力を有する。

【地域社会学科】

文理融合学部地域社会学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（社会学）」を授与します。

『知識・理解』

- 地域社会の構造と諸問題についての理解。
- 地域観光、心理・広報メディアの分野に関する専門知識。
- 近未来地域づくりをプロデュース・マネジメントできる専門知識。

『技能』

- 地域社会において諸問題の分析・解決を可能にする技能。
- 地域観光、心理・広報メディアの分野において「高度情報化社会における持続可能な近未来地域づくり」を実践する技能。

『態度・志向性』

- 高度情報化社会における最新動向や地域社会の動きに敏感に反応する姿勢。
- 地域づくりに主体的に参画・貢献していこうとする態度。

【人間情報工学科】

文理融合学部人間情報工学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（工学）」を授与します。

『知識・理解』

- 電気電子および情報分野についての専門知識。
- 医療分野についての専門知識。
- 環境保全や応用倫理など社会的課題についての理解。

『技能』

- 電気電子・情報工学および医療工学における専門知識を活用し、多様な問題を解決できる能力。
- 電気電子・情報工学および医療工学に関連するハードウェア・ソフトウェアの仕組みや操作を理解し、問題解決に活用する能力。

『態度・志向性』

- 講義や実験・実習等に積極的に取り組み、知識と技能を修得しようとする態度。
- 自主的かつ創造的に問題解決に取り組む姿勢。

農学部

【農学科】

農学部農学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（農学）」を授与します。

『知識・理解』

- 確固たる自然観・生命観を基に、食料生産を向上させるために必要とされる作物の特徴や栽培管理についての幅広い知識を持つ。
- 天敵昆虫等の有用生物も活用した有機農業や環境保全型農業等、環境に大きな負荷をかけない農業の特徴や課題を学び、持続可能な農業の必要性について理解する。

『技能』

- 農業をとりまく諸問題を検証し、実験を通した証明によって、実践的な対処・解決策を導き出せる能力。
- 地域の特色に合わせた有機農業などの伝統技術を活用し、安全で安定した食料生産を実現する技術。
- 地球規模の食料危機などに対して、DNA 工学を活用した品種改良などの先端的なバイオテクノロジーを応用する能力。

『態度・志向性』

- 複眼的な視点を持ち、人間社会とそれを取り巻く自然の役割や植物の持つ多様な価値を深く理解する姿勢。
- 自らの考えと創造性を持って、自然環境の保全や人類の未来に関して、国際的視野を持った責任ある社会貢献を継続できる態度。

【動物科学科】

農学部動物科学科では、以下の能力を備えたと認められる者に、学位「学士（農学）」を授与します。

『知識・理解』

- 畜産物生産の一連の過程、最新の動物生命科学、人と動物との関係に関するそれぞれの科学的知識を持つ。
- 地域の生態系や、動物および食に関する文化を理解する。

『技能』

- 持続的かつ安全な動物生産、動物にかかわる新たな技術を開発する能力。
- 科学的根拠に基づく人と動物との適正な関係の創出する能力。
- 動物に関する様々な問題に対する実践的な対処・解決の方策を導き出せる能力。

『態度・志向性』

1. 文理融合的な柔軟で幅広い視野で社会を理解する姿勢。
2. 自らの意見を持って、特に動物生産、動物生命科学および、自然環境の保全や人と動物の関係等の分野で責任ある社会貢献ができる態度。

【食生命科学科】

農学部食生命科学科では、以下の能力を備えたと認められる者に学位「学士（農学）」を授与します。

『知識・理解』

生物の特性、生体成分の構造と機能、並びに食品が持つ有効かつ複雑な生理機能について化学的及び生物学的観点から科学的に理解している。さらにそれらの内容を生命現象の解明や健康と食品に関する専門分野で総合的に応用できる知識を有している。

『技能』

生物生産や生物機能を活用する生産関連産業、食品産業、医薬関連産業及びそれらに関連した研究・開発、検査・分析等の分野において、「食品科学関連科目」、「生命科学関連科目」、実験・実習科目及び卒業研究関連科目で培う力を基盤とし、諸問題に対する方策を立案・実行して実践的に活躍できる。

『態度・志向性』

文理融合的な柔軟で幅広い視野で社会を理解し、自らの意見をもって、特に生物生産から食品へ、食品から人類の健康へといった食と健康の分野で責任ある社会貢献ができる。

国際文化学部

【地域創造学科】

国際文化学部地域創造学科では、以下の知識・理解に関する専門知識と能力、技能、態度・志向性を備えたと認められる者に「学士(教養学)」を授与します。

『知識・理解』

- ① 地域社会・経済に関する専門知識。
- ② 健康スポーツ分野に関する専門知識。
- ③ グローカルな地域観についての理解。

『技能』

- ① 専門的な知識を活用し、物事を適切に処理できるマネジメント能力。
- ② 地域社会で生じている問題を特定し、その解決策を見いだせる技能。

『態度・志向性』

- ① リーダーシップ。
- ② 地域社会の課題に対する当事者意識。
- ③ 地域社会で生きていくのに必要な資質(責任感、協調性、正義感)。

【国際コミュニケーション学科】

国際文化学部国際コミュニケーション学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士(教養学)」を授与します。

『知識・理解』

- ① 外国語コミュニケーションに関する専門知識。
- ② 異文化理解に関する専門知識。
- ③ ユニバーサル人材に対する理解。

『技能』

- ① 外国語を使って仕事を成し遂げる外国語運用能力。
- ② 良好な人間関係を築けるコミュニケーション能力。

『態度・志向性』

- ① 他者との違いを理解・受容できる寛容性。
- ② グループワークを通じて仕事を成し遂げる協働性。

生物学部

【生物学科】

生物学部生物学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士(理学)」を授与します。

『知識・理解』

- 生物学に関する広範な基礎知識と個別分野の専門知識。
- 生物に関する利用・応用技術についての理解。
- 生命倫理の諸問題に関する文理融合の視点からの理解。

『技能』

- 知識・技術を応用して具体的な問題に自ら対応できる技能。
- 生物学や自然環境に関する実験やフィールドワークを実践する技能。
- 研究データを適切に管理・分析・説明する技能。

『態度・志向性』

生命倫理を理解し、生物・自然・人間の関わり方を本質を掘り下げて考える態度を有し、

多様な人々と協働して、生物の持続的利用と自然環境維持などの課題に主体的に向き合い、社会に貢献しようとする志向を持っている。

【海洋生物科学科】

生物学部海洋生物科学科では、以下の能力を備えたと認められる者に「学士（理学）」を授与します。

『知識・理解』

- 海洋の生物とそれを取り巻く環境や生態系に関する広範な基礎知識と個別分野の専門知識。
- 水産、海洋環境・生態系に関する利用・応用技術についての理解。
- 生命倫理の諸問題に関する文理融合の視点からの理解。

『技能』

- 知識・技術を応用して具体的な問題に自ら対応できる技能。
- 水産、海洋環境・生態系に関する実験やフィールドワークを実践する技能。
- 研究データを適切に管理・分析・説明する技能。

『態度・志向性』

海洋生物を中心とする生命倫理と生物多様性そして生物資源等について掘り下げて考える姿勢を有し、生物科学の応用によって社会に貢献しようとする志向を持っている

教育課程の編成及び実施に関する方針（公表方法：各学部学科ページに記載
<https://www.u-tokai.ac.jp/education-research/undergraduate-department/>）

（概要）

文学部

【文明学科】

文学部文明学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

文明学科では三つの主専攻科目群が置かれている。

一つ目の科目群では、東西の哲学・思想についての基礎的な素養の体得が目指される。哲学・思想の学習では、何が語られているのかを読み取ることが大事であるが、なぜこの言葉（概念）で表現されなければならないのかを突き止めることが一層重要である。授業では、まず初年次教育科目である「文明学基礎演習」で哲学・思想に触れる手がかりを伝え、それをじっくりと様々な角度から読み取る手がかりを伝える主専攻科目として、教養科目としての「日本思想と文明」「ヨーロッパ思想と文明」、「日本思想」「ヨーロッパ思想」、専門科目としての「日本思想の諸相」「ヨーロッパ思想の諸相」、「日本思想の展開」「ヨーロッパ思想の展開」といった科目を多く段階的に配置している。

二つ目の科目群では、巨大化し複雑に発展してきた現代文明に向き合う力の養成が目指される。そのために、哲学や思想と同様に、初年次教育科目「文明学基礎演習」でこれらの諸問題に触れる手がかりを伝え、主専攻科目においては、科学・宗教・都市・環境・ジェンダーといった様々な視点から情報を提供しつつ、自ら考える手がかりを伝える科目として、「社会と文明」、「現代社会論」などの教養科目、「現代社会論の諸相」、「現代社会論の展開」といった専門科目を多く段階的に配置している。

三つ目の科目群では、文明論・比較文明論的な視野を養うために、初年次教育科目「文明学基礎演習」でこれらの視野に触れる手がかりを伝えたのちの主専攻科目として、「文明論」や「地域と文明」などの教養科目、「文明論の諸相」や「文明論の展開」といった専門科目を多く段階的に配置している。

そして、東西の哲学思想を学習しながら、現代文明の地球規模の問題を身近な生活の中で考え、文明論・比較文明論的な視野を養ったその成果として、「文明学セミナー1・2」および「卒業論文1・2」において研究発表を行う。多様な研究テーマを持ち寄って学生

たちが自主的に発表し、質疑応答し、議論することで、多様性の中で互いを尊重しながら意見を交換する姿勢を学び、こうした研究発表をつうじて、市民の一員として必要な、社会に向けて表現し社会を変革する力を養う。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、文明学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【歴史学科 日本史専攻】

文学部歴史学科日本史専攻が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

歴史学科日本史専攻では、史料読解力や論理的思考力を鍛えると共に、日本史の流れや人々の営みを正しく理解することを目標とし、その実現のため、以下の5点を重視しています。

1つめは、日本史全般についての正確な知識と、バランスのとれた歴史認識を身につけ、現代社会を歴史的な流れの中で考察する力を育成することです。そのために、日本史の主要な流れを学ぶ「日本史概説A・B」や、各時代の歴史についてくわしく講義する時代別通史、各時代の歴史事象により深く踏みこんで解説する時代別特講などの講義科目を開設しています。2つめは、歴史研究の基礎となる史料読解力を身につけた上で、問題を発見し解決する力や、読解・分析・考察の成果を適切な方法で表現できる能力を向上させることです。初年次教育科目のうち、「日本史研究入門」では大学における学修方法や日本史の学び方の基礎を、「日本史基礎講読（漢文）1・2」では史料読解の基礎を、それぞれ修得します。時代別に設けた講読・演習科目群では、少人数教育を徹底して、史料の読解力や問題を発見し解決する力などの修得・向上を図っています。また、卒業論文科目では、こうした能力を基に、学業の集大成として卒業論文の作成に取り組み、自分自身の歴史像を創造する力を鍛えています。3つめは、近年の新しい研究手法を積極的に取り入れ、事物を多角的に分析・表現する能力を育成することです。そのため、絵画・写真などを活用した研究手法を学ぶ「図像資料を読む」や、地域史研究で登場してきた研究手法を学ぶ「地域史演習」などの授業科目を設けています。4つめは、幅広い視点を身につけることです。日本の歴史を世界史との関連で把握する、比較史的な視点を養うために、「東アジア史A・B」「西洋史概説A・B」「考古学概説A・B」や、歴史学科共通科目として設けられている「歴史の見方」の履修を勧めています。5つめは、学校教員や博物館学芸員の育成です。日本史専攻で学んだことを活かせるよう、教育実習の事前指導と事後指導の充実・徹底を図るとともに、学芸員の実務を学ぶ「史料管理学演習」などの実践的な科目を設けています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、歴史学科日本史専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【歴史学科 西洋史専攻】

文学部歴史学科西洋史専攻が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課

程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

特色として以下の6点が挙げられます。

- ① 西欧（イギリス、ドイツ、フランス）と地中海世界（ギリシア・ローマ、ビザンツ）を特色とする西洋史教育。
- ② 現代世界とそこでの日本の役割を「歴史」の視点から学ぶ。
- ③ 少人数教育によって、批判的思考力と自己表現力を養う。
- ④ 外国語能力の向上を目指す。
- ⑤ 国際人として活躍できる人材の養成。
- ⑥ 学校教員や博物館学芸員の養成。

①について、西欧や地中海世界の諸国家・地域を科目名とする講義とゼミナールを開講すると同時に、各種のテーマ史（政治、社会、民衆、文化、思想など）の授業を通じて、西洋史の多彩な諸相に迫ります。

②について、現代世界の位置付けをよりよく理解するために、「西洋近代史A・B」、「西洋現代史A・B」の講義を置く一方、各国史の中でも近現代史の講義・ゼミナールを多く開講します。

③について、初年次の入門ゼミナールや各国家史・テーマ史ゼミナールにおいて、少人数教育を徹底させ、課題と主体的に取り組むことによって批判的思考力を、発表や討論を通じて自己表現力・コミュニケーション能力を向上させることを目指します。

④について、西洋の社会と文化を深く理解し、歴史学習の基礎となる外国語の習得を重視します。英語のほかにもドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語の授業を開講する一方、専門科目のゼミナール授業ではこれら第2外国語も含めた外国語文献をテキストとして取り上げます。

⑤について、異文化社会としてのヨーロッパやアメリカに直接触れ、その特質を理解することを目的として、「ヨーロッパ・アメリカ実地研修」を設置しています。また、ヨーロッパ・アメリカをはじめとする世界各地の大学で学ぶために、東海大学海外派遣留学制度の活用を強く推奨しています。

⑥について、西洋史専攻で学んだことを生かせる職業として、中学校社会、高等学校地理・歴史の教員や、博物館・美術館等の学芸員があるので、各種の関連講義を開講するほか、資格取得を希望する学生を対象にセミナー等の発展的な指導をすることによって、教員や学芸員の養成を目指します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、歴史学科西洋史専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【歴史学科 考古学専攻】

文学部歴史学科考古学専攻が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本専攻の専門教育課程の特色は、考古学基礎科目・同発展科目・同実践科目・同卒論科目を科目群として設置し、①初年次から4年次まで時間をかけて考古学の基礎から高度な専門知識まで幅広く体系的に学べる点、②専攻で修得した知識や技術を生かして考古学関連分野への就職を目指す人材を育成できる点、にあります。

①については、基礎科目→発展科目・実践科目→卒論科目という段階的な履修が可能となるよう、カリキュラムが編成されています。1年次には、基礎科目である「考古学研究入門A・B」「日本考古学概説」「外国考古学概説」などを履修し、考古学の基礎的な知

識を習得するとともに、考古学は研究対象とする時間・空間に制限がないことや、現代社会との密接な関係性や情報発信の重要性を持つ学問であることを学びます。

2・3年次は、考古学専攻の基礎固めと成長の段階として位置づけられます。この期間に、発展科目の中から自由に科目を選択することで、地域・時代・テーマを広く見据え、自身の課題を主体的に発見し掘り下げる力を養います。「日本考古学特講A～E」では日本列島に重点を置き、身近な地域の歴史・文化・自然環境への理解を深めます。「外国考古学特講A～E」では、海外の様々な事例を通して、人類史に関する幅広い教養を身につけます。また、「日本考古学演習A～E」「外国考古学演習A～E」などの演習形式の授業を通じて、発表や討論を重ねることで、批判的・論理的思考力を鍛え、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の向上を目指します。さらに実践科目では、遺跡の測量や発掘を通じて、考古学のフィールドワークに必要な知識や技術を実践的に学びます。

3年次の秋学期からはゼミに分かれ、特定の指導教員の下で卒業論文の準備に取り掛かります。「卒業論文基礎1」「卒業論文基礎2」を履修することで、自身の課題や問題意識をゼミ内での発表や議論を通じて明確化させます。また、これらの授業を通して、自らの課題を論理的に分析・考察する力を鍛えます。こうした取り組みは、最終的に4年次の秋学期に「卒業論文」として結実させます。「卒業論文」は、4年間にわたる段階的な学修の成果を示すものです。これまでの学修で培った人類の叡智に対する歴史認識を基に、専門分野の課題を論理的に分析・考察し、自らの見解を積極的に発信する手段として、論文形式でまとめます。

②について、考古学に関連する専門職として、地方公共団体や公益法人などの調査組織で埋蔵文化財行政に従事する専門職員や、博物館に勤務する学芸員が挙げられます。これらの職に就くためには、埋蔵文化財に関する専門知識や実務経験、さらに学芸員資格が必要です。2年次以降には、実践科目である「考古学実習1・2」や「資料分析法演習」をすべて履修することが求められるほか、学芸員資格に関連する科目の履修も必要となります。これらを通じて、考古学の専門知識や技術を身につけ、専門家に必要な基礎的能力を養成することを目指します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、文学部歴史学科考古学専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【日本文学科】

文学部日本文学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修成果』

本学科のカリキュラムは日本文学と日本語学とを二本の柱とし、初年次教育から卒業論文にいたるまで、講義系科目と演習系科目とを学期ごとにバランスよく配置しています。これは、まず講義系科目において十分な知識を身につけ、続く演習系科目でその知識を活かして自ら調査・検証し、自身のことばで文章にまとめ発表するというサイクルを繰り返すことで、着実なステップアップをはかるとともに、知識を実践的に用いる力を獲得してゆくことを意図したものです。また、本学科では中学校・高等学校の国語科教員の養成を大きな目標の一つとしており、中学・高校の学校現場での授業運営に活かせるアクティブラーニングを、初年次教育の段階から積極的に取り入れています。

具体的には、初年次科目の「入門ゼミナールA・B」を通して大学における学び方の基礎を身につけるとともに、日本文学科での学びを生かした将来のキャリア設計や、個人発表・グループワークを通して協働的な学習のやり方を学びます。また「日本文学史1・2」「古典文学講読1・2」「近・現代文学講読1・2」「日本語学概論1・2」などの講義科

目によって、古代から現代までの文学および日本語について、基礎的・通史的な知識を身につけられるようになっていきます。さらに日本語学については「日本語学入門」を設定し、「日本語学」の学問としての面白さをより深く学べるようにしています。続いて二年次には、「日本文学概論1・2」「近・現代文学史」などにおいて通史的・総合的な知識を学ぶとともに、各時代・分野の「研究」科目（春学期に「研究1」、秋学期に「研究2」）において、それぞれの分野に関するより専門的な研究方法を学び、発表活動を通じてコミュニケーションやプレゼンテーションの力を伸ばす授業が設定されています。さらに三年次の「特講」科目において、各分野に深化した専門的知識と研究方法とを身につけてゆきます。そして、三年次の秋学期からはじまる「卒業論文プレゼミナールA・B」「卒業論文1・2」を通じて、これまで身につけてきた知識と能力を最大限に活用した卒業論文の執筆を、カリキュラムの到達点として設定しています。

これらの課程の中には、幅広い知識や最新の研究方法の能力を獲得するとともに、多様かつ多角的な視野を身につけられる「写本にふれる」「現代社会と日本語」「文学と子ども」といった科目、あるいは文学を知識だけではなく体感的に学ぶ授業として「日本の詩歌」「日本文学実地踏査」などを配置しています。また「指定ユニット科目」を受講することで、文学や思想についての知識を補い、またそれを言語活動として具体的に活用する能力を養うことができます。さらに、国語教員として授業を行う上で必須である基礎力を培う「国語表現法1・2」「古文基礎」、また「漢文学」関係の授業も幅広く設定し、学科で学んだことを生かして社会で活躍できる人材を育成するよう努めています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、日本文学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【英語文化コミュニケーション学科】

文学部英語文化コミュニケーション学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科では、英語による実践的コミュニケーション能力と、それを支える教養・専門知識・研究能力を兼ねた人材の育成を目的としています。これを実現するために、英語の「スキル系科目」の基礎領域と、「コミュニケーション学」、「言語学」、「英米文学」、「英語教育学」の専門領域に分けて総合的なカリキュラムを組んでいます。

1年次では初年次教育として、学科での「初年次ゼミナール」などを通して大学で学ぶ上での基礎と学科における学修での基礎を学びます。2年次にかけて英語能力の向上と専門領域の入門に取り組みながら、各自が自分の専門領域を絞っていきます。専門教育として、3年次から4年次にかけての演習科目（「演習ゼミナール1・2」「卒業論文1・2」）で、それまでに深めた知識や論理的思考力を活かして、研究計画の策定と実施、卒業論文の執筆、研究内容のプレゼンテーション等に取り組み、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につけます。

学修成果として、全般的な英語能力の向上や、ゼミでの研究や卒業論文の執筆・完成の過程を通じて、英語による実践的コミュニケーション能力と、それを支える教養や専門研究の力を併せ持ち、グローバル化の進む社会に活かせる実現力を養うことを目指します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、英語文化コミュニケーション学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向

性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

文化社会学部

【アジア学科】

文化社会学部アジア学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

アジア学科は、アジアに関する知識を確実に身につけ、応用していく力を養う教育を実現するため、段階的に学んでいくことのできるカリキュラム体系を構築しています。具体的には1年次に必修科目である「入門セミナーA」で大学の学び、「入門セミナーB」でアジアに関する学びの基礎を修得し、同時に「基礎科目」として「アジア概論A/B」など5つの選択科目を配置して、その後の専門的な知識を深めていくための基礎的な力を培います。また、2年次を中心として「アジアの歴史と文明」科目群に配置された11の選択科目でアジアに関する情報を的確に収集し理解を深めていく＜知る力＞を喚起し、2・3年次を中心として「アジアの文化と社会」科目群に配置された13の選択科目によって＜考える力＞を養っていきます。

アジアの文化と社会を現地のことばで学ぶことを目的として「アジア言語」科目群を設定し、1年次から4年次にかけて5つの「アジアの言語と文化」科目と4つの「アジア言語」科目を配置しています。3年次からは卒業後を展望し、「演習・プロジェクト」科目群として6つの科目を配置して、グローバル化が進展するなか多様性に満ちあふれたアジアを舞台に＜行動していく力＞を養います。より具体的には、実践（現地体験ほか）⇒ふり返し（レポートの作成）⇒発信（建学祭他での展示発表、プレゼンテーション）といった一連の流れのなかで担保される協働関係を通して実現していきます。

「アジア言語」科目群の「アジア言語A～D」の4科目から2単位以上を履修します。そして「卒業研究」では、必修科目である「アジア研究セミナー1・2・3」（3・4年次）と「卒業研究」（4年次）を履修して、4年間の学びの集大成として＜成し遂げ力＞の涵養を図ります。具体的には、各研究室に所属し、研究計画の策定と実施、リサーチペーパー（卒業論文）の執筆、成果報告のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、アジア学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等を通して教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげていきます。

【ヨーロッパ・アメリカ学科】

文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

広い学問領域の学びを通じて、複眼的な視野から世界の多様性に触れることができるように、基礎科目群、発展科目群、専門科目群を段階的に履修し、学びの集大成である「卒業論文」へと進む構成となっています。

まず1年次には初年次教育として必修科目「入門ゼミナール1・2」と基礎科目「ヨー

「ヨーロッパ・アメリカ概論」を履修し、大学での学習に必要な基礎的なスキルを培います。さらに1・2年次に〈選択必修グループ1〉と〈選択必修グループ2〉として基礎科目群を設置し、ヨーロッパとアメリカの各「地域研究」や、地域を越えた文化の広がりや人々のつながりを学びます。

2・3年次を中心に学ぶ発展科目群および3・4年次を想定する専門科目群では、「文化・芸術」「社会・人間」「歴史・地域性」の3つの分野に各12の選択科目が配置され、学生が自ら学びの道を選択し、自立した個人として興味関心を深めるとともに、過去と向き合い多文化の共生を尊重する思考と態度を養います。授業で学んだ知識は「ヨーロッパ・アメリカ実地研修」で実際の経験として確かめることも可能です。

基礎・発展・専門科目で学んだ知識や方法論を元に、問題発見から調査に基づき提言や解決を導く実践的な学びの場として、3・4年次の必修科目「基礎ゼミナール1・2」と「卒業論文1・2」、および「ヨーロッパ・アメリカ特殊講義A・B・C・D」が設定されています。これらは少人数制のゼミナール形式で、参加者同士の議論を通じて異なる意見をお互いに理解し、協調可能な道を探る他者との対話能力を磨きます。基礎・発展・専門科目での垂直的な学習とゼミナールにおける議論と卒業論文の作成を統合することで、内実を伴う深い学びを実現しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、ヨーロッパ・アメリカ学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行います。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげます。

【北欧学科】

文化社会学部北欧学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

北欧社会の取り組みや文化の特質を多面的かつ段階的に学ぶために、「初年次科目」「北欧歴史科目」「北欧社会基盤科目」「北欧社会発展科目」「北欧文化基盤科目」「北欧文化発展科目」「北欧語入門・中級・上級科目」「現地研修科目」「卒業研究科目」の科目群から構成される教育課程を編成しています。

1年次には、大学生活に必須と思われる技能を身につける「北欧入門セミナー」と、北欧について基礎的知識を習得するための初年次科目である北欧各国の「概論」を履修します。また、学科での学修の基盤となる「北欧歴史科目」として、「北欧史概説」と各国史4科目が選択科目として1・2年次に配置されており、北欧に対する歴史的な理解を深めます。

1～3年次にかけて履修する「北欧語入門・基礎・中級・上級科目」では体系立った北欧言語の学習を可能にするために入門から上級までの18科目を配置していますが、それらの導入として「デンマーク語入門」「デンマーク語初級1」など8つの選択必修科目から2科目6単位以上を履修します。さらに2・3年次での履修を想定している「現地研修科目」では、自ら北欧を訪問し体験することで、北欧語を活用し、教室では学べない多くのことを吸収します。そして、「卒業研究科目」として3年次に「北欧基礎セミナー」「北欧セミナー」、4年次に「北欧語研究セミナーA・B」「卒業研究A・B」の6つの選択科目が配置されています。

主専攻科目の中心となるのが2・3年次を中心に履修する「北欧社会基盤科目」「北欧社会発展科目」「北欧文化基盤科目」「北欧文化発展科目」であり、政治・経済、ジェンダー平等、教育・思想、福祉、環境、共生、芸術・文化、文学、児童文学、こども・若者文化、アイスランド（語）研究、北欧神話などをテーマとする25の科目が配置されています。このうち、「北欧社会基盤科目」および「北欧社会発展科目」は、北欧社会について学ぶ

際に常に国内外における課題と照らし合わせながら理解を深めていく内容としています。また、「北欧文化基盤科目」および「北欧文化発展科目」では、北欧社会における文化・芸術のあり方やそこに見出される価値観に対する理解を深めていきます。なお、「北欧社会基盤科目」と「北欧文化基盤科目」から、それぞれ2科目以上履修することを推奨します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、北欧学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【文芸創作学科】

文化社会学部文芸創作学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

文芸創作学科は、基本から応用へと段階を踏んで「読む」と「書く」ことを学んでゆけるようにカリキュラムを編成しています。1年次に初期導入科目である「入門ゼミナールA」で大学での学び方を、「入門ゼミナールB」で学科での学び方を身につけ、高校教育と大学教育との間のギャップを埋めると同時に、4年間の学習の展望を開きます。また、1・2年次を中心に「基礎科目」として、「読む」ことから「書く」ことへと重心をシフトするため、「創作基礎論」「日本の古典を読む」をはじめとする、アジアから欧米まで、また古代から近代まで、広く古今東西の作品を読み、また映画や演劇の基礎も学ぶ19の選択科目を配置しています。

学生はこうした科目の履修を踏まえて、2・3年次に「書く」ことを中心とした「創作系科目」「批評系科目」「編集系科目」へと次第に移行していきます。「創作系科目」には「詩の技法」など13の選択科目、「批評系科目」には「書くための文学理論」など10の選択科目、「編集系科目」には「ポップカルチャー論」など6つの選択科目が配置されています。そして3年次から4年次にかけては、少人数によるディスカッションや対話を中心とする選択科目「卒業制作ワークショップ1・2」において、学修の総仕上げとして卒業制作作品を執筆します。卒業制作作品は、これまでの学修を活かして、自己を見つめ、未来を構想する自己表現として重要です。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、文芸創作学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【広報メディア学科】

文化社会学部広報メディア学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、運用します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

広報メディア学科の基礎科目群は、まず大きく基礎初級と基礎上級に分かれ、基礎初級がさらに3区分19科目（「広報メディア論基礎」12科目、「現代社会論」5科目、「メディア実践基礎」2科目）で構成されます。これら19科目を1～2年次で履修し、広報メディア学科で学びを重ねていくための基礎を培います。特に「言語表現基礎」「ジャーナリ

ズム基礎」「広報論基礎」等は選択必修科目（10単位）に指定しています。また「現代社会論」は心理・社会学科から提供される指定ユニットで、6単位以上修得すると副専攻（現代社会論）に認定されます。基礎上級は「メディア史と社会形成」に関わる区分で、歴史と理論と分析手法の修得を中心に、各自の関心を広げ、足場を築いていくための16科目で構成されています。

広報メディア学科の応用科目群は、情報を社会的価値の高いメッセージに変えていく実践を積み上げる3区分29科目（「広報のプロデュース」11科目、「メディアのプロデュース」8科目、「卒業制作・研究」10科目）で構成されています。これらは2～4年次での履修を想定し（「卒業制作・研究」は3年生以上）、基礎科目群での学修を踏まえて、高度で専門性の高いテーマに取り組むための内容となっています。この中には多くの実践科目が含まれ、時間割上同一曜日の3、4限に2科目連続で開かれる形式のものがあります（「卒業制作・研究」は「アドバンスゼミナールA・B」を除く全て）。これらの科目を、自らの目標に併せて選択し、学修を重ねることで、ディプロマ・ポリシーに謳われた「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を養い、4年間の学修成果を体系的にまとめ、学修成果のアウトプットを促します。具体的には、担当教員が各々の研究対象（「メディア」、「ジャーナリズム」、「広報」、「表象文化」等）に関する専門性にもとづき、計画的に指導にあたります。学修成果の総括・可視化については、適切な方法論をもって個人～グループ単位で学生が主体的に推進できるように支援を行います。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、広報メディア学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【心理・社会学科】

文化社会学部心理・社会学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

1年次から4年次まで、心理学と社会学の観点から現代社会の仕組みや課題を理解し、批判的・創造的に考察する能力に関する科目を体系的に配置しています。

大学での学修技法を学び、心理学と社会学の基礎知識を修得するための「心理・社会学基礎科目」を1年次と2年次で履修します。また、研究方法の基礎を身につけるための科目を2年次で履修します。

2年次から3年次を中心として、心理学と社会学に共通する専門知識を身につける「心理・社会学共通科目」、心理学と社会学の専門知識を深める「社会学講義科目」と「心理学講義科目」を配置します。これらの科目を中心に、心理学と社会学の専門知識を理解する力、そして心理学と社会学の観点から現代社会の仕組みや課題を理解する力を身につけます。

主に2年次から3年次で履修する「心理・社会学研究法科目」と「心理・社会学演習科目」では、研究方法の習得、問いの設定、研究計画の策定、研究の実施、レポートの執筆、研究成果のプレゼンテーション等に取り組みます。これらの科目を中心に、自ら問いを立て、課題解決に向けて批判的・創造的に考察し、主体的に情報を発信する力を身につけます。

そして、4年次に卒業論文に関連した「心理・社会学専門研究科目」を履修し、4年間の各自の研究成果を卒業論文としてまとめます。

また、これらの教育課程全体を通じて、ディプロマ・ポリシーで設定している態度・志向性を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、心理・社会学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

教養学部

【人間環境学科】

教養学部人間環境学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

人間を取り巻く環境に対して、「自然環境領域」、「生活文化領域」、「社会環境領域」に大別し、各領域に沿って主専攻科目を配置しています。その主な特徴として以下の点が挙げられます。環境に関わる基本的教養と各領域の専門性を活かせる能力の修得を目標とし、少人数制（10名程度）のゼミナール教育を通して、理論と実践を結びつけるような総合力の育成をはかっていきます。そのため、1年次には「人間環境入門」を必修科目として設置し、高校から大学への橋渡しを行うための初年次教育を行っています。また3領域の専門基礎科目である「自然環境論」、「生活文化論」、「社会環境論」を選択必修科目として、「自然環境演習」、「生活文化演習」、「社会環境演習」を選択科目として設置し、学生個々の環境に対する具体的な興味関心を醸成します。2年次には、3領域を越えた様々な科目を履修し、環境に関する広い知識と視野を身につけます。必修科目である「人間環境基礎演習」では、異なる専門分野の複数の教員が担当することで、環境に対する多面的な見方や価値観を学び、多様な視点から問題解決力を涵養します。3年次から始まる2年間の「ゼミナール」では、専門領域を踏まえて、焦点を絞った個別のテーマに取り組むこととなります。さらに4年次の必修科目である「卒業研究」では、研究計画の策定および実施、インタビュー調査、企業との協働、フィールド研究等を通じて卒業論文を執筆するとともに、成果発表のプレゼンテーション、およびそれに対する質疑応答を実施します。これらの学修活動を通じて、学生は多様な視点から持続可能な社会に資する課題を分析し、その解決に向けた考察を行う問題解決力を体系的に修得します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、教養学部人間環境学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等を通して教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげていきます。

【芸術学科】

教養学部芸術学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

芸術学科では、講義科目である「芸術知識科目」と実習科目である「芸術実習科目」、それら両方の要素を合わせ持つ「芸術演習科目」、そしてゼミ・卒研等の「芸術研究科目」の4種類の学科目を置きます。

1・2セメスター（初年次）では、芸術全般にかかわる知識と技能を身につけます。必修科目は、芸術知識科目の「芸術実践入門」「学際芸術入門」です。芸術演習科目である

「デザイン基礎演習1・2」「アート基礎演習1・2」「音楽基礎演習1・2」の学びと組み合わせながら、芸術学科で学ぶ基礎力を身につけてゆきます。他の選択科目としては、芸術知識科目「デザイン論」「造形論」「音楽通論」「音楽療法概論」「音楽史」があります。芸術実習科目としては、「ピアノ・鍵盤古楽器実習」「ピアノ演奏と映像表現」「楽器演奏基礎実習」、演習科目では「イラストレーション」「プリントワーク」が選択できます。

3・4セメスター（2年次）では、自身の興味や関心に基づいて履修科目を構成します。様々な知識・実習・演習科目が設定されており、理論と技法の両観点から学びつつ、3年次以降の履修や研究について思考します。全て選択科目であり、芸術実習科目としては、「アンサンブル実習」「デザイン実習A・B」「パフォーミングアーツ実習」等、芸術演習科目としては「絵画制作演習」「音と音楽の表現」「クレイワーク」等、芸術知識科目としては「現代芸術論」「音楽制作法」「デザイン史」等が開講され、2年次以降自由に履修することができます。

5・6セメスター（3年次）では、1・2年次の学びをベースとして各専任教員が開講するラボ（ゼミナール）を履修し、理解を深めつつ経験を積みみます。ここで中心になるのは、必修科目の芸術研究科目「ラボラトリー1・2」です。また、芸術知識科目には「芸術キャリア特論」「芸術実践の記述法」があります。

7・8セメスター（4年次）では、芸術研究科目「卒業研究1・2」において、4年間の学習成果を卒業研究論文や卒業研究制作としてまとめます。また、同学部人間環境学科と連携した科目「プロジェクト研究」を履修することも可能です。

以上のような「身体指向」「社会指向」「発表指向」を目標とする芸術教育の実施により、音楽・美術・デザインなど個々の適性に合わせた専門能力とそれらを統合する能力を兼ね備え、様々な場面に対応できる判断力・行動力を持った視野の広い人材を、段階的かつ発展的に養成していきます。

『学修成果の評価方法』

芸術学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげていきます。

児童教育学部

【児童教育学科】

児童教育学部児童教育学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

- カリキュラム・ポリシー（知識・理解）
ディプロマ・ポリシー（知識・理解）を達成するため、区分Ⅳ「主専攻科目」の「専門基礎科目」における、「1教職・保育基礎科目群」の教育・保育に関する原理、制度および方法等の基盤的な学び（「教育原理（幼・小）」、「教育制度論（幼・小）」等）をとおして、子どもを取り巻く社会状況及び社会における教育・保育の役割への理解を深めるとともに、子どもの発達と学びを適切に支えることができる基礎的な知識を身につけます。また、「2教科・保育内容に関する科目群」の教科に関する専門的事項、保育内容の各領域等の学び（「初等国語」、「保育内容総論」等）をとおして、子どもの発達と学びを適切に支えることができる基礎的な知識を基盤として、個々の子どもの発達と学びを総合的かつ連続的に捉え、子どもの内面を理解することができる力を身につけます。
- カリキュラム・ポリシー（技能）
ディプロマ・ポリシー（技能）を達成するため、学修成果①②を踏まえ、区分Ⅳ

「主専攻科目」の「専門応用・実践科目」における、「2教科・保育内容に関する科目群」および「3教科・保育内容の指導法に関する科目群」の各分野、各教科の専門性や、指導法等による、教育・保育実践のための基盤となる学び（「初等生活科教育法」「言葉の指導法」等）をとおして、個々の子どもの発達と学びを総合的かつ連続的に捉え、子どもの内面への理解を深め、それを基盤として、子どもの多様な発達と学びに対応した教育・保育を構想することができる力を身につけます。

「4教科・保育研究に関する科目群」の教材研究を深める学び（「初等社会研究」「保育内容研究A」等）をとおして、子どもの多様な発達と学びに対応した教育・保育の構想力を高め、教育・保育を実践するための基盤を形成します。また、「5教育・保育フィールド科目群」の観察、実践、実習といった、直接子どもと向き合った学び（「学校体験活動」「保育実習1（保育園）」等）をとおして、子どもの多様な発達と学びに対応した教育・保育を構想し、それに沿った教育・保育を実践する力を身につけるとともに、実践後は評価・反省をとおして、その力を深めます。

- カリキュラム・ポリシー（態度・志向性）

ディプロマ・ポリシー（態度・志向性）を達成するため、学修成果①②③④⑤を踏まえ、区分Ⅳ「主専攻科目」の「専門発展科目」における、「6特化プログラム群」の教育・保育に関する現代的課題に対応した学び（「教育・保育インターシップA」「子育て支援実習A」等）をとおして、子どもの多様な発達と学びに対応した教育・保育を実践し、そこでの課題に他者と積極的に関わりながら、それを乗り越え、真摯な姿勢で子どもの健やかな成長を支える社会の実現のために尽力する態度を身につけます。

これらの教育課程で身に付けた力を、「7卒業研究科目群」（「発展ゼミナール1」「卒業研究1」等）において“個々の課題意識に応じた主体的研究姿勢に基づく学び”により集約し、「卒業研究レポート（論文）」としてまとめあげることにより、新たな価値を創出し、子どもの健やかな成長を支える共生社会の発展に貢献する力を身につけます。

- 学修成果

- ① 社会理解

- 子どもとそれを取り巻く社会状況及び社会における教育・保育の役割を理解している。

- ② 教育・保育基礎理解

- 子どもの発達と学びを適切に支えることができる基礎的な知識を持っている。

- ③ 子ども理解

- 個々の子どもの発達と学びを総合的かつ連続的に捉え、子どもの内面を理解することができる。

- ④ 教育・保育構想力

- 子どもの多様な発達と学びに対応した教育・保育を構想し、実践後は評価・反省することができる。

- ⑤ 教育・保育実践力

- 子どもの多様な発達と学びに対応した教育・保育を実践することができる。

- ⑥ 協働力・創造力

- 他者と積極的に関わりながら課題に向き合い、それを乗り越えることができる。

- ⑦ 使命感

- 子どもの健やかな成長を支える共生社会の実現のために、真摯な態度で向き合うことができる。

これらの学修成果を体系的に身に付けていくことにより、現代に求められている「多様な子どもを、継続的に見通す力」を卒業までに身に付けていく。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績

評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、学修成果の観点別評価を行うことで定量的に把握します。さらに、授業についてのアンケート、面談カウンセリングによる学生による自己評価も含め、総合的・多面的に学修成果の評価を行います。その評価結果は、FD 活動等をととして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

体育学部

【体育学科】

体育学部体育学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

体育学科では、体育・スポーツ科学に関する基礎的・専門的知識やその指導力を有すると共に、論理的な思考・判断によって問題の所在や問題の解決方法が見いだせる能力の修得を目的として、身体教育学およびスポーツ科学の二分野からなる体系的な教育課程を編成します。また、身体教育学およびスポーツ科学の方法論や基礎知識に立脚した実践力・指導力を修得し、さらにそれぞれの分野で発展的に専門性を高められる教育課程の構築を図るべく、以下の系統的な科目を設置します。

- 大学での初年次教育の重要性に鑑み、体育学基礎の学科目を設置し、「スポーツ学入門 A・B」をはじめ体育学における人文社会科学や自然科学に関連する基幹的な科目を必修に指定しています。これらと並行して「基礎身体運動実習 A・B」「身体教育学の基礎」「スポーツ科学研究入門」「スポーツ文化社会科学の基礎」「スポーツ医科学の基礎」を学ぶことで基礎をかため、大学の学修へと導きます。また、「スポーツデータサイエンス入門」を通して、スポーツや教育分野におけるデータ収集や処理の基礎を学びます。さらに、「体づくり運動 指導演習」をはじめ様々な種類のスポーツや武道の指導に関する基礎的な実習と、それを支える基本的な知識や実技の遂行能力を身につけます。
- 保健体育科教育とエデュケーション・コーチングからなる身体教育学と、人文社会科学および自然科学からなるスポーツ科学の学科目を、それぞれ設置します。身体教育学では「身体教育と学校」を学び、「保健体育学習指導法実習 A・B」及び「エデュケーション・コーチング演習」でより高度な指導力や実践力を培います。スポーツ科学では、こうした力を根拠づける科学的知見を得るために「社会調査法」と「実験計画法」でデータ収集およびその処理といった研究方法を学び、「スポーツ人文学演習」、「スポーツ社会科学実習」、「スポーツ医科学実験 A・B」を通じて、専門性を高めていきます。ここでは様々な情報や知識を複眼的、論理的に分析・表現する技能や、他者と合理的なコミュニケーションを図りつつ、協働して指導や研究ができる技能を身につけます。
- 体育学研究の学科目においては、「体育学研究ゼミナール 1・2」及び「研究発表の技法」を設置し、各分野の講義・実験・実習・演習を並行して履修することによって、保健体育教師、スポーツ指導者・研究者等に必要の高い専門性の修得を図るとともに、省察能力や課題解決能力の向上を目指します。その集大成として、「体育学卒業研究 1・2」において研究論文の作成と発表を課題とします。

以上の教育課程の編成により、身体教育およびスポーツ文化の指導の後継者として、倫理感や社会的責任感を持ち積極的に社会貢献ができる能力を修得し、体育・スポーツに関する「専門性」「実践力」「指導力」の高次元での融合を図ります。

『学修成果の評価方法』

建学の精神に基づく「4つの力」のうち「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」は PROG で測定し、評価します。体育学科においては「自ら考える力」の達成度を、主に以下の科目群によって測定し、評価します。

- 知識・理解：

スポーツ学入門 A・B、スポーツ哲学（倫理学を含む）、スポーツ社会学、スポーツ史、生理学（解剖学を含む）、運動生理学、衛生学（労働衛生を含む）、公衆衛生学、学校保健概論（小児保健・精神保健・学校安全を含む）、スポーツ医学、救急処置法、スポーツ心理学、スポーツ栄養学、スポーツ指導演習（野外）A・B、スポーツデータサイエンス入門、身体教育学の基礎、スポーツ科学研究入門、スポーツ文化社会科学の基礎、身体教育と学校、保健体育学習指導法実習 A、

● 技能：

スポーツ人類学、スポーツ運動学（運動方法学を含む）、スポーツバイオメカニクス、スポーツデータサイエンス、身体運動指導演習、スポーツ指導演習（「野外」を除く）、基礎身体運動実習 A・B、社会調査法、実験計画法、エデュケーショナル・コーチング演習、保健体育学習指導法実習 B、スポーツ人文学演習、スポーツ社会科学実習、スポーツ医科学実験 A・B、研究発表の技法

● 態度・志向性：

体育・スポーツ経営学、アダプテッド・スポーツ概論、スポーツ医科学の基礎、保健体育科教育法 1・2、保健体育科教材論、保健体育科教育実践論

以上を踏まえ、4つの力の総合的な達成度として「体育学卒業研究 1・2」における成果（プレゼンテーション、抄録、論文）を評価します。

なお、授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、体育学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【競技スポーツ学科】

体育学部競技スポーツ学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

体育学部競技スポーツ学科では、競技スポーツ学基礎科目として「スポーツ哲学（倫理学を含む）」「運動生理学」「スポーツ運動学」などの科目が複数開講されており、4年間で文系理系を問わず広くスポーツ科学を学びます。

入学から専門学修へ円滑な橋渡しを行うための初年次教育科目として「スポーツ学入門 A・B」、競技スポーツの基礎を学ぶための「スポーツ方法論」「基礎トレーニング演習」「コーチング論」「トレーニング論」などの競技スポーツ学基礎科目が開講されており、これらの講義や演習科目を通して競技スポーツおよびスポーツ科学における専門的知識を身につけます。次段階の学科専門科目では、競技スポーツの意義を踏まえて、体育・スポーツ科学を広く理解し知識を得るために【アスリート領域】【コーチング領域】【トレーナー領域】の3つの学修体系を設置しています。

「アスリート領域」では、各競技スポーツのアスリートに関する理論及び実習科目を開講します。「コーチング領域」では、アスリートを支援するコーチングに必要な実技系科目と講義・実験・演習系科目をバランスよく配置します。「トレーナー領域」では、アスリートを支えるトレーナーとして必要な理論・実習・演習科目を開講します。いずれの領域においても、スポーツ科学に根差した講義科目から専門的知識を身につけ、実習・演習科目における「実戦」重視の教育から理論を実践する方法を身につけ、各分野でリーダーシップを発揮することのできる人材を育成します。

さらに「競技スポーツ研究領域」として、3年次より「競技スポーツ研究ゼミナール」、4年次より「卒業研究」を開講し、アスリート、コーチ、トレーナーの使命を理解し、それぞれの活動を通して社会に貢献しようとする意欲と能力を身につけるとともに、研究計画の策定と実施、卒業論文の執筆や成果報告のプレゼンテーション等によって、ディプロ

マ・ポリシーで設定している競技スポーツにおける問題を発見し、解決する技能を身につけることで、各分野におけるスペシャリストを育成します。

『学修成果の評価方法』

建学の精神に基づく「4つの力」のうち「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」はPROGで測定し、評価します。競技スポーツ学科においては「自ら考える力」の達成度を、主に以下の科目群によって測定し、評価します。

- 知識・理解：
スポーツ学入門 A・B、スポーツ哲学（倫理学を含む）、スポーツ社会学、スポーツ史、生理学（解剖学を含む）、運動生理学、衛生学（労働衛生を含む）、公衆衛生学、学校保健概論（小児保健・精神保健・学校安全を含む）、スポーツ医学、救急処置法、スポーツ心理学、スポーツ栄養学、野外活動指導演習 A・B、情報処理、スポーツ方法論、基礎トレーニング演習、トレーニング論、コーチング論、アスレティックトレーニング概論、競技スポーツ特別実習、競技スポーツ理論及び実習 1-1, 1-2、スポーツ戦術実習 1-1, 1-2、トレーニング理論及び実習 A・B、スポーツトレーナー論、アスレティックケア理論及び実習、テーピング理論及び実習、競技スポーツ理論及び実習 2-1, 2-2、スポーツ戦術実習 2-1, 2-2、トレーニング測定評価演習、スポーツパフォーマンス分析実習、コンディショニング概論、コンディショニング実習
- 技能：
スポーツ人類学、スポーツ運動学（運動方法学を含む）、スポーツバイオメカニクス、スポーツデータサイエンス、臨床スポーツ心理学、臨床スポーツ医学、スポーツ栄養学演習
- 態度・志向性：
体育・スポーツ経営学、アダプテッド・スポーツ概論、保健体育科教育法 1・2、保健体育科教材論、保健体育科教育実践論、機能解剖学、心理サポート演習、救急法演習、競技スポーツ理論及び実習 3-1, 3-2, 4-1, 4-2、スポーツ戦術実習 3-1, 3-2, 4-1, 4-2、チームマネジメント論、コーチング演習 1・2、コーチング実践論 1・2、コンディショニング理論及び実習

以上を踏まえ、4つの力の総合的な達成度として「競技スポーツ卒業研究 1・2」における成果（プレゼンテーション、抄録、論文）を評価します。

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、競技スポーツ学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【武道学科】

体育学部武道学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

武道学科では、武道の特性を踏まえて、武道を幅広く研究するとともに、実践を通して武道の精神と技術を体得し、国際性に富んだ広い視野を培い、指導力・自己開発能力とリーダーシップのとれる個性的な人間の育成を教育目標とします。

この目標を達成するために、教育課程においては「体育・スポーツ、武道を幅広く研究できる能力開発」、「実践と理論の一致（事理一致）」、「競技力の向上」、「国際化に対応しうる武道の指導者養成」を基本的教育方針として、以下の教育課程を編成します。

- 大学での初年次教育の重要性に鑑み「武道学基礎」の学科目を設置し、「スポーツ学入門 A・B」をはじめ体育・スポーツ科学における人文社会科学や自然科学に関連する基幹科目を必修にしています。これらと並行して「武道概論」「武道基礎演習」

を学ぶことで基礎をかため、大学の学修へと導きます。また、「データサイエンス入門」を通して、スポーツや教育分野におけるデータ収集や処理の基礎を学びます。

- 「武道実習 A」「武道実習 B」「武道特別演習 1」「武道理論及び実習 1」など、体育・スポーツ科学と武道実技に関連する基礎基本を学修する科目を開講し、また、「武道実践領域」を第 1～第 8 セメスターにバランスよく配置し、武道の基本となる技の習得と高い技術を養成する力を身につけると共に、知識と理解の継続性を重視します。
- 「武道学領域」で「武道史概論」「武道思想概論」「武道専門書概説」などから、武道の専門的な知識の修得と武道思想の構築に繋げ、過去と現代を比較し武道に関する諸問題を解決する能力を高めていきます。
- 3 年次からは「武道学研究領域」の「武道研究ゼミナール 1・2」、4 年次では「武道卒業研究 1・2」を設置し、研究計画の策定と実施、卒業研究論文の作成、成果報告のプレゼンテーション等によって、体育・スポーツ科学および武道学における問題の所在や、問題解決の方策を探る力を身につけます。
- 指導者の養成および専門的技術の修得を目指した「武道指導領域」には「武道形演習 A・B・C」「武道指導演習」「武道指導法」「武道形指導法」を設置し、武道の伝統を尊重した実践ができる技能と専門的な知識や技術・指導力を身につけます。さらに、「武道国際交流論」「武道交流実習」を設置し、社会での実践的教育を通して国際的視点および国内外を問わず幅広い知識と実践力を身につけ、現代社会における武道の役割、武道伝道者としての使命を理解した人間の育成を目指します。

『学修成果の評価方法』

建学の精神に基づく「4 つの力」のうち「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」は PROG で測定し、評価します。武道学科においては「自ら考える力」の達成度を、主に以下の科目群によって測定し、評価します。

- 知識・理解：
スポーツ学入門 A・B、スポーツ哲学（倫理学を含む）、スポーツ社会学、スポーツ史、体育・スポーツ経営学、生理学（解剖学を含む）、運動生理学、衛生学（労働衛生を含む）、公衆衛生学、学校保健概論（小児保健・精神保健・学校安全を含む）、スポーツ医学、救急処置法、スポーツ心理学、スポーツ栄養学、データサイエンス入門、武道概論、武道基礎演習、武道思想概論、武道専門書概説、武道指導法、武道形演習 A、武道特別演習 1・2・3・4、武道理論及び実習 1・2・3・4
- 技能：
スポーツ人類学、スポーツ運動学（運動方法学を含む）、スポーツバイオメカニクス、スポーツデータサイエンス、体づくり運動指導演習、陸上競技 指導演習、水泳指導演習、器械運動 指導演習、ダンス 指導演習、武道 指導演習 A、武道 指導演習 B、球技 指導演習 A、球技 指導演習 B、球技 指導演習 C、球技 指導演習 D、野外活動 指導演習 A、野外活動 指導演習 B、武道形演習 B、武道指導演習、武道特別演習 5・6・7・8、武道理論及び実習 5・6・7・8、武道審判法演習、武道交流実習
- 態度・志向性：
アダプテッド・スポーツ概論、保健体育科教育法 1・2、保健体育科教材論、保健体育科教育実践論、武道実習 A・B・C・D・E、武道史概論、武道国際交流論、武道形演習 C、武道形指導法

以上を踏まえ、4 つの力の総合的な達成度として「武道卒業研究 1・2」における成果（プレゼンテーション、抄録、論文）を評価します。

なお、授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、武道学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用い

た学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、F D活動等をとおして教育の質向上のためのP D C Aサイクルにつなげています。

【生涯スポーツ学科】

生涯スポーツ学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

生涯スポーツ学科では、子ども、成人、高齢者、障がい者などの多様なライフステージや特性にあわせて心身の健康と生活の質(QOL)を高めるスポーツや身体活動を探求します。具体的には、遊び、アウトドアレクリエーション、インクルーシブスポーツなどの多様なスポーツや身体活動に加えて、スポーツや身体活動による健康の維持増進、及び健康に影響を与える環境に関する基礎的、専門的、および応用的な課題を教育の中心に位置づけ、理論と実践を融合した演習授業を重視し、健康運動指導士や第一種衛生管理者の資格取得を見据えて、指導者としての専門性を高められる教育課程の構築を図るべく、以下の系統的なカリキュラムを設置します。

大学での初年次教育の重要性に鑑み、「スポーツ学入門 A・B」「生涯スポーツ概論」「生涯スポーツ指導論」「基礎情報処理」などの学修を通じて、生涯スポーツ学科生として円滑に、かつ充実した4年間を過ごすために必要な基礎知識を修得します。

「子どもスポーツ指導演習」「レクリエーションスポーツ指導演習」「高齢者スポーツ指導演習」「インクルーシブスポーツ指導演習」などの学修を通じて、ライフステージや特性に応じたスポーツや身体活動に関して、理論と演習による授業で自らが経験し、知識と指導法を修得するとともに、グループワークや模擬指導を行いコミュニケーション能力やリーダーシップを高めます。

「健康スポーツ心理学」「運動処方論」「運動処方演習」「健康体力づくり指導演習」「エアロビクス運動指導演習」などの学修を通じて、心身の健康の維持増進と健康寿命の延伸、生活の質(QOL)の向上に寄与するスポーツや身体活動に関して、理論と演習による授業で自らが経験し、知識と指導法を修得します。

「救急法」「労働衛生法規 1・2 (労働基準法を含む)」「成人保健学」「環境保健学」などの学修を通じて、人の学習及び労働も含めた生活環境の安全・衛生管理に関して、理論と演習による授業で自らが経験し、知識と技能を修得します。

「生涯スポーツインターンシップ」「生涯スポーツ研究法」「生涯スポーツ研究ゼミナール 1・2」の学修を通じて、生涯スポーツのフィールドや実践的な体験を通じて、生涯スポーツ分野の諸問題を理解し、測定データの分析・統計手法に関する知識と技能を修得します。その集大成として、「生涯スポーツ卒業研究 1・2」の学修を通じて、多岐に亘る生涯スポーツとその関連領域から自己の目標や興味関心に合った分野を選択し、学問的・科学的に探究し、研究計画の策定と実施、卒業論文の執筆、成果のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題解決策を考える力を身につけます。

『学修成果の評価方法』

建学の精神に基づく「4つの力」のうち「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」はPROGで測定します。生涯スポーツ学科においては「自ら考える力」の達成度を、以下の科目群によって測定し、評価します。

- 知識・理解：
スポーツ学入門 A・B、スポーツ哲学（倫理学を含む）、スポーツ社会学、スポーツ史、生理学（解剖学を含む）、運動生理学、衛生学（労働衛生を含む）、公衆衛生学、学校保健概論（小児保健・精神保健・学校安全を含む）、スポーツ医学、救急処置法、スポーツ心理学、スポーツ栄養学、基礎情報処理、生涯スポーツ概論、生涯スポーツ指導論
- 技能：
スポーツ人類学、スポーツ運動学（運動方法学を含む）、スポーツバイオメカニクス、スポーツデータサイエンス、生涯スポーツ政策論、運動処方論、健康教育論、

健康スポーツ心理学、成人保健学、環境保健学、生涯スポーツ研究法、生涯スポーツアウトドア理論演習、レクリエーションスポーツ指導演習、生涯スポーツ企画運営演習、アウトドアレクリエーション指導演習、健康体力づくり指導演習、エアロビクス運動指導演習

● 態度・志向性：

体育・スポーツ経営学、アダプテッド・スポーツ概論、インクルーシブスポーツ指導演習、子どもスポーツ指導演習、高齢者スポーツ指導演習、運動処方演習、運動処方応用演習、救急法、労働衛生法規 1・2（労働基準法を含む）、生涯スポーツ研究ゼミナール 1・2

以上を踏まえて、4 つの力の総合的達成度として「生涯スポーツ卒業研究 1・2」における成果（プレゼンテーション、抄録、論文）を評価します。

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、生涯スポーツ学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をとらして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【スポーツ・レジャーマネジメント学科】

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

スポーツ・レジャーマネジメント学科では、ヒューマニズムに基づく倫理観を育て、基本的な人権としての「スポーツ・レジャー」の理解を深め、社会で求められる共通能力としてのマネジメント力を培う教育課程を設置し、持続可能な視点と異文化・多文化理解の基礎となる他者への寛容の精神を培い、国際感覚とコミュニケーション力を高めるための科目を開講しています。

まず、大学での初年次教育の重要性に鑑みスポーツ・レジャーマネジメント学基礎科目の学科目を設置し、「スポーツ学入門 A・B」をはじめ体育・スポーツ科学における人文社会科学や自然科学に関連する基幹的科目を必修とします。「体づくり運動指導演習」や「指導実習・演習」では、様々な種類のスポーツや武道の実技指導と、それを支える基本的な知識や実技の遂行能力を身につけます。その他、体育・スポーツ科学に関わる人文社会科学の多様な科目の習得を通じて、体育・スポーツ科学の総合的な知識を習得します。スポーツ・レジャーマネジメント学の教育課程においては、5 つの学修領域を設定しています。

「スポーツ・レジャーマネジメント学専門基礎」では、まず専門基礎として「スポーツ・レジャー概論」、「マネジメント概論」、「情報機器の操作（教職科目）」及び「国際スポーツ・レジャー論」において、人間の文化としてのスポーツ・レジャーやマネジメントの概念や基礎的な知識を国際的な文脈も含めて理解させるとともに、新たな価値を生み出す能力を開発します。

「スポーツ・レジャー各論」では、「スポーツ・レジャー論 A から E」を通じて、世界共通の人類の文化であるスポーツ・レジャーの諸相を学びます。他者や異文化・多文化への理解と配慮を深めることを重視します。

「マネジメント各論」では、「マネジメント論 A から E」を通じて、スポーツ・レジャーのマネジメントを学びます。国際的な視点を通じたヒト・モノ・カネ・情報のマネジメント理論を重視します。

「スポーツ・レジャーマネジメント学実践領域」では、マネジメントに必須な人間力を高めるために、「マネジメントゼミナール」、「イベントマネジメント実習」及び「スポーツ・レジャー海外実習」を通じて、大学内外で行うフィールドワークや実習及びプレゼンテーション等の実施によって、ディプロマ・ポリシーで設定している社会課題の解決や

新たな価値を創造するための創造的かつ実践的な能力を養います。また、将来を見据え、「スポーツ・レジャーインターンシップ」でキャリアについて学びます。

「スポーツ・レジャーマネジメント学研究」では、「スポーツ・レジャーマネジメント学研究ゼミナール1・2」や「スポーツ・レジャーマネジメント学卒業研究1・2」を通じて、スポーツ・レジャーマネジメント学における調査や統計手法をはじめとした研究方法を修得しつつ、研究計画の策定と実施、卒業研究の執筆、そして研究成果のプレゼンテーションを実施します。これらを通じてディプロマ・ポリシーで設定している、クオリティ・オブ・ライフ（QOL）、幸福、ゆとりへと繋げていく思想、人間の生き方や生きがいを構築しようとする志向性、汎用性あるマネジメント能力と個性を兼ね備えた人材を育成します。

『学修成果の評価方法』

建学の精神に基づく「4つの力」のうち「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」はPROGで測定し、評価します。スポーツ・レジャーマネジメント学科においては「自ら考える力」の達成度を、主に以下の科目群によって測定し、評価します。

- 知識・理解：

スポーツ学入門A・B、スポーツ哲学（倫理学を含む）、スポーツ社会学、スポーツ史、スポーツ人類学、体育・スポーツ経営学、生理学（解剖学を含む）、運動生理学、衛生学（労働衛生を含む）、公衆衛生学、学校保健概論、スポーツ医学、救急処置法、スポーツ運動学（運動方法学を含む）、スポーツ心理学、スポーツバイオメカニクス、スポーツ栄養学、スポーツ・レジャー概論、マネジメント概論、国際スポーツ・レジャー論、スポーツ・レジャー論C（環境）、スポーツ・レジャー論D（ツーリズム）、マネジメント論A（ファイナンス）、マネジメント論B（ファシリティ）、マネジメント論C（組織）、マネジメント論D（マーケティング）、マネジメント論E（エンターテインメント）

- 技能：

情報機器の操作（教職科目）、スポーツデータサイエンス、体づくり運動指導演習、陸上競技 指導演習、水泳 指導演習、器械運動 指導演習、ダンス 指導演習、武道 指導演習A、武道 指導演習B、球技 指導演習A、球技 指導演習B、球技 指導演習C、球技 指導演習D、野外活動 指導演習A、野外活動 指導演習B、マネジメントゼミナール1、マネジメントゼミナール2、イベントマネジメント実習、スポーツ・レジャーインターンシップ

- 態度・志向性：

アダプテッド・スポーツ概論、スポーツ・レジャー論A（文化）、スポーツ・レジャー論B（レクリエーション）、スポーツ・レジャー論E（ダイバーシティ）、スポーツ・レジャー海外実習

以上を踏まえ、4つの力の総合的な達成度として「スポーツ・レジャーマネジメント学卒業研究1・2」における成果（プレゼンテーション、抄録、論文）を評価します。

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、スポーツ・レジャーマネジメント学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

健康学部

【健康マネジメント学科】

健康学部健康マネジメント学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

「教育研究上の目的及び養成する人材像」は、次のような学科目の構成によって、健康をマネジメントし、健康な社会の創成に貢献できる人材養成をしていきます。

カリキュラム全体を通じて、健康を多角的に認識できる知識の幅としての総合性と専門性を習得することを目指します。学びの基盤となる「健康を学ぶ基盤科目」は、「健康学概論」および、健康学部で「未来の健康社会の実現に向けた5つの領域」として掲げている以下の領域（「運動」、「栄養」、「メンタルヘルス」、「ソーシャルウェルネス」、「ソリューション（データサイエンス）」・「ソリューション（ソーシャルワーク）」における基礎科目から構成されている。基幹となる「健康学概論」は、学際的に多領域から学術研究が行われている健康学について統合的な視野を育成することを目的に、「健康」の多側面を網羅的に紹介する講義として設計している。その他の基礎科目は、既述の各領域における必要な基本的な知識・技能等の習得を目的としており、健康学の多面的な理解を進める上で基盤となる科目として位置付けている。

さらに健康学領域における専門的かつ応用的な知識等を習得するために、上述の5領域のそれぞれにおいて、健康にかかわるより専門的かつ応用的な知識等の習得を目指せるように科目群が設定されている。5領域のそれぞれに選択必修科目が位置付けられているため、学生は引き続き幅広い統合的な視野で健康学について考え続けるよう求められると同時に、各自の興味関心に関する領域の科目群を中心に自由選択科目を履修することで、より意欲的に専門性や応用性を高めた学習活動に取り組むことができる。このように細胞などのミクロなレベルから地域づくりなどマクロレベルまで健康に関わる様々な学習機会を提供している。

また「プロジェクト活動科目」を配置し、フィールドワーク等を通じて健康学を体験的に学ぶ機会を提供している。加えてすべての学生は「ゼミナール科目群」を必修としており、1年次には学術研究の進め方を中心に学び、3年次以降は健康学に関する各自の学術的関心に基づいて実験や調査研究を行うよう指導を積み重ねて、最終的に卒業研究として各自の学びの集大成を取りまとめるよう指導体制を構成している。また、ソーシャルワーク専門国家資格である「社会福祉士」「精神保健福祉士」や、調査の専門資格である「社会調査士」の資格取得が可能となるよう、「資格科目」を履修できる体制も準備している。

以上のように学生は、上記の「健康を学ぶ基盤科目」、各領域の科目、ゼミナール科目と順次性をもって学ぶことを通じて、健康学に関する多角的な視点を持ち、専門領域や職種を超えて、多様な人々と協力する力を身に着ける。これらの一連の学習活動を通じて、多様な健康課題について複合的な視点で解決策を創造し、マネジメントする力を獲得する。

『学修成果の評価方法』

健康マネジメント学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

法学部

【法律学科】

法学部法律学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

ディプロマ・ポリシーに定めた能力を育成し、憲法・民法・刑法など法制度の基幹となる法分野についての知識および技能を着実かつ体系的に身に着けてもらうことを目的として、カリキュラムを3段階に構成し、法学の基礎的知識・技能の修得に重点を置いた教育課程を体系的かつ段階的に編成しています。

- 導入・法律基礎科目群

アカデミック・スキルの修得および法学学習の導入科目として「入門ゼミナールA、B」を、そして法制度の基幹となる分野についての知識および技能を着実かつ体系的に身に付けてもらうことを目的として、1セメスターに「日本法概論」「憲法（人権1）」「刑法（総論1）」「民法（総則1）」を配置し、法学の基礎知識を育成します。加えて、基礎知識の定着度を確認するための科目として「現代社会と法律家」を配置しています。

- 法律専門科目群

将来、法曹・国家もしくは地方公務員としてまたはビジネスパーソンとして、法的素養を活かして活躍することができるために必要な幅広い法律知識と技能を身につけてもらうことを目的として、2セメスター以降にそれぞれの学生の将来の目標に応じて選択できる発展・応用的な専門科目を配置しています。各科目を憲法・刑法などの公法科目群（選択必修科目）、民法・商法などの私法科目群（選択必修科目）、そしてそれ以外の発展・応用科目群（選択科目）に区分した上で、カリキュラムを体系的かつ段階的に編成しました。法化の進む現代社会で、どのような問題が生じ、それがどのように解決されるべきかについて学びます。時代の変化に法がどのように対応しあるいは対応していないのか、またそれはなぜかなどについて多角的かつ総合的に、事案によってはグローバルな視野から（「国際法1・2」、「国際人権法」、「国際私法」、「国際取引法」など）分析・考察する技能を身につけます。

- 双方向授業科目群

「法学基礎演習」、「演習1・2・3・4」では、上記の法律専門科目において得られた法律知識・技能をより着実なものにし、実践的に用いる機会が提供されます。また、「特別講義A」においては、高度に専門的な法律知識・技能の習得の機会を、他方、「特別講義B」においては、既に履修した法律分野の基礎固めのチャンス、それぞれ提供します。さらに、とくに意欲のある学生のために法律特修コースとして「法とキャリア概論1・2」および「特論科目」を16単位設けることで、発展的な学習に対する学生のニーズを満たし、資格試験等の準備をサポートする役割を担います。これらの科目では、授業は少人数かつインタラクティブに展開され、教員からきめ細かな指導を受けることができます。主体的かつ積極的に参加することによって、コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力を身につけ、ものの考え方・価値観が多様化する現代社会において議論をどのように進めるべきかを学びます。その過程で、人間の尊厳と人権の尊重を基調とする現代社会において責任ある行動とは何か、を考えます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、法律学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

政治経済学部

【政治学科】

政治経済学部政治学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

政治学科は、現代文明についての深い歴史的、思想的認識に立って、学部共通の目標である「社会力」の育成を基礎として、新しい社会科学の一分野としての科学的な政治学の

確立を目指しています。政治学科が育成する人材像は、地域社会から国際社会まで、政治のダイナミズムを解明することができる人材です。

各授業において育成を目指す力・スキルとして、以下の3つの基準を採用しています。

①「理論的に考える力」は、政治を中心とする社会現象について、その現象の仕組みや因果関係を理論的に理解する能力です。②「現状を分析する力」は、政治を中心とする社会現象について、資料を集めて客観的、多面的に分析する能力です。③「問題解決策を提案する力」は、政治を中心とする社会現象について、問題点を明らかにし、その解決策を提案する能力です。これらの能力の養成を目指し、カリキュラム全体を体系化しています。政治現象を総合的に解明する能力を養うために、ゆるやかなコース制を採用し、政治、行政、国際の3コースを設けて、政治学科の各コースの教育目標にある専門的な知識の修得と求められる能力の育成を目指します。

政治コースは、政治学各分野の理論および関連諸科学についての基礎知識を学び、社会問題の解決を図る能力を養います。行政コースは、主として地方の政治と行政について理論と実際の制度の諸側面を広くかつ深く学び、地方自治・行政のスペシャリストを養成します。国際コースは、主として国際社会の基礎知識とともに、そのメカニズムを理解するために必要な国際関係の理論と現実を学ぶことによって、国際化に対応できる能力を養成します。

各コースには、少人数制の演習が配置され、自分の考えを明確に持ち、集団のなかで発言することを繰り返し行い、専門的な知識を身につけるとともに、創意をもって現実の諸問題に取り組み、スペシャリストとして問題解決策を提案する力を養います。これらにより、社会力とともに専門知識を通じて、「理論的に考える力」、「現状を分析する力」、「問題解決策を提案する力」を持つ人材を育成します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、政治学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【経済学科】

政治経済学部経済学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

経済学は、「社会科学の女王」と称されるように、社会科学分野の中では最も自然科学に近く、その構造は非常に体系的です。そこで、1年次生で基礎導入教育を行います。経済学の基礎理論を習得するために、1年次に「マクロ経済学入門」「ミクロ経済学入門」を必修科目として開講するほか、「経済入門」「政策入門」など現実の経済事象に対する関心を養う授業を履修してもらいます。2年次までに経済学を学ぶための基礎となる統計や計量経済学の基本を学んだのち、3年次以降、応用科目の学習が始まります。基礎から徐々に応用科目へとピラミッドを積み重ねていくように科目履修ができるよう配慮した、体系的なカリキュラムを構築しています。

経済学科では、卒業生が、様々な経済現象や問題に対して広く鋭い目を持ち、“冷静かつ批判的”に現行の経済状況と政策を分析し、新たな政策提言ができる人材として社会で活躍することを望んでいます。そこで、①経済理論分野（様々な経済現象について、その仕組みや因果関係を理論的に解明していくことに重点を置く分野）、②経済政策分野（様々な経済問題に対する現実の政策的対応を取り上げ、その背後にある政策立案過程における政治的な側面も考慮するなどして、多角的な視点から経済政策を批判的に分析し、社会的に望ましい政策のあり方について考える分野）、③実証経済分野（様々な経済現象について、その仕組みや因果関係を数量モデル化したり、歴史的・制度的側面に焦点をあてたり

することによって、実証的に把握し分析する分野)の3つの分野制を導入しています。これにより、①理論的に考える力(経済現象の仕組みや因果関係を理論的に解明できる力)、②政策提言する力(経済問題を多面的に検討して政策提言できる力)、③実証分析する力(経済現象について資料を集め科学的に分析できる力)を備えた人材を養成することを目指しています。

経済学科では、理論的に考える力、政策提言する力、実証分析する力を備えた人材を育成するために、討論や発表を行う機会の多い演習形式の授業を重視しています。そこで、1年次生から4年次生まですべての学年で演習(ゼミナール)形式の科目が履修できるよう、カリキュラムを組んでいます。1年次に必修科目として開講している「入門ゼミナール」では、レポート作成やプレゼンテーションのスキル習得やキャリア意識の醸成につとめています。今後本格的に学ぶ専門分野を見つけるために履修する2年次の「プレゼミナール」を経て、3・4年次の専門ゼミナール(「経済学演習1、2」)では2年間、同一教員から一貫した指導を受けて、専門領域への理解を深め、最終的かつ総合的に学修の成果が評価されます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、経済学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

経営学部

【経営学科】

経営学部経営学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施する。

『教育課程・学修方法・学修成果』

「学系共通科目」、「戦略・組織」、「マーケティング」、「アカウンティング&ファイナンス」、「マネジメントシステム」、「IT・データ分析」、「実践力」、「ゼミナール」の8つの科目群に分類して、授業を配置する。

専門科目の「学系共通科目」科目群では、各学部・学科の基本を理解し、所属する学部学科にとらわれず自ら学びを進め、自ら問題を見出し、解決を目指していく姿勢を身につけていく。「戦略・組織」科目群では、企業経営の仕組みや企業の活動に関する経営諸理論を学ぶ。「マーケティング」科目群では、製品やサービスで顧客価値を生み出すことを学ぶ。「アカウンティング&ファイナンス」科目群では、資金の流れのコントロールを学ぶ。以上の学びにより、経営学の理論・知識を基礎から獲得していく。

これら「戦略・組織」、「マーケティング」、「アカウンティング&ファイナンス」の分野の学びにより得られた知識を分析し、考える力を養うことを目指し、「マネジメントシステム」科目群では、ビジネス活動を遂行する上で必要となるオペレーションや情報管理のしくみを学ぶ。「データ分析」科目群では取得したデータを分析・応用する能力を身に付ける。以上の学びにより、分析する力・自ら考える力を育成する。

そして、学んできた知識や理論などを土台にして実務能力を養い、社会で活躍するために必要なスキルを実践的に身につけるため、「実践力」科目群を配置する。さらに、3、4年次で「専門ゼミナール」を配置し、研究計画の策定と実施、リサーチペーパー(卒業論文等)の執筆、成果報告のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につける。

これらの科目群のうち「戦略・組織」、「マーケティング」、「アカウンティング&ファイナンス」、「マネジメントシステム」、「IT・データ分析」においては、1年次第1セメ

スターを中心に各分野の入門的かつ導入的な内容を提供する必修科目を配置して基本的な知識の習得と理解を促し、今後の大学生活において専門的な科目を履修するための準備を行う。これらの科目群については、その後スムーズに専門科目の学習に移れるよう、第2セメスターから履修が可能な基盤的な専門科目を複数配置する。また、基礎を身につけた上に、「実践力」科目群を2年次から配置し、「ゼミナール」科目群は2年次に選択科目を、3年次からは必修科目を配置する。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、経営学科のディプロマ・ポリシーに示されている『知識・理解』『汎用的技能』『態度・志向性』に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

国際学部

【国際学科】

国際学部国際学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

国際学科では、グローバル化された現代社会が直面する多様な課題を多角的視点から理解し分析できるスキル、どのような人とも意思疎通ができる実践的な語学力、異文化・多文化理解の上に課題解決に向けたプロセスを構想し自らの考えを国際的な環境で発信できるコミュニケーション力、地域社会から国際社会に至るさまざまなレベルの課題に対して多様な背景を考慮しながら高い倫理観をもって多様な人々と協力しながら取り組む姿勢を身につけていることを目指しています。

これらの目標を念頭に、主専攻科目（専門科目）は「国際関係・国際法」、「国際経済・ビジネス」、「平和・人権・開発」、「多文化・コミュニティ」、「情報・コミュニケーション」、「地域研究」の6領域に分類されています。この中から各自の関心に応じた領域を集中的・体系的に学ぶとともに、複数の領域を多角的に履修することで国際学の学際性を学べるのが国際学科の特徴です。

初年次には、「入門ゼミナール」の他、国際学の学修を進める前提として、近代以降の国際社会の歴史を理解するための「国際関係史」及び地球規模課題を英語で学ぶ「GLOBAL ISSUES」を必修科目として履修します。2年次には、国際関係を理論的に学ぶ「国際関係論入門」を必修科目として履修します。2年次以降は、上記の各領域において、以下のような専門的な科目群が選択科目として配置されています。

『国際関係・国際法』領域では、「国際安全保障入門」、「グローバルヒストリー」、「PEACE AND CONFLICT」、「国際法入門」、「LAW ACROSS CULTURES」、「日中関係史」、「LAW AND GLOBALIZATION A」、「LAW AND GLOBALIZATION B」、「日本文化外交」、「LAW AND GLOBAL ISSUES」といった科目を通して、国際関係の理論と実践を学びます。『国際経済・ビジネス』領域では、「グローバルビジネス入門」、「国際経済学」、「国際政治経済学」、「GLOBAL CAREER DEVELOPMENT」、「開発経済学」、「GLOBAL LEADERSHIP」、「グローバルリスク」、「現代アジア経済論」、といった経済的なテーマを複眼的に学びます。『平和・人権・開発』領域では、「ジェンダー論入門」、「開発学入門」、「人間の安全保障」、「レイシズムスタディーズ」、「HUMAN RIGHTS」、「国際機構論」、「平和構築」、「GLOBAL POVERTY」といった平和的共存に不可欠なテーマについて幅広く学びます。『多文化・コミュニティ』領域では、「文化人類学入門」、「フィールドワーク概論」、「国境と人のモビリティ」、「グローバル市民社会論」、「EDUCATION FOR A CHANGING WORLD」、「多文化共生論」、「グローバル社会と宗教」、「ディアスポラ論」といった現代世界の諸相を学

びます。『情報・コミュニケーション』領域では、「コミュニケーション学入門」、「情報と国際社会」、「INTERCULTURAL COMMUNICATION AND THE MEDIA」、「メディアリテラシー」、「INTERNATIOANL DEVELOPMENT AND COMMUNICATION」、「WAR, PEACE AND THE MEDIA」、「INTERCULTURAL COMMUNICATION STUDIES」といった科目を通して、現代世界の課題を「情報」の視点から掘り下げていきます。『地域研究』領域では、「東南アジア研究」、「ヨーロッパ研究」、「中東研究」、「ユーラシア研究」、「MODERN AMERICAN STUDIES」、「ラテンアメリカ研究」、「朝鮮半島情勢」、「中国研究」、「現代フランス社会論」、「環大西洋関係」、「ロシア研究」、「現代韓国社会論」、「アフリカ研究」といった科目を通して、一つの国にフォーカスする視点と地域全般を見渡す視点の双方から世界各地域の問題を捉えることを目指します。

本学科での教育を「実践」に活かすには、外国語能力とコミュニケーション力の涵養が不可欠です。そのため、国際学科では「現代教養科目」の中で英語科目及び第二外国語を履修することを推奨しています。特に英語科目については、「英語の理論と実践現代教養ユニット」と「内容で学ぶ英語現代教養ユニット」を学科が推奨する現代教養副専攻ユニットとして指定しています。加えて、デジタル社会において必須となっている IT の基礎的知識を学ぶ「IT 基礎現代教養ユニット」の履修も推奨しています。

また、国際学科が掲げる「頭と体と心を使った学び」を深めていくために「スタディーツアー」と「フィールドワーク」科目を選択必修としています。国際学科生全員が世界・国内各地での短期・中期留学もしくはプロジェクト型実習を経験し、実践的な異文化理解力とコミュニケーション力を高めるとともに、課題解決に向けたプロセスを構想し協働して取り組む行動力を向上させていくことを目指しています。

国際学科では、変化する現代の国際社会に精通し課題解決力を養っていくことに向けて、ディスカッション等を取り入れたアクティヴ・ラーニング型の授業を行います。少人数で切磋琢磨し、意見を分かち合いながら学ぶゼミナール形式の授業としては、初年次の「入門ゼミナール」でリサーチの仕方やレポート作成及びプレゼンテーションといったアカデミックスキルを学び、グローバル社会の現象や諸問題について調査・発表・議論をします。また、3 年次の「専門ゼミナール 1・2」では、専門知識を深く学ぶと共に、論文の書き方、発表及び議論のスキルを向上させます。4 年次では自ら選んだテーマについて調査・分析を行い研究論文もしくは自らのプロジェクトとして仕上げる「卒業研究」に取り組み、4 年間の集大成とします。

このようなカリキュラムを通して、社会科学的思考に基づいた鋭い洞察力と高いコミュニケーション力を武器に、複雑化するグローバル社会で人々が平和的に共存できるよう、高い倫理観を備えたグローバル市民としての自覚を持ち、かつ地球規模の課題解決に向けて自らの社会的役割を果たすために主体的に行動できる力を養います。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については 国際学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ループブリック（学習の到達度を評価する際に使用する評価指標）による観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により学修成果の評価を行います。その集計結果は FD 活動等を通して教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげます。また、PROG テストを通して、国際学科生の強みであるコンピテンシーの向上度合いを測ります。さらに国際学科のフラッグシップ科目ともいえる「スタディーツアー」ならびに「フィールドワーク」において、達成目標と成果を照らし合わせて自己評価を行うことを通して、ディプロマ・ポリシーで掲げる能力の向上度合いを検証していきます。

観光学部

【観光学科】

観光学部観光学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

観光学部観光学科では、観光・サービス産業を取り巻く社会の変化に対応する力を養うためのキャリア教育、グローバル化に対応するための英語教育、地域やビジネスの課題を発見、探求するためのフィールドワーク等を組み入れながら、学修を基礎から専門へと段階的に進めるカリキュラムを配置しています。

初年次は、大学生として身につけるべき基礎的スキルと教養、観光の諸現象に関する幅広い基礎知識を修得します。キャリア教育についても初年次から段階的に展開し、将来設計に基づく学修意欲を促します。

2年次は、観光学に関する幅広い基本的な知識・技能の学修を目的とした科目を設置します。

また、観光学部のほかに政治経済学部、経営学部、国際学部、情報通信学部が集積する品川キャンパスの強みを活かして開講される「指定ユニット科目」を通じて、観光を多角的な視点から理解、分析するための学際的知識を修得します。

3年次以降は、観光学の実学的特徴も踏まえた多様な授業科目を通じて専門的学修を進めます。少人数のセミナーを必修科目として開講し、総合的な学修成果の集大成としてすべての学生が卒業研究の制作に取り組みます。

具体的な教育課程は以下のとおりです。

初年次は、大学の学修に必要な基礎的技能と、観光学科のディプロマ・ポリシーで設定している自己管理能力や協調性、基本的技能としての情報リテラシーを身につけるための「入門ゼミナールA・B」、観光に関する広範な知識を修得するための「観光学概論1・2」に加えて、グローバル社会を生き抜くために必要な英語科目を必修科目として設定します。また、多様性を尊重したコミュニケーションスキルと協調性の修得を目指すための「異文化コミュニケーション入門」、観光学部における4年間の学修を自らの将来設計と関連付けて理解し、社会的責任感を培うための「キャリアデザイン入門」を設置します。

2年次は、グローバル社会に対応するための「観光英語A・B」をはじめとする語学科目の積極的な履修を促し、国際的視野のもとで観光を推進できる語学力の育成を図ります。また、ディプロマ・ポリシーで設定される知識の修得を目指し、観光と密接に関連する文化・社会・自然の多様性について学修する観光資源系科目を1年次に引き続き配置するとともに、「観光心理学」「国際観光開発概論」など観光の現象と構造に対する基本的理解を深める科目により構成される「学群共通基礎科目」の中から一定数以上の単位を修得します。

3年次からは、問題の発見・解決に応用可能な知識を総合的に修得できるよう、観光・ホスピタリティにかかわる様々な主体の観点から多角的理解を深めるための「ホスピタリティ&ツーリズムマネジメント分野」、多様な観光資源や観光施設等のマネジメントに関する基本的知識を修得するための「地域マネジメント分野」、グローバル社会・情報化社会の進展が観光にもたらす影響を踏まえて将来有用となる知識や技能を修得するための「グローバル・観光DX分野」の3つの分野を設定します。それぞれの分野に、各学生の志向に合わせて選択できる専門性の高い科目を配置するとともに、総合的・実践的な知識を修得する「総合研究」を設置します。観光学部観光学科が目指す総合的な学修を進めるうえで各分野すべてにわたる学修が必要であることから、それぞれの分野ごとに一定数以上の単位を修得します。

観光学科のディプロマ・ポリシーで設定している知識・理解、技能、態度・志向性を総合的に育成することを目的として、観光の現場で多様な知識とスキルを実践的に応用しながら自己管理能力や協調性等を養う「地域フィールドワーク1・2」「国内観光フィールドワーク」「国際観光フィールドワーク」を開講します。また、観光学部観光学科の目的及び養成する人材像を踏まえ、企業や団体等でインターンシップを実践し、将来設計と関連付けた主体的かつ能動的な学修を促す「キャリア開発」の履修を推奨します。

3～4年次に履修する必修科目「セミナー1～4」では、卒業研究の制作を必須とすることで、学修を通じて獲得した知識、技能及び態度・志向性を総合的に活用し、観光・サ

ービス産業及びその研究分野に関して自らが立てた課題に適用し、その解決と新たな価値の創造を目指す学修を進めます。研究計画の策定と実施、卒業研究の制作及び発表並びに口頭試問等を通じて、観光学科のディプロマ・ポリシーで設定している「総合的な学修経験と創造的思考力」を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、観光学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。観光学科のディプロマ・ポリシーに示されている「総合的な学修経験と創造的思考力」に関しては、卒業研究の制作及び教員による口頭試問により評価を行っています。

情報通信学部

【情報通信学科】

情報通信学部情報通信学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

教育課程：情報通信学部情報通信学科の教育課程は、デジタル社会を実現するための総合的情報通信技術を身に付けることを目的とし、配置する科目はITの世界標準カリキュラムであるCS2023(ACM/IEEE)に基づいています。加えて、グローバルシチズンカレッジの各学部各学科の基本を理解し、自ら学びを進め、自ら問題を見出し、解決を目指していく姿勢を身につけていく「学系共通科目」及び「指定ユニット」を設けます。

- 学修方法：

低年次においては、情報通信の基礎を学ぶために、「情報通信基礎」、「ソフトウェア開発基礎」科目群を配置し、数学、物理、情報通信、プログラミングなどの基礎力を養います。また、コミュニケーション力を養うとともに、問題発見力を高めるために「コミュニケーション」科目群を配置します。また、「ICT グローバルコミュニケーション A/B」等の科目では、グローバルに活躍するために必要な実践的な英語力を養います。

高年次には専門的な力を獲得し、低年次に育んだ問題発見力に加えて、問題解決力を育成します。この目標のために、3つの専門領域「デジタルデザイン」、「AI・アプリケーション」、「デジタルプラットフォーム」を設定し、科目を配置します。さらに、自ら課題を設定して解決策を導き出す演習などを通じて、社会の諸課題に柔軟に対応するために資する「プロジェクト基幹」科目群を配置します。

その上で、卒業研究1/2などの科目を含む「情報通信基幹」科目群で、他の科目群で学んだ内容を総括し、総合的な力を養い、コンピテンシーを高めます。

- 学修成果：

情報通信学部情報通信学科のディプロマ・ポリシーに従い、以下の科目・科目群を配置します。

1. 「知識・理解」

- 多様な情報通信技術の基礎的理解のために、「情報通信基礎」、「ソフトウェア開発基礎科目」科目群を配置します。
- 先端的情報通信技術の専門知識理解のために、「デジタルデザイン」、「AI・ヒューマンインターフェース」、「デジタルプラットフォーム」科目群を配置します。

2. 「技能」

- コミュニケーション力を培うために、「コミュニケーション科目」科目群を配置します。
 - リーダーシップ・コーディネート・計画力の技能を習得するために、「プロジェクト基幹」、「情報通信基幹」科目群を配置します。
3. 「態度・志向性」
- 使命感、責任感、倫理観をもって行動する姿勢を身に付けるために、専門科目「情報通信産業論」、「デジタル社会基礎と安全」および、「プロジェクト基幹」、「情報通信基幹」科目群を配置します。
 - 総合的に把握し、自ら考え行動し、解決を目指す態度・志向性を身に付けるために、専門科目「企業研究・インターンシップ」および「プロジェクト基幹」、「情報通信基幹」科目群を配置します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

学位プログラム単位での学修成果の評価については、情報通信学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行います。その集計結果は、FD 活動等とおして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

理学部

【数学科】

理学部数学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

第1～第4セメスターでは、専門基礎科目を通して数学の基礎を確立するとともに、学部共通科目と融合させて幅広い理学の教養を身につけます。これにより自然科学における数学の位置を理解し、自然にキャリアデザインができるカリキュラムです。そのために講義・演習を通して数学の基礎知識を蓄積し確かな計算力を鍛え、並行して論理的に捉える訓練を重ね、理解したことや新たに発見したことを表現する力が会得できるように構成されています。第5～第8セメスターでは、それまでに養った幅広い教養や基礎をさらに発展させると共に、現代までに発展した数学の理論体系を学び、その過程において論理的・抽象的思考力や正確に表現する力を育成し、卒業後を意識した学生のキャリアデザインを助けると同時に、卒業研究に向けての準備が整うカリキュラムです。特に第7～第8セメスターの卒業研究は、自分を磨く不断の努力の姿勢を身につけ、幅広い基礎知識に支えられた考える力と問題解決力を生かし、様々な分野で活躍できる人材を育てます。

第1、第2セメスターには、高校数学から大学数学へ橋渡しとなる基礎科目を配置しています。「微分積分学」、「線形代数学」では現代数学を学ぶための土台であることを意識し、専門性に対応できる能力の育成を始めます。「集合と論理1」、「集合と論理2」においては、現代数学を展開する上で必要な言語の修得を目指します。

第2～第4セメスターでは、数学に関する基礎的知識、専門性に対応できる基礎力を養成するため、代数学・幾何学・解析学・統計学分野の「序論」を学びます。序論科目を通して、数学科で学ぶ専門科目がどのようなものかを理解し、その先に学ぶ内容との関連を意識しつつ理解度の定着を図るために、論理的・抽象的な議論および具体例を通じた演習を織り交ぜながら展開していきます。

第5、第6セメスターでは、これまでに学んだ数学を最大限に活用して現代数学を学びます。第3、第4セメスターで学んだ「序論」を基盤として、より専門的な内容に取り組みます。第7、第8セメスターの卒業研究を見据えて、科目も多岐に渡り開講しています。そして、数学の最新の研究動向に精通し、数学を含めた科学、さらに理学を含めた文化を

理解できる総合的な判断力を養成していきます。

第7、第8セメスターでは、卒業研究科目として「数学研究」を履修し、各自が取り上げたテーマを1年間かけて深く掘り下げることになります。学生の興味や適性に応じて代数幾何、表現論、位相幾何、微分位相幾何、力学系、微分方程式系、可積分系、関数解析、確率論、数理統計学に関連するテーマを自主的に選択します。卒業研究は主に輪講形式でおこない、教員や学生との議論を通じて理解を深めていきます。そして自由な精神のもとに数学に対する研究心を持ち続け、現代社会の様々な分野において数学特有の論理的思考法で諸問題に対処できる能力を養成しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、本学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【情報数理学科】

理学部情報数理学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

第1～第4セメスターでは学部共通科目、専門基礎科目を通じて幅広い理学の教養を身につけることにより、広い学問の中における数学と情報の位置を理解することで、自然にキャリアデザインができるカリキュラムです。同時並行で講義・演習を通して情報数理の基礎を身につけることができます。第5セメスター以降では、それまでに養った幅広い教養や基礎をさらに発展させます。代数学、幾何学、解析学などの純粋数学から、コンピュータの進歩と共に発展してきた離散数学、そして現代社会におけるデータ解析に欠かせない確率論や統計学などの広い意味での数学系の科目を開講し「数理的思考力」の育成にあてています。同時に、コンピュータ科学、データベース、データサイエンス演習などの情報系の科目を開講し「情報科学的思考力」の育成にあてています。より専門性を高めた科目を選択的に学ぶことで、学生が興味を持った分野に関する高度な理論と応用力を身につけます。

第1、第2セメスターは、現代数学の基礎となる「微分積分学」と「線形代数学」を、情報科目の基礎である「プログラミング」を、数理科学の基礎となる「基礎数理」とともにしっかり学び専門性に対応できる基礎能力を固めます。さらには、「データサイエンス入門」と、「確率・統計とデータサイエンスA」でデータサイエンス及び確率・統計の基礎について学びます。特に第1、第2セメスターでは、円滑に専門基礎科目を学び始めることができるために「入門ゼミナールA・B」が用意され、基礎知識の定着を図っています。

第3、第4セメスターでは専門への導入として代数学・幾何学・解析学・離散数学・情報処理の「序論」、「代数学1」、「確率・統計とデータサイエンスB」、「確率・統計」、「コンピュータ概論」を学びます。これらの科目を通して、情報数理学科で学ぶ専門科目がどのようなものを理解でき、その先で学ぶ内容との関連がわかるように展開していきます。一方、第3セメスター以降では、数学・物理学・化学の関連性を理解し、幅広い自然科学の知識を身に付けることを目的とした「数理科学・物理学・化学概説」を学部共通科目として開講しています。これら一連の科目を通して、数学と情報に関する基礎知識、専門性に対応できる基礎力を養成します。

第5、第6セメスターでは、それまでに学んだ内容を活用して、より専門性の高い分野を学びます。第3、第4セメスターで学んだ科目を基盤として学生の興味や適性に応じて科目を選択していくことができます。「代数学2」、「幾何学A・B」、「解析学」、「離散数学とその応用A・B」などの専門科目の他、「コンピュータ科学A・B・C」、「データサイエンス演習」などの応用的な内容を含む高度な専門科目を開講しています。数理と情

報についての思考力を身に着け、蓄えた知識を応用することのできる能力を培います。第6セメスターでは、卒業研究の準備として「ゼミナール1」を開講しています。

第7、第8セメスターでは、卒業研究として「ゼミナール2・3」と「情報数理諸論A・B」を履修し、専門分野をさらに深く学びます。ゼミナールは、興味を持った分野を専門とする教員のもと少人数ゼミ形式で行われ、自ら学んだことを発表し、先生や仲間と議論を重ねることにより、理解を深めていきます。このようにして現実世界の様々な現象や情報を幅広く収集・解析し、人と協力して問題に対処する能力を養成しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、情報数理学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【物理学科】

理学部物理学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

第1～第4セメスターでは学部共通科目、専門基礎科目を通じて幅広い理学の教養を身につけることにより、広い学問の中における物理学の位置を理解することで、自然にキャリア形成へとつながる構成としています。同時に、講義・演習・実験を並行して履修することで、物理学の基礎をしっかりと修得できるようにしています。第5セメスター以降では、それまでに養った幅広い教養や基礎をさらに発展させると同時に近・現代の専門科目を学び、卒業後を意識した学生のキャリアデザインを助けると同時に、卒業研究への準備を整える段階へと移行します。第6～第8セメスターの卒業研究関連科目は、自分を磨く不断的努力の姿勢を身につけ、幅広い基礎知識に支えられた考える力と問題解決力を生かし、様々な分野で活躍できる人材を育てるべくカリキュラムを編成しています。

第1～第4セメスターに開講する「力学1・2」、「電磁気学1・2」、「熱力学」で、高校で学んだ物理を復習しながら、その後大学で学ぶ物理に関する内容を概観し、数学的表現について学びます。第5セメスター以降は各論の講義科目として「解析力学」、「電磁場」、「統計力学」、「流体力学」を中心として各分野について詳しく学びます。また、第1～第4セメスターでは「微積分」、「ベクトルの微積分」、「線形代数1・2」といった数学科目および「物理数学A：微分方程式」、「物理数学B：確率・統計」、「物理数学C：複素解析」、「物理数学D：フーリエ解析」が付随しており、講義科目の一助となるよう開講しています。上記の科目は座学・レポート・試験を通じて、物理学における基本概念や関連する基礎的な数学を学ぶためのものですが、これらの科目の理解をより深いものにして科学的な技能に昇華する一役を担うよう「物理学演習A・B・C・D」といった演習科目を合わせて開講しています。

第1～第3セメスターでは、物理学や自然科学における基本的な考え方を身につけるために、以下のような科目を合わせて開講しています。第1、第2セメスターで開講する「入門ゼミナールA・B」で他者と協力しながら物理学における問題を解決する姿勢や方法を学びつつ、「物理学入門演習A・B」では物理における基礎科目を学ぶための入門的な知識の地盤を固めます。さらに「物理学概論」を通して先端分野を紹介しながら物理学の全体を見ることができるようし、物理学における基本事項の数学的表現方法や物の見方、現象のとらえ方について学びます。一方、第3セメスター以降では、数学・物理学・化学の関連性を理解し、幅広い自然科学の知識を身に付けることを目的とした「数理科学概説・物理学概説・化学概説」を学部共通科目として開講しています。これらの一連の科目を通して物理学への知的探究心を持ち、多種多様な自然現象の源である物理法則を理解する基礎力を養成しています。

第4セメスターからは「量子力学入門」をスタートとして「量子力学1・2」をはじめとする近代の物理学に関する科目を開講しています。特に第5セメスターからは「光・レーザー物理学」、「プラズマ物理学」、「素粒子物理学」、「宇宙物理学」、「分子・生物物理学」、「相対性理論」、「半導体の物理学」、「相転移の物理学」等の専門科目が開講され、現在の先端分野を視野に入れた科目を開講し、物事の本質を知る習慣と能力を身に付け、先端科学・技術につながる科学的かつ総合的思考力を養成しています。

一方、第2～第6セメスターで、現象を理解し複雑な計算をこなせるようにコンピュータ科目として、「情報処理演習」、「コンピュータ物理学演習1・2」が、さらに現象を実際に把握し理解することを目的として「物理学基礎実験」、「物理学実験1・2・3」といった実験科目を開講しています。講義科目とは異なり、これらの科目はあくまでも自分で取り組むことによって進んでいくものであり、今何のため、何をしているのかをよく考えて行うことが必要です。また、取り組んでいる間に自分で問題点を見出し、これを資料や書籍で調べ解決していくなど、実習の一連の過程を経験することによって問題発見・解決型の学習に取り組むことが可能となります。

第6セメスターには「卒業研究準備講座」を開講しています。これは、続く第7セメスターから始まる卒業研究の履修を効果的に行うため、「大学における研究活動とは何か、自ら学ぶとはどういう事か」という心構えについて学びます。そのため、学生は少人数のグループに分かれ、物理学科の教員のもとで週1回、模擬的な研究活動を行います。また、将来社会人になるために必要なキャリアについても学ぶ機会も設けます。

第7・第8セメスターでは「卒業研究1・2」において、各専門分野への興味を膨らませるとともに新しい技術への対応の仕方、研究結果のまとめ・討論・発表の仕方等の一貫した指導を受け、4年間の集大成を卒業論文としてまとめ、自ら考える力を持ち、他者と協力しながら地道に問題を解決していく力を養成しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それにそって担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、本学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【化学科】

理学部化学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

初年次教育（第1・第2セメスター）では、4年間で習得する知識や技術の全体像を理解するとともに、それらを身につけるための基礎学力を養います。第1セメスターには、大学での授業の受け方や学習方法、基本的な大学生活の過ごし方を学ぶ「入門ゼミナール」を開講。さらに、専門基礎科目として、高校化学から大学化学への橋渡しとなる「基礎化学1・2」、専門基礎科目として、化学の専門分野を学ぶ上で必須となる「数学概論1・2」、専門科目への円滑な導入を目的とした「基礎分析化学」「基礎物理化学」「基礎無機化学」「基礎有機化学」を設置しています。第3・第4セメスターでは、専門科目として「分析化学1・2」「物理化学1・2」「無機化学1・2」「有機化学1・2」を開講し、第5セメスター以降の専門科目の基礎を形成します。第5セメスター以降は、化学をより細分化し、各専門分野に特化した授業を展開。これらの科目を通じて、学んだ知識を観察・洞察へ応用する力を養います。また、第5セメスターには、社会人としてのキャリア形成を目的とした「キャリアアップゼミナール」を開講し、将来の進路に必要な知識やスキルの習得を支援します。さらに、英語学習機会の継続を図るため、化学分野で頻出する英語を学ぶ「English in Chemistry 1・2」を設置し、英語運用能力の向上を促します。「化学実験」などの専門実験科目は、理論の検証・実証、物の見方・考え方、発見の経験を学ぶ上で重

要な役割を担い、カリキュラムの中心に位置付けられています。第1～第6セメスターにおいて必修科目として開講し、グループ実験を通じて、意見を整理し、他者の意見を尊重しながら協調する力を育成。さらに、実験結果をレポートとしてまとめることを義務付けることで、社会で求められる論理的思考力や表現力の向上を図ります。第7・第8セメスターの必修科目「卒業研究1・2」は、成果報告のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につける。この科目を通じて、化学を用いた課題の発見・解決能力を養い、社会で活躍できる人材の育成を目指します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、化学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

情報理工学部

【情報科学科】

情報理工学部情報科学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

主専攻科目は、理工系基礎科目、情報技術者基幹科目、コンピュータ実習科目、情報科学共通科目、AI・計算科学・数理工学分野科目、情報計測・可視化分野科目、自己発展科目、情報科学実験、情報科学ゼミナール、卒業研究1・2と段階付け、徐々にステップアップする構成になっています。

初年次より「基本情報技術者試験」のシラバスを参考にした科目配置を行い、社会が本学科出身者に求める情報理工学分野の幅広い基礎知識を身につけさせます。「情報技術者基幹科目」「情報科学共通科目」の上に、本学科独自の研究分野に関連した「AI・計算科学・数理工学」「情報計測・可視化分野」の科目を配置し、専門的知識を教授します。特に、AI・プログラミング教育に対する社会の大きなニーズに応えるため、「人工知能」「確率的最適化」「人工知能プログラミング」「アドバンストプログラミング」を配置し、AI人材に求められる専門的知識を教授します。グローバル人材の育成のため、TOEIC科目を配置し実用英語を身につけさせます。ディプロマ・ポリシーの「知識・理解」に関しては多くの教科で求められる能力で、「情報技術者基幹科目」、「理工系基礎科目」「情報科学共通科目」などの教科を通して育成します。「技能」に関しては主に、「コンピュータ実習科目」を通して身につけていきます。「態度・志向性」に関しては、「入門ゼミナールA・B」などの「自己発展科目」を学ぶ中で育成します。

また、これらの能力すべてが関わってくるのが「卒業研究1・2」であり、卒業研究を習得する過程で、これらの能力をより高めます。「卒業研究1・2」を学修する前に3年次に「情報科学ゼミナール」にて、研究テーマの調査や研究計画の立て方などの基本を学びます。この学修の上に4年次から卒業研究に取り組み、自ら問題点を考え、その解決策を模索し、研究計画を策定し、その成果発表のプレゼンテーションや卒業論文の執筆を行うことを通して情報技術者・研究者としての能力を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、情報理工学部情報科学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ル

ーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【コンピュータ応用工学科】

情報理工学部コンピュータ応用工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

全体は、基礎科目の上に、各専門分野科目、実験・演習分野科目を並列に配し、その上に卒業研究を配置する構成となっています。

初年次には、「コンピュータ工学」、「知能ロボティクス」の両分野に共通する専門基礎知識を修得するため、「電気電子工学概論」、「コンピュータ工学」等の科目を開講し、情報工学分野における幅広い理解を促します。これらには、情報処理技術者試験等の資格取得を念頭に置いた科目も含みます。その上で、各分野について、より深く学ぶための専門科目を高学年に設置します。また、講義科目の理解促進と実践的なスキル向上を目的として、必修の実験科目である「コンピュータ応用実験1・2・3」を開講します。3年次には、情報工学的な解決策を見出す力を養うため、2つの専門分野に対して、それぞれテーマを設定した「システム開発演習」を必修科目として開講します。このように、各分野の基礎から応用までを段階的かつ横断的に学べる専門科目をバランスよく設置します。さらに、国際的に活躍するために必要な英語科目を開講します。そして集大成として、4年次には必修科目である「卒業研究1・2」において研究を実施し、その成果を報告する実践的教育を通して、新しい情報技術を創成する能力やリーダーシップを育成します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、コンピュータ応用工学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等を通して教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【情報メディア学科】

情報理工学部情報メディア学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

アクティブラーニング形式の「情報メディアプロジェクト科目」群を初年次の「情報メディアプロジェクト入門」から最終学年の「情報メディア卒業プロジェクト1・2」まで断続的に配置しており、それらの科目で問題発見・解決のプロセス、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッションを繰り返すことを通して「情報メディアの専門知識を社会が直面する多様な課題の解決に応用する技能」と「情報分野の技術者・研究者としての使命と責任を自覚し、自分の持つ知識と技能をもって社会に貢献しようとする高い倫理観と主体的な姿勢」を育成します。

情報分野の技術者・研究者として活躍するためには、まず情報理工学に関する幅広い知識の習得とその理解が必要です。そのため、「初年次教育科目」群、「コンピュータ基礎・プログラミング科目」群、および「理工系基礎科目」群により数学やプログラミングなどに関する確かな基礎力を養います。また、即戦力として活躍できる情報系人材育成のために「メディアコンテンツ分野」と「メディアコミュニケーション分野」の二つの専門科目群を配置して「メディアコンテンツ分野に関する専門知識」、及び「メディアコミュニケーション分野に関する専門知識」を習得させると同時に、特に3年次に配置した科目（メディアコンテンツ応用実習・メディアコミュニケーション応用実習）では、高度な実習を通して専門知識を課題解決に応用する技能も涵養します。加えて、情報メディアに関する

現状や発展的な内容の把握を目的とした「情報メディア基盤科目」群、「自己発展科目」群により深い専門性を養い、幅広い視点から問題解決に取り組む姿勢の育成を行います。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、情報メディア学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

建築都市学部

【建築学科】

建築都市学部建築学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

建築学科の教育課程の編成方針は、建築都市学部の教育課程の編成方針に従いながら、全ての講義・演習・実習・実験科目において、建築学科の教育方針にもとづくカリキュラムを構築し、多様な学生の資質に応じた実践力が身に付くように指導することを基本とします。

1、2年次には、教養科目と共に学科の専門基礎科目として、「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」の専門力（基礎）を修得するための学科目「建築の基礎」中の科目が開講されます。「建築デザイン入門」「建築の理数学」「建築デザイン演習1」「建築法規」「建築構造力学1A・演習」「建築環境工学・演習」などの科目が用意されています。

3年次以降には、学科の発展科目として「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」の専門力（発展）を修得するための学科目「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」、および3つの専門力を基盤として”様々な分野との協働により問題解決に向けて実践していく力”を体得し、文系と理系の区別に捉われない幅広い専門性を修得するための学科目「実践スタディ」「ゼミナール」中の科目が開講されます。学科目「建築計画」では、建築計画・歴史意匠、建築意匠設計に関する科目が用意されています。学科目「建築工学」では、建築構造・材料施工、建築環境・設備に関する科目が用意されています。学科目「地域デザイン」では、地域・都市マネジメントに関する科目が用意されています。学科目「実践スタディ」では「建築インターンシップA・B」では設計事務所等の協力のもと、実務に触れる機会を設けています。また「建築プレゼンテーション英語」「海外建築研修」は、多様性を尊重する社会に向けてグローバルな視野を修得するための科目となっています。学科目「ゼミナール」では、研究計画の策定と実施、リサーチペーパー（卒業論文）の執筆、成果報告のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につけることができます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、建築学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【土木工学科】

建築都市学部土木工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程

を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

土木工学科の教育課程の編成方針は、全ての講義・演習・実習・実験科目において、土木工学科の教育方針にもとづくカリキュラムを構築し、多様な学生の資質に応じた実践力が身に付くように指導することを基本とします。

1年次には、教養科目と共に学科の専門基礎科目として、「都市と防災」「都市と環境」の専門力（基礎）を修得するための科目群「土木の基礎」中の科目が開講されます。「土木の数学」「土木の微積分」「土木解析学」「プログラミング基礎」「土木基礎力学1（演習含む）」などの科目が用意されています。

2年次以降には、学科の発展科目として「都市と防災」「都市と環境」の専門力（発展）を修得するための科目群「都市と防災」「都市と環境」および3つの専門力を基盤として“様々な分野との協働により問題解決に向けて実践していく力”を体得します。土木工学の幅広い専門性を修得した上で、科目群「実践力」「ゼミナール」中の科目が開講され、学習計画や研究計画の策定と実施、リサーチペーパー（卒業論文）の執筆、成果報告のプレゼンテーション等を通し、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につけます。科目群「都市と防災」では、構造力学、土質力学、コンクリート工学に関する科目が用意されています。科目群「都市と環境」では、水理学、測量学、都市・交通計画に関する科目が用意されています。科目群「実践力」「ゼミナール」では、「環境防災実験」「土木工学ゼミナール」「公務員受験対策専門演習」「卒業研究1・2」などの科目が用意されています。科目群「建築士受験科目」では、「建築計画A」「建築構造製図」「建築法規」などの科目が用意されています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、土木工学科のディプロマ・ポリシーに示されている『知識・理解』『技能』『態度・志向性』に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

工学部

【航空宇宙学科 航空宇宙学専攻】

航空宇宙学専攻では、ディプロマ・ポリシーに掲げた能力を学生が確実に身につけるために、以下の方針に基づいてカリキュラムを編成・実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

1. 体系的な専門知識の修得

航空宇宙学の基礎から応用まで段階的に学修できるよう、入学初年度では全教員による航空宇宙技術の入門科目群を通じて、学問への興味と動機づけを行います。同時に、数学・物理学・情報科学などの基礎科目で専門教育の土台を築きます。2～3年次では、航空工学、宇宙工学、宇宙科学の主要分野（流体力学、材料力学、熱力学、応用力学など）を体系的に学び、航空機、ロケット、人工衛星などの設計・開発・運用に必要な専門知識を修得します。これらの専門知識は、航空宇宙産業はもとより、次世代モビリティや再生可能エネルギー、情報通信など幅広い分野でも活用できる汎用性を持ちます。

2. 実証的探究力の育成

実験・実習科目を豊富に配置します。航空宇宙学製図、航空宇宙特別プロジェクト、航空宇宙学実験などを通じて、学生が主体的に航空宇宙機的设计・製作・実験等に取り組み、理論と実践を融合させた問題解決能力を養います。また、実験から得られたデータの分析と解釈、結果に対する批判的考察、そして学術的・技術的文

書として体系的にまとめる能力を重視します。これらの科学的プロセス全体を通じた学びにより、新産業創出や環境負荷低減、安全性・信頼性確保などの社会的課題に挑戦するための実証的な探究力を育成します。

3. 主体的な学びの促進

3～4年次のゼミナール科目と卒業研究では、自ら研究テーマを設定し、先行研究の調査、実験計画の立案、結果の検証と考察を通じて、課題発見・解決能力と継続的に学び続ける姿勢を養います。これらの科目では、高い倫理観と社会的責任感をもって航空宇宙技術を社会的課題の解決に活かす意識も育みます。学生の自主性を尊重した指導を行い、未来の社会変革を担う人材として自らのキャリアを主体的に開拓する力を養成します。

4. ICT活用能力の強化

高度情報社会に対応できる総合力を養うため、現代教養科目の中で、AI・データサイエンス科目の履修を推進します。専門教育では、プログラミング、数値計算などの実習科目を設け、航空宇宙技術特有の課題（流体解析、構造解析、熱解析、飛行シミュレーション技術など）に先端的なICT技術を応用する能力を培います。これらのスキルは、卒業研究やゼミナール科目、実験・実習科目においても積極的に活用され、社会的課題に対応する実践的な問題解決力へと発展させます。

5. グローバル対応力の養成

国際的な航空宇宙分野で活躍するために必要な英語力とコミュニケーション能力を育成します。専門科目では英語の学術論文や書籍、専門用語を積極的に活用し、航空宇宙技術の専門用語や技術文書の英語表現に慣れ親しみます。また、航空宇宙特別プロジェクト、卒業研究やゼミナールでは国内外の学生・研究者との交流機会を提供します。これにより、グローバルな環境で航空宇宙技術を社会的課題に向けて展開し、国際的なプロジェクトで活躍できる素養を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、航空宇宙学科航空宇宙学専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行います。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげます。

【航空宇宙学科 航空操縦学専攻】

工学部航空宇宙学科航空操縦学専攻が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

大きな特徴として、日米の操縦士免許取得の飛行訓練のため、2年次から3年次にかけて米国ノースダコタ大学への留学があります。

1年次の春 semester は留学に備えた英語科目に力点が置かれ、秋 semester は多くの操縦士専門知識科目を中心に構成されています。操縦士専門知識科目は留学前に取得しなければならない3種の国家試験合格へつなげる性格も併せ持ちます。

ノースダコタ大学への留学中のカリキュラムでは、先ず米国の免許取得課程があり、引き続き国土交通省認可の日本の免許取得課程があります。それぞれ操縦に必要な知識科目と操縦訓練科目で構成されています。

留学から帰国後は「航空産業論」や「航空機システム工学」などの主専攻科目や多様な現代教養科目を各自選択して履修し、深い専門知識や幅広い教養・知識を修得し、4年次には卒業研究を履修し、自らテーマを選び、調査し、考察して、一定の見解を纏め上げるというプロセスを通じて論理的思考力、創造性を育成します。

また教育目標のさらなる実現のため、自主性、協調性、責任感、リーダーシップといった操縦士に極めて重要な素養の醸成、あるいは航空会社に就職した後に円滑に実用機訓練

に適應できる知識と応用力の充実を目指していきます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、航空宇宙学科航空操縦学専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ループリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。以上に加えて国家試験の合格実績、留学に必要なTOEFLを用いた英語力評価、ノースダコタ大学留学を経ての操縦士ライセンス取得実績も学修成果の評価指標として重視します。

【機械工学科】

工学部機械工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

上記の目的を達成するために、機械工学全般に関わる基礎知識及び専門知識を修得する講義科目に加え、実践力を養うためのアクティブラーニング科目や卒業研究などを開講するとともに、技術者としての倫理感を持ち自ら課題を解決する力を養成するカリキュラムを設置しています。

第1～6セメスターでは、現代社会とつながる機械工学における基幹科目を「段階的に学修出来る」ように設置していることに加え、1年次からアクティブラーニング科目や実験実習系科目、卒業研究などの実践的教育を通して、学生の基幹となる力を育成します。また、社会に実在する課題を発見し解決する力や将来を設計する力を育成するために、アクティブラーニング科目として、創造プロジェクト1、創造プロジェクト2、先行卒業研究を設置し、さらにキャリア教育科目として、キャリア設計1、キャリア設計2、キャリア設計3を設置しています。

3～4年次に履修する必修の卒業研究関連科目では、研究計画の策定と実施、卒業論文の執筆、成果報告のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している多角的な視野から問題の解決策を考える力を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、機械工学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ループリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【機械システム工学科】

工学部機械システム工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

上記の目的を達成するために、機械システム工学全般に関わる多様な視点・基礎知識と専門領域の知識を修得する科目に加え、実践力を養うための実験科目、ゼミナール科目、卒業研究などを開講するとともに、技術者としての倫理感を持ち、自ら課題を解決する力を育成するカリキュラムを設置しています。

1～3年次にかけて機械システム工学の基幹科目を段階的に学修できるように配置するとともに、1～4年次にわたって配置されたプロジェクト製作、設計製図科目、実験実習科目、問題発見ゼミナール、卒業研究などを通して実践的教育を行います。学んだ機械システム工学の基礎知識を応用する力を育成するために、ロボットデザイン、ロボットの設計

と創造、モビリティデザイン、モビリティの設計と創造を設置しています。また、入学から卒業までの各セメスターにゼミナール科目を配置し、様々な専門的な課題や技術者倫理に関する課題等に取り組むことにより、「ものごとを複数の視点から俯瞰する力」、「技術者としての高い倫理観」、「人と人、人と情報などを結びつけるコーディネート力」、「広く世界に目を向けて問題解決に取り組む使命感」などを育成することを目指します。『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、機械システム工学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をととして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【電気電子工学科】

工学部電気電子工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

電気電子工学科では、電気工学、電子工学、情報・通信工学の各分野を教授するカリキュラムを提供しており、同分野のハードウェアに関する幅広い知識・技術とともに、情報技術（IT）を活用する能力を身に付けることが可能です。これらを総合的に学修することができ一方、特定の分野を深く学び、学术界で幅広く活躍している教員と先進的な研究を進めることも可能です。これらにより、学生が高い技術力と実践力を獲得することができます。

初年次教育として開設している「入門ゼミナール」「コンピュータ・リテラシ」では、基礎的・汎用的能力を得ることができます。また、数学・物理・化学等の基礎科目を設けており、専門科目を学ぶために必要な基盤を築くことができます。さらに、英語実用科目では、自らが有する知識を英語で他者に伝える実践的能力の育成も行います。この他、初年次から「プログラミング入門」「プログラミング実践」「電気系技術演習」「電子情報実習」などの演習科目・実習科目を設けており、電気電子工学科のカリキュラムに沿って学びを進めることにより、情報技術（IT）を駆使してハードウェアを取り扱うことのできる能力を養うことができます。2～3 年次に履修する「電気系基礎実験」「電気系応用実験 A」「電気系応用実験 B」では、さまざまな電気現象を観測する手法を修得するとともに、測定を通じて得られた情報やデータを、定性的かつ定量的に分析し、その結果を説明する技能を得ることができます。4 年次に履修する「卒業研究 1」「卒業研究 2」では、研究計画の策定と実施、卒業論文の執筆、卒業研究発表等を通じて、課題解決に向けた方策を主体的に立案し、提示する技能を修得することができます。さらに研究室での協働を通じて、他者との協調性や倫理観を身に付けることができます。また、4 年次に開設している関連法規を履修することにより、電気主任技術者、無線従事者などの国家資格を取得する道も拓けます。

本学科は、このカリキュラムを通じ、電気・電子・情報・通信工学の知識と技術を修得した学生が、自らの専門性を活かしながら、グローバル化した社会において活躍できる人材となることを目指しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、電気電子工学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をととして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【医工学科】

工学部医工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

(1) 1、2年次（生体医工学基礎分野）

4年制総合大学ならではの幅広い人文系・工学系教育を行い、他分野にまたがる問題や課題を探る視点を有し、豊かな人間性を基にした社会的知識、物事を論理的、多面的に捉えることができる能力を養う。具体的には「学部共通科目」、「基礎教育科目」、「医工学共通科目」により、生体医工学が人間社会に果たす役割、社会への貢献やその意義について教育しながら、専門分野を支える数学、物理学、英語の基礎を確立する。そして、「電気・計測系科目」、「材料・機械系科目」、「システム・制御系科目」、「情報工学系科目」、「基礎医学系科目」、「臨床医学系科目」、及び「臨床工学系科目」の基礎を学修する。特に、「電気・計測系科目」、「材料・機械系科目」、「情報工学系科目」、及び「基礎医学系科目」においては、高度かつ的確な実践的な工学知識・技術を習得するために、講義形式の授業だけでなく、実習科目やそれに類する科目を配置する。

(2) 3、4年次（生体医工学・臨床工学専門分野）

1、2年次に習得した論理的考察力、工学基礎知識を基に、臨床医学、治療・診断機器に関する座学と実習、および生体医工学に関する高度な講義を展開する。この教育にあたっては工学系教員に加え、医師、臨床工学技士からなる医学系教員を充当し、臨床医学のほか、各種医療機器の構造・原理から治療のメカニズムまでを徹底して教育する科目や、最先端の医療機器や医用システムの開発を念頭に置いた科目も開講して、学生の志向に応じた選択が可能になるように配慮する。

そして、これらの科目の頂点として卒業研究がある。これは、卒業研究を通じて、総合的な問題解決能力を身につけてほしいという趣旨からのものである。本カリキュラムでは、卒業研究を円滑にスタートするために、「研究プレゼミナール」を新たに開講する。これは、配属先研究室の各研究課題に沿って工学的・医学的・社会的知識と、論文の検索や読解、数値解析やプログラミング、実験手法や工作技術といった基礎的なスキルを修得しながら、課題の本質を発見して理解を深める目的をもつ。そして、「卒業研究1」と「卒業研究2」では、「研究プレゼミナール」で修得・理解した内容を各自の課題に応用しながら研究を進める。具体的には、まず課題の設定と背景の洗い出し、研究目的の明確化、解決方法の立案と実験や理論によるその検証、科学に基づく論理的な考察、結論と今後の課題の明確化、口頭および論文による研究発表、といった研究の基本的な進め方を経験する。

以上のカリキュラムから、医療機関、メーカー、大学、商社、公的機関等を含む幅広い生体医工学分野において、将来の指導者に相応しい生体医工学技術者や臨床工学技士を養成する。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、医工学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ループリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

以上のカリキュラム・ポリシーは、ディプロマ・ポリシーの達成のため、後述する教育課程に基づき、資料のとおり図式化することができる。

【生物工学科】

工学部生物工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成

し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

生物工学科では、1) 生物学および化学の基本的・専門的知識を系統的に理解し、2) それら知識に関連する技術・技能を実践する能力を有し、3) 体得した知識・技能を総合的に活用できる志向性をもった人材の育成を行います。

カリキュラムにおいても、1) 生物学・化学分野の基幹科目や発展科目において基本的・専門的知識を教授し、2) 実験科目および卒業研究・ゼミ科目で各種の技能や技術を修得して、3) 問題解決への態度を醸成し、汎用性のある技能の育成、倫理観・使命感・リーダーシップを涵養し、ディプロマ・ポリシーに即した学修課程となるよう科目を配置しています。学修成果の目標としては、初年次教育として一般生物学などの基幹科目で生物工学の基礎的な理解を求めるとともに、遺伝子工学や微生物学などの発展科目において専門知識を身につけます。また、医薬科学や食品科学では生物工学の社会応用を学ぶことで、態度・志向性を養います。そのような専門教育を通して、例えば現代社会における食品分野の課題を提示するなど、教養教育との関係を意識できるものとしています。また、生化学実験などの実験科目では、セッション科目も含めて能動的学修を促すことで、得られた知識を実際に応用する際の技能や姿勢、倫理観を涵養します。卒業研究科目においては、研究室での実験やゼミ・論文等における指導を行い、学生が具体的な結果の検討や考察・ディスカッション等を行うことで、講義科目・実験科目で学んだ知識や技能を応用する力や態度・使命感を身につけます。これらにより、知識・技能を総合して、倫理的規範に則り、生物学および化学分野の課題を発見・解決し、社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、生物工学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をとらえて教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

具体的には、初年次教育としての各基幹科目で生物工学の基礎的理解を求めます。その後の発展科目においては、専門知識が身についたかを評価するとともに、それら知識を社会で応用する際の態度・志向性の修得を求めます。また、実験科目・卒業研究科目では、得られた知識を実際に応用するための技能とあわせて、生物工学の技能を用いる際の態度や姿勢を重視します。

【応用化学科】

工学部応用化学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

応用化学科では、化学的かつ工学的な視点と考え方を身につけるため、教養科目・専門基礎科目・専門基幹科目を段階的かつ体系的に学べるカリキュラムを編成しています。低年次から観察力・判断力・思考力・創造力を養うために実験・演習科目を設け、最終段階となる卒業研究まで、一貫して高度な知識と技能が身につくよう配慮しています。これらの学修を通じて、就職活動や大学院進学に備えられる力を育成します。

変化の激しい現代社会に対応するためには、広い視野を持ち、リーダーシップを発揮しながら積極的に問題を解決する能動的な力が求められます。応用化学科では、入学初年次に「問題発見・解決型」ゼミナールを設けています。また、「応用化学概論」や「ライフデザインのための化学」の履修により、将来の展望や進路選択を考える機会を提供し、「化学インターンシップ」や「理科教育ボランティア」など、キャリア教育を意識した特色ある科目も配置しています。

専門科目では、低年次から高年次にかけて、産業界で求められる4つの専門領域（有機

化学、無機化学、物理化学、化学工学)を基盤としたカリキュラムを編成し、専門性を高める学修を可能にしています。また、近年注目される複合領域にも対応し、有機・無機化学を中心とした化学合成、合成物質の特性評価、化学工学的手法による製造技術、さらに化学を基盤とした次世代エネルギー技術や環境問題についても学びます。応用化学科では、プラスチック、高分子、香料・化粧品、医薬品、セラミックスなどを扱う「応用化学」分野と、次世代電池、燃料電池、自然・再生可能エネルギー、環境リサイクル技術を学ぶ「エネルギー」分野の履修モデルを提示しています。これらを中心に、学習の進度や適性に応じて学びの方向性を選び、個性を伸ばし、興味や希望に沿った知識・技能を体得できるよう、幅広い選択科目を開講しています。

また、データを情報として適切に活用する力が求められることから、情報処理の基本知識・スキルを身につける「基礎情報処理」に加え、より専門的かつ実用的な情報技術を学べる「化学プロセスのための統計処理」「化学プロセス制御」を開講しています。

グローバル社会に対応するため、英語科目にも力を入れています。全学必修の英語コミュニケーション科目に加え、本学科では科学技術系英語を体系的に学修します。「化学英語」では科学技術分野の基本語彙や専門用語、初歩的な表現法を学び、「英文講読」では実践的な科学技術英語に触れる機会を設け、総合力を養います。これにより、卒業研究はもちろん、卒業後の社会においても国際的な科学技術情報を円滑に収集できる力を育成します。

最終年次に履修する卒業研究関連科目では、研究計画の策定・実施、リサーチペーパーの執筆、成果報告のプレゼンテーションなどを通じて、ディプロマ・ポリシーで掲げる「多角的な視野から問題解決策を考える力」を身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、応用化学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

医学部

【医学科】

医学部医学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

- アウトカム基盤型カリキュラム
 - 上記のディプロマ・ポリシー（知識・理解／技能／態度・志向性）を踏まえ、6つのコンピテンスを体系化した教育プログラムを編成する。
 - 基礎医学と臨床医学をシームレスに学修できるようにスパイラル型・統合型カリキュラムを構築し、効率的に専門性を高める。
- 臨床実習・多職種連携教育の重視
 - 低学年からコミュニケーション技術や倫理観、能動的学修態度を育む科目を配置し、高学年では診療参加型臨床実習を実施して、患者中心の医療を実践する力を育成する。
 - 看護学科生など他の医療職に就く学生との連携プログラムを組み込み、チーム医療の実践力を身につける。
- 研究的視点とグローバル化への対応
 - 科学的探究心を育むため、基礎研究や臨床研究手法を学ぶ科目を設け、学生の研究参加を促す。

- 医学英語や国際保健の授業、海外の大学との交換留学制度を通じて、国際感覚を養う機会を提供する。

『学修成果の評価方法』

1. 多面的評価の導入
 - 筆記試験、CBT（Computer Based Testing）、OSCE（客観的臨床能力試験）、レポート課題、ルーブリック評価など多面的評価法を組み合わせ、学修成果を評価する。
 - 学生自身による自己評価も行って評価の参考にするとともに、学生への省察を促す。
2. 進級判定と到達度の確認
 - 毎年度末の進級判定では、学修成果の到達度を評価し、必要に応じて学修サポートを行う。
 - 適切な時期に全国共通の CBT および OSCE を実施し、診療参加型臨床実習で求められる知識・技能・態度の修得について客観的に評価する。
 - 最終学年には総合試験や Post-Clinical Clerkship OSCE を導入し、卒業時における学修成果の到達度を確認する。
3. 継続的な PDCA サイクル
 - 教育カリキュラム、学修成果、評価方法の定期的な見直しを継続的に行うことで、世界医学教育連盟（WFME）の国際認証基準および医学教育モデルコア・カリキュラムに準拠した質の高い教育を維持する。

【看護学科】

医学部看護学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

医学部看護学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

看護学科の教育課程は、教養科目で培った知識や思考力を基盤に、6つのカリキュラム・ポリシー（CP）－「生活／人間／健康」、「地域／社会／環境」、「日常生活支援」、「療養生活支援」、「健康維持増進支援」、「看護の統合」－に基づいて構成されています。教育課程は、必修科目102単位、選択科目8単位を含む110単位で編成されています。

CP「生活／人間／健康」「地域／社会／環境」は、看護学に資する基礎的知識を学ぶため、主に1～2年次に配置しています。CP「日常生活支援」、「療養生活支援」、「健康維持増進支援」では、看護学の専門領域を学ぶため、1年次から4年次にかけて段階的に展開します。さらにCP「看護の統合」を4年次に配置し、専門職としての自律性や国際的視野を育むことを目指します。この体系的な学びを通じて、知識・技能・態度をバランスよく伸ばすことが本学科の教育課程の特色です。

これらのCPは、DPで定められた学修成果に対応するように教育課程を構成しています。CP「生活／人間／健康」および「地域／社会／環境」では、「人体の構造と機能」「社会福祉論」などの科目を通じ、人間、社会、健康などに関するDP『知識・理解』を深め、次に続く「技能」の基盤を形成します。

CP「日常生活支援」「療養生活支援」「健康維持増進支援」は、特にDP『技能』の修得につながります。CP「日常生活支援」では、「看護学概論」「基礎看護技術演習」「基礎看護学実習1・2」などを通して、日常生活に必要な基礎的技能を修得します。また、「療養生活支援」では、「疾病と看護A～F」「成人老年看護学演習A・B」「成人老年看護学実習A～C」などを通じて、病気や障害を持つ人を支える看護実践力を育成し、DP『技能』をさらに深化させます。そして、CP「健康維持増進支援」では、「母性看護学概論」「母性看護学演習」「母性看護学実習」、「公衆衛生看護学概論」「行政保健師実習」などを通じ、地域や家族の健康を守り高める技能を発展させていきます。

そしてCP「看護の統合」では、「看護研究概論」「看護専門ゼミナール」「保健医療パ

ートナーシップ」「統合実習」などを通じ、これまでの学びを統合し、DP『態度・志向性』を高め看護専門職としての自律性や倫理観を培います。

また、看護学科では、基礎から応用へと学修を深めるために、講義・演習・実習という段階的な学修方法を取り入れています。講義で得た知識を演習でグループワークやシミュレーションを通じて模擬的に実践し、さらに実習で教員および臨地実習指導者の支援のもと、患者への直接的ケアを行うことで、看護実践的能力を高めます。

このように本学科の教育課程は、段階的かつ体系的に編成されており、皆さんが計画的に学びを重ねることで、『知識・理解』『技能』『態度・志向性』をバランスよく身につけられるように設計されています。このカリキュラムでの学修成果として下記の力を身につけることを目標にしています。

1. 温かな人間性を育む
慈愛に満ちた、思いやりの心を培う。
2. コミュニケーション力の育成
さまざまな健康レベルの人と関わることができる、幅広い教養を備え、相手を尊重したコミュニケーションがとれる。人が生活するあらゆる場で看護を提供することから、保健医療福祉等の多職種協働が必要である。その実現のため、自他を知り、円滑なコミュニケーションがとれる。
3. 看護専門職としての役割認識の育成
看護職をめざす者として、アイデンティティの確立を目指す。専門職としての社会的役割と、多職種との連携の重要性について考える看護理論に基づく科学的・論理的思考を学び、看護を創造できる。
4. 看護実践力の育成
看護実践力を高め、人間と社会を幅広く理解するために、近接領域（医学、社会学、心理学等）にある他分野の知識を応用して、根拠に基づく技術を身に着ける。
5. 国際的視野の育成
国際的視野を身につけ、4年間を通して段階的な看護英語を習得する。海外の看護事情を学び、諸外国の看護学生・看護師らとの交流体験を通して、グローバル社会において多様な人々と協働できる国際的な視野を養う。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、看護学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

看護学科独自の学修成果の評価としては、基礎看護学実習2終了時、7セメスタ実習ガイダンス時、全実習終了時に「臨地実習における看護基礎技術項目とその達成基準」表を用いて、実習での経験レベルについて自己評価をしています。

海洋学部

【海洋理工学科 海洋理工学専攻】

海洋学部海洋理工学科海洋理工学専攻が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本専攻は、海洋について理学的な視点から教育研究を行う[海洋地球科学]、工学的な視点から教育研究を行う[海洋総合工学]、そして理学的視点と工学的視点を融合して教育研究を行う[環境共生学]の3つの専門学科目群を設置しています。この3つの専門学科目群を通して、本専攻は、海洋の理学と工学を土台にして、自然環境と開発のトレードオフに

について深く理解して意思決定する能力を涵養し、持続可能な人類社会を構築することのできる学生を育てることを教育研究上の目的としています。

この目的を達成するために、本専攻では初年次教育の科目として、高校から大学への円滑な移行を図り、大学での学びをサポートする科目である「入門ゼミナール A、B」を、海を知る科目として「海洋学」「海洋実習 1」「海洋実習 2」を開講します。

専門科目を理解するための[学科共通基礎科目]として、数学、物理学、化学、生物学、地学、情報処理に関する 16 の選択科目を開講します。

そして、本専攻は、[学科共通基礎科目]を土台とする 3 つの専門学科目群[海洋地球科学]、[海洋総合工学]、[環境共生学]を用意しています。

専門学科目群[海洋地球科学]では、「地球科学」「分析化学」「生物海洋学」「地球物理学」「海洋気象学」「海洋化学」「数値解析・シミュレーション」といった地球システムの中核をなす海洋を理解するための科目を開講し、海洋・地球システムの成り立ち、進化、構造とその変化のメカニズムを理解することを目的としています。これらの科目のさらなる理解のために、「海洋物理学実験」「海洋化学実験」を開講します。

専門学科目群[海洋総合工学]では、「材料力学」「電気電子工学」「海洋地質学」「海洋資源学」「計測工学」「海洋リモートセンシング工学」「海洋構造工学」「海洋流体工学」といった浮体技術、水中技術、計測技術に関する科目を開講し、適切な海洋開発に資する工学を理解することを目的としています。これらの科目のさらなる理解のために「海洋資源学実験」を開講します。

専門学科目群[環境共生学]では、「環境科学」「海洋共生論」「沿岸開発学」「海洋管理論」「海洋フィールド実習」「沿岸環境学」といった理学的視点と工学的視点の融合を図る科目を開講し、自然環境と海洋開発のトレードオフについて深く理解することを目的としています。これらの科目のさらなる理解のために「海洋フィールド実習」を開講します。

専門知をより高めるために、3 つの専門学科目群すべてに共通する科目として[学科共通実践科目]を用意しています。現代の科学および技術を学ぶ、あるいは発信するにあたって英語は極めて重要であるため、「海洋理工学英語 A」「海洋理工学英語 B」を開講します。座学、実験・演習より得られた知識や技術を学生自らの主体的な取り組みを通じて総合的に理解・活用することを目的として、「海洋実習 3」を開講します。

[卒業研究科目]として、6 セメスターに「海洋理工学ゼミナール」、7 セメスターに「海洋理工学研究 1」、8 セメスターに「海洋理工学研究 2」を開講します。海洋理工学ゼミナールは、1 年間の卒業研究を主とする海洋理工学研究 1 および 2 の準備科目と位置づけます。「海洋理工学研究 1」は卒業研究をする上で必要な文献収集とその理解やデータ収集・解析等に焦点をあてています。「海洋理工学研究 2」は、4 年間の本専攻での学びの集大成として卒業論文をまとめ、それをプレゼンテーションするための科目です。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、海洋理工学科海洋理工学専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をとらして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【海洋理工学科 航海学専攻】

海洋学部海洋理工学科航海学専攻が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本専攻では、海に関する科学的な基礎知識、船を運航・管理するために必要な海事に関する基礎知識、さらに海技士としての専門分野での応用的知識を養うために 3 つのディプロマ・ポリシーを段階的に育成する体系的な教育課程を設置しています。初年次から基礎・応用・実践へと順序立てて科目を配置し、講義・演習・シミュレーション・実験・乗船実

習など、能動的学修（Active Learning）や実践型教育を重視した教育方法により、ディプロマ・ポリシーに掲げる学修成果の達成を目指します。

1. 教育課程の体系と特色

初年次では、海洋・海事に関する基礎知識と学修姿勢の確立を目的に、「入門ゼミナール」「航海学入門」「運用学入門」「海事基礎英語」など、海技士関連科目では「航海学基礎」「運用学実習」などの導入科目を配置しています。これらの科目では、講義に加えて演習形式の課題やグループワークを取り入れ、学修内容の定着と主体的学修姿勢を育成します。

2年次は、「無線工学」「船舶運航概論」などに加え、海技士関連科目として「地文航法」「航海計器学」「操船学」等、海技士教育に直結する専門科目群を中心に履修し、知識と技能を段階的に深化させます。

3年次以降は、「船舶管理概論」「港湾工学概論」などに加え、海技士関連科目として「載貨論」「海事法規」「レーダー・ARPA 演習」「航海実務実習」等、より高度な専門科目群を座学および演習・実習により修得します。さらに、グローバルな海事産業で活躍できる能力育成のため、「航海英語」「海事通信英語1・2」「海事英語」「海運経済論」「物流論」など国際性・多面的視野を養う科目も設置しています。

2. 教育課程の系統と学修成果との対応

教育課程は以下の系統により構成し、科目履修の進展に応じてディプロマ・ポリシーで示した学修成果との対応を図ります。

● 基盤科目系（初年次教育）

海洋・航海分野の基礎理解と学修姿勢確立

海事系科目：

「入門ゼミナール」「航海学入門」「運用学入門」「海事英語基礎」

海技士関連科目：

「航海学基礎」「運用学実習」「船体構造学」「航海英語」

● 専門知識・技能系（2～3年次中心）

船舶運航に必要な専門知識と技能の体系的理解

海事系科目：

「無線工学」「船舶運航概論」「船舶管理概論」「港湾工学概論」等

海技士関連科目：

「地文航法」「天文航法」「航海計器学」「操船学」「船舶安全学」「航海法規」「海事通信英語1・2」等

● 実践・統合系（3～4年次）

理論と実務を統合し、実践的判断力・課題解決力を育成

海事系科目：

「物流論」「海難論」「船舶保険論」「海上交通工学概論」「船用機器」等

海技士関連科目：

「レーダー・ARPA 演習」「救命・消火演習」「ECDIS 実習」「航海実務実習」等

● 総合探究系（最終年度）

研究活動を通じて論理的思考・探究力・コミュニケーション力を養成

卒業研究科目：

「海事研究ゼミナール」「海事研究1・2」

3. 重要科目における教育・学修方法と方針

ディプロマ・ポリシーで掲げる学修成果の達成に重要な以下の科目群では、本専攻として次の教育方針を取ります。

● 実務技能育成科目（「航海計器学実験」「レーダー・ARPA 演習」「ECDIS 実習」等）

シミュレーション演習・計器操作訓練等を通じ、状況認識・判断能力など実務に直結する技能を体得します。

- 乗船実習（「海洋実習3」「短期乗船実習」「乗船実習A・B」）
練習船望星丸および商船実務環境において、実際の船内生活・運航管理・安全管理体制を体験し、チームワーク・規律・責任感など海技従事者として必須となる職能・態度を形成します。
- 卒業研究科目（「海事研究ゼミナール」「海事研究1・2」）
研究テーマの設定・データ収集・分析・論述・成果発表を通じて、問題解決力・合意形成力・論理的表現力を高めます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、海洋理工学科航海学専攻のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をととして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【水産学科】

海洋学部水産学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科のカリキュラムでは、初年次に「科学表現論」で科学的な思考及び表現方法を学びます。また、導入科目に当たる「水産通論」及び「入門ゼミナールA・B」により、水産学の基礎を学び、2年次以降の学修の方向性を考えさせます。また、関連する技術の基礎を身につけさせるための実験科目として、「生物学実験」と「化学実験」を履修させます。そのほかにも、水産学科として必要な基礎知識に関する科目群を学科科目「水棲生物の基礎知識」や「水産学の基礎知識」として開講しています。

食品科学コースでは、「水産食品学総論」や「水産食品学実習」などの基礎科目を学びながら、「水産利用学」、「食品栄養学」、「食品衛生学」、「食品製造学」などを通して、生物生産科学コースでは、「水産増殖学」、「漁業資源学」、「保全生態学」などで水生生物の増える仕組み、水圏生態系、環境との関連を学び、「魚病学総論・各論」や「水産餌料・栄養学」などを通して、水生生物を資源として持続的に有効利用するための実務的な応用知識を修得するとともに、技能である論理的思考力を養っていきます。

さらに実践力を身につけるために、食品科学コースでは、「食品化学実験」、「微生物学実験」及び「食品製造学実習」といった独自性の高い専門系実験・実習の3科目を、生物生産科学コースでは、「魚類学実験」や「資源生物学実験」などの実験7科目を開講しています。これらの実験や実習科目を通して、能動的に学習しつつ実践力を修得していきます。また、「海洋実習3」により、水生生物資源の持続的利用のための知識・技術を修得し、チームで働く力を高めて、技能を身につけていきます。

最終年次には、総仕上げとして、卒業研究科目に取り組みます。研究の考え方や解析方法、科学論文の書き方、プレゼンテーションの方法などを、教員から個別に指導を受けます。これらの卒業研究科目は、単に知識や技術の修得だけが目的ではなく、様々な活動を学生同士で行いながら、社会貢献度の高い計画を自ら考えて立案し、チームワークを駆使して実行できる高い社会性を持った態度と志向性を身に付けさせます。またサマーセッションに「HACCP実務管理論」があります。「HACCP実務管理論」では食品工場における衛生管理の実践的な思考を身につけ、HACCP実務管理者の資格を得ることができます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、水産学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた

学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD 活動等をととして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【海洋生物学科】

海洋学部海洋生物学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

初年次教育科目として、海洋生物学科の教育目標を理解し、4 年間の大学生活を自覚的かつ計画的に過ごすための必修科目「海洋生物学入門ゼミナール」を開講している。また、「海洋生物学概論」を通して海の生物に広い見識を持たせる。

科学的な知識の礎として＜海洋生物学の基礎＞、＜水棲生物の基礎知識＞の分野において、「動物生理学」「ベントス学」「プランクトン学」「魚類学」「海棲哺乳類学」などを開講し、次いで専門性を高める分野として＜海の生命の科学＞を設け、「海洋生態学」「分子生態学」「臨海実習 A、B」「深海生物学」など多彩な専門科目を学ばせ、多様な海洋生物の生態や行動を理解させる。また、＜ヒトと環境＞分野では「海辺の環境と保全」「環境化学」「水質学実験」「海洋生物多様性保全論」などの授業や実験実習を履修し、海洋生物の保護と管理に関わる問題点、さまざまな技術、情報収集と分析法などを能動的に修得・学修することにより、「知る・書く・伝える」といった技能を養うことができるようになっている。3 年次から「海洋生物総合演習」を開講し、学科内の各教員・研究室の研究の概要を把握することにより、4 年次の卒業論文関連科目の準備に資する。こうした一連のカリキュラムを通して、積極的に新しい知識を吸収し、将来を見据えて社会のために貢献する社会的責任感や志向性を養う。4 年次に研究の集大成として課せられる「海洋生物学研究 1」「海洋生物学研究 2」「海洋生物発展演習」においては、まず「海洋生物学研究 1」で卒業研究に関わる専門知識を修得しつつ課題設定をし、「海洋生物発展演習」において調査・実験手法、分析方法を実践的に学び、「海洋生物学研究 2」において卒業論文のまとめや発表スキルを習得する。これらによって、会得した種々の情報リテラシー能力を強化・定着させる。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、海洋生物学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPA による分析評価、ルーブリック等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っている。そしてその集計結果は F D 活動等をととして教育の質向上のための P D C A サイクルにつなげている。

人文学部

【人文学科】

人文学部人文学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

「ディプロマ・ポリシー」を実現するため、以下の科目区分（学科目）と必修・選択をその目的別に設定している。

人文学科では、地域社会と人の関わりについての人文学的基礎知識および具体的に社会的状況と関連づける思考力を養うために、専門の基礎科目、応用科目、フィールドワーク演習科目、ゼミナール科目を設けている。

● 人文基礎科目

哲学、文学、歴史・考古学、地理・文化人類学などを基軸とした人間性への深遠なる問いかけを相対的、総合的に理解していく視点の育成を目指し、人文学の基礎

的知識の理解を深める科目として、初年次より「総合人文学概論1・2」の必修科目、「人文思想」、「人類学A・B」、「考古学」、「人間と環境」などの選択科目を設置している。初年次～2年次に履修する人文基礎科目では、教員の講義形式の教養的授業と学生による課題の取り組みによって、ディプロマ・ポリシーで設定している人文学の知識・理解の習得向上により現代文明と社会状況の把握理解の力を身につける。

- 人文応用科目

本科目は、グローバルな考え方で、将来に向けてマネジメントしていく力の育成、柔軟な視点の育成を目指し、社会における多様な取組みを理解し、分析することを通して論理的思考力、問題発見と解決能力を修得することを目的としている。そこで、地域において持続可能な社会の実現に向けて必要となる情報の論理的な思考力・分析力を養う学科目〈地域マネジメント〉、多様な価値観を共有し、社会の一員として責任と役割を全うするために必要となるコミュニケーション能力を養うための〈グローバル・コミュニケーション〉、発想力を養い、地域の魅力をグローバルに発信できる表現力を修得するための〈クリエイティブ・カルチャー〉の3領域を設置している。2年次～3年次に履修する人文応用科目では、教員が講義形式で専門的授業を行い、学生による課題やプレゼンテーション、グループワーク等の取り組みによって、ディプロマ・ポリシーで設定している人文学の知識・理解ほか、技能や態度・志向性を養い、分析的で実践的力や、発想力と社会責務力を身につける。

〈地域マネジメント〉領域では、地域産業との連携を進める学修科目として「観光論A・B」、「環境政策論B」、「コミュニティ論」などの専門科目を設置し、事例研究を通して情報を論理的に分析していく力を養う。

〈グローバル・コミュニケーション〉領域では、国際化に応じた異文化の理解、コミュニケーション方法の学修科目として「異文化コミュニケーションA・B」、「環境と社会B」、「インバウンド・コミュニケーション」、「国際海洋論」などの専門科目を設置し、国際社会のなかの日本を理解し、国際交流の実践力を養う。

〈クリエイティブ・カルチャー〉領域では、市民参画のもと地域資源の発掘と表現力を高める学修科目として「言語表現論」、「身体論」、「ミュージアム論」、「海洋考古学」などの専門科目を設置し、持続可能な社会に貢献する発想力を養う。

- フィールドワーク演習科目

「フィールドワーク演習A・B・C・D」を設置して、学生が社会的取組みの現場で特定の事例に臨み、能動的に問題を発見し、解決していく力、実践力を養う。

- ゼミナール科目

2年次から開始される少人数で運営される「基礎ゼミナール1・2」、「ゼミナール1・2」「卒業研究1・2」の必修科目12単位の修得により、これまでの学びを踏まえ、学生自身がグローバルな視点をもって「人間とは何か」を自ら考え、社会で実践していく力を身につけることを目指す。3～4年次に履修するフィールドワーク演習科目（群）とゼミナール科目では、教員はフィールドワークや卒業研究計画の策定等を学生に課し、学生は社会人との協働やケーススタディ、卒業研究を通じて、ディプロマ・ポリシーで設定している能力を網羅的に備えるようにする。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、人文学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っている。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげている。

文理融合学部

【経営学科】

文理融合学部経営学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

経営学科の学科目は、「企業経営科目」、「スポーツビジネス科目」、「アグリビジネス科目」、「ゼミナール科目」から構成され、それぞれの科目に、シラバス等で学修の到達目標が明示されており、どのような力を修得するかを学生は理解できます。「企業経営科目」では、初年次に基礎的科目を必修として学び、その上で、選択必修科目でより専門性の高い、知識・分析能力を獲得します。他方、他の科目である「スポーツビジネス科目」、「アグリビジネス科目」も選択できます。複合的視点から経済・経営的利益だけでなく、社会的利益と環境的利益を考える専門的知識・技術が身に付きます。

特に、情報技術を学ぶことは経営学科において重視され、入門ゼミナールでは、パソコンの操作能力を向上し、文理融合の複合的視点、マネジメント力、問題を解決するための基盤を育成します。

ゼミナールは、1年次の入門ゼミナールを踏まえて、3年次から4年次にかけての「ゼミナール1・2」、「卒業研究1・2」では、最終的かつ総合的な学修の成果が評価されます。これらの学修を通して、理論と実践の融合を目指し、能動的・主体的に自ら経営手法を考え、他者と協働しながら、文理融合的な複合的視点で、企業・社会・国家経営に果敢に取り組む能力を養成します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、ディプロマ・ポリシーに示されている『知識・理解』『技能』『態度・志向性』に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【地域社会学科】

文理融合学部地域社会学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

地域社会学科で学ぶ学科目は、「地域ソリューション科目」、「理工系基礎科目」、「人文社会系基礎科目」、「地域社会基礎科目」、「地域観光科目」、「心理・広報メディア科目」、「ゼミナール科目」から構成される。観光、心理・広報メディアに関わる分野の科目については、基礎的科目から応用と専門性の高い科目まで、それぞれの学科目をバランス良く一貫して体系的に学べる教育課程となっている。

初年次には、学びの基礎として文理融合学部の学部共通科目である「地域ソリューション科目」の「情報リテラシー」、「情報処理入門」、「阿蘇の自然と農業」、「九州の文化と観光」等に加え、文理融合の礎を築くための「理工系基礎科目」として「コンピュータ概論」、「プログラミング入門」、「微積分学」等、「人文社会系基礎科目」として「社会学概論」、「心理学概論」、「経済学概論」等を学科の基礎科目として学ぶ。これらの学科目の科目は2年次まで開講され、文理融合の複合的視点、マネジメント力、問題を解決するための基盤を育成する。

これに加えて、観光、心理・広報メディアの各分野のスタートとしての基礎的知識を養うため「観光学概論」、「観光地域づくり論」、「メディア社会論」、「社会心理学」等を学科の専門科目として学ぶ。また、論理的思考法、レポートの作成の仕方、プレゼンテーションの仕方を「入門ゼミナール」を通して身に付けるように指導する。さらに、1・2年次においては、観光分野では実際の旅行業務に関連する旅行業務科目を学んで将来の観

光関連の資格取得に備え、心理・広報メディア分野では社会心理の基本概念や情報発信力の基礎を養うための実習科目を学ぶ。

2年次にかけて、「地域社会基礎科目」で地域社会の理解とその調査法の基礎を専門的に学ぶ。「地域観光科目」では実際の旅行業務に関連する旅行業務科目を学んで将来の観光関連の資格取得に備え、「心理・広報メディア科目」では社会心理の基本概念や情報発信力の基礎を養うための実習科目を学ぶ。つづいて3年次にかけて、「地域観光科目」では、最先端の観光に関わるマーケティングや経営、政策等について学ぶことで、時代の変化に対応した能力を養うとともに、観光研修で観光と異文化について現地で学び、グローバルな思考も養う。「心理・広報メディア科目」では、社会心理と臨床心理の両面から心理に関する項目や映像、Web、広告等のより専門性の高い知識と技術を学ぶ。また、「心理・広報メディア科目」も「地域観光科目」の観光研修系科目と連携して、現地の資源や異文化を題材として実践力を養う。2年次から3年次の学びにより、専門知識・技術による「融合的な視点」をもって問題解決に取り組む力を育成する。

1・2年次に開講される「地域ソリューション科目」、「理工系基礎科目」、「人文社会系基礎科目」、2・3年次で開講される「地域観光科目」と「心理・広報メディア科目」の各種専門科目を初年次から継続的に学ぶことで、文理融合の複眼的視点による各分野の専門知識と技術を修得する。

3・4年次に開講される「専門ゼミナール1」、「専門ゼミナール2」、「卒業研究1」、「卒業研究2」では、学修の最終段階として自らの学びの成果を論文や作品の形で完成させる過程を通じて、「持続的な視点」をもって活動を継続していく力を備え、「高度情報化社会における持続可能な近未来地域づくり」をどのようにデザインしていくかという創造力を養うとともに、近未来の地域づくりをプロデュース・マネジメントしていこうとする姿勢を涵養する。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、地域社会学科のディプロマ・ポリシーに示されている『知識・理解』『技能』『態度・志向性』に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとらえて教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【人間情報工学科】

文理融合学部人間情報工学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

人間情報工学科の教育課程は、「地域ソリューション」、「人文社会系基礎」、「理工系基礎」、「学科共通」、「情報工学」、「AI・データサイエンス」、「半導体工学」、「環境工学」、「医用工学」、「医学・臨床工学」、「ゼミナール」等の学科目から構成されています。この教育課程では情報と医療を教育の柱とし、基礎から応用までの科目を体系的に配置しています。さらに、本学科では国家資格である臨床工学技士を養成するための科目も配置されており、臨床工学技士に必要な医学的知識や技能、チーム医療の一員としての役割や責任などを実践的に学べるように構成されています。

初年次は、熊本の地域社会を理解し問題を分析解決する能力を養うための「地域ソリューション科目」である「情報リテラシー」、「情報処理入門」、「阿蘇の自然と農業」、「データ解析」等に加え、文理融合の複眼的視点を養うための「人文社会系基礎」として「社会学概論」、「心理学概論」、「経営学概論」、「会計学概論」、「理工系基礎」として「コンピュータ概論」、「プログラミング入門」、「微積分学」などの基礎科目を学びます。これらの学科目の科目は2年次まで開講され、現代社会の複雑な問題を文系・理系の枠を超えた幅広い視点でとらえ、解決するための基盤を培います。さらに、初年次科目として「入門ゼミナール1・2」では大学での学びや専門領域に関する調査、レポート作成、

グループディスカッションなどに取り組み、基本的なアカデミックスキルやキャリア形成への意識を身に付けます。専門科目では「電気・電子工学総論」や「プログラミング」などの必修科目を中心に、電気電子工学や情報工学の基礎を学びます。また、臨床工学技士を目指す学生に対しては、「医用工学」および「医学・臨床工学」の基礎的な科目を開講し、医学に必要な基礎知識だけでなく、医療に携わる者としての心構えや、資格取得に向けた意識付けを行います。

専門性の高い科目は2・3年次を中心に開講しています。「情報処理工学」、「コンピュータアーキテクチャ」、「データサイエンス基礎」などの科目では情報工学の専門知識を学び、「電子回路」、「デジタル回路」、「集積回路工学」、「センサー工学」などの科目では電気電子工学、特に半導体に関する専門知識を学びます。これらの科目を履修することで、ディプロマ・ポリシーで設定している電気電子および情報分野についての専門知識を身につけます。また、「生体計測装置学」、「医用治療機器学」、「呼吸機能代行装置学」、「循環機能代行装置学」、「代謝機能代行装置学」、「臨床医学A・B・C・D」などの医用工学および医学・臨床工学の科目を学ぶことで、ディプロマ・ポリシーで設定している医療分野についての専門知識や技能を身につけるとともに、臨床工学技士の資格を得るための知識・技能を修得します。以上の各分野の科目を体系的に履修することで、ディプロマ・ポリシーで設定している電気電子、情報、医療の各分野における専門知識、それら知識を活用して問題を解決する能力、積極的に知識と技能を修得する態度を身につけます。さらに、「環境情報計測」、「環境エネルギー工学」、「リモートセンシング」などの環境工学の科目を学ぶことで、環境に関する情報を収集・分析・応用できる高度な専門知識を身につけ、ディプロマ・ポリシーで設定している環境保全や応用倫理についての理解を深めます。

本学科では「電気工学実験」、「電子工学実験」、「臨床工学実習A・B・C・D」などの実験・実習科目を各学年で開講し、機器の製作や取り扱い、現象の観察、実験レポートの作成、演習を通じて講義科目で学んだ専門知識への理解を深めます。さらに「プログラミング応用」、「データサイエンス」、「画像処理工学」などの科目では、講義だけでなくプログラミングやデータ分析などの実践的な課題に取り組み、高度な専門知識および問題解決の能力を養成します。医療分野では「医療工学演習」、「医用機器安全管理学演習」、「生体機能代行装置学演習」などで装置の操作・管理技術を学び、知識の理解度を深めるだけでなく、事故事例を通してより実践的な技術を身に付けます。これらの科目により、ディプロマ・ポリシーで設定している電気電子・情報工学および医療工学に関連するハードウェア・ソフトウェアを理解し、問題解決に活用する能力を身につけることができます。4年次に開講される「卒業研究1」、「卒業研究2」では、研究計画の策定と実施、卒業論文の執筆、研究成果のプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している自主的かつ創造的に問題解決に取り組む姿勢および各専門分野における知識・技能を総合的に身につけます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、人間情報工学科のディプロマ・ポリシーに示されている『知識・理解』、『技能』、『態度・志向性』に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

農学部

【農学科】

農学部農学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科では、専門学修へ円滑な橋渡しを行うため「学部共通科目」を通じて、学部や学科の教育課程や学術研究に対する理解などの養成等を行い、農学的視野の拡大と農学的基礎知識や技術を応用する力の養成を意図しています。

さらに、1年次の学科科目である「入門ゼミナール」、「農学基礎演習1・2」、「農学基礎実験」等によって、大学での専門学修に向けた基本的なアカデミックスキルと研究・実験技術を学ぶと共に、就職に向けたキャリア意識の形成を図り、クラスの仲間との集い力を培います。

その上で、教育分野として食用作物・園芸作物の特性や栽培、遺伝育種学や病虫害防除に加えて環境や土壌肥料、植物生理に関する分野を設け、作物に関する幅広い知識の修得と、環境に大きな負荷をかけない持続可能な農業の必要性についての理解を図ります。これらの学問領域については、1、2年次では専門科目の導入分野として位置付けられる「学科基礎科目」が開講されます。さらに、2、3年次では先端の情報を交えながら、それぞれの分野を深く探求できる「学科応用科目」を履修します。また、実学を重視する立場から、「学科基礎科目」及び「学科応用科目」の一環として、植物、昆虫、微生物、土壌、および遺伝子を対象とする農学実験・農学実習を履修し、基礎的な栽培技術から先端の遺伝子工学的な技能までを修得することによって、自らの体験を通じて各専門分野の知識や技術をより深く理解し、課題を解決する能力を養成します。特に3年次で履修する「農学特別演習1・2」では、研究室ごとの少人数教育で先端の専門的な知識と技能を習得します。また、3年次及び4年次においては、研究室ごとの少人数教育で「学科総合科目」である「農学英語講読A・B」を履修し、農学分野の英語文献を講読します。

最終年次である4年次では、3年次までに習得した知識や技術を基礎として、1年を通して「学科総合科目」である卒業研究等に積極的に挑み、課題の設定、目的、材料と方法、結果や考察のとりまとめ等、仲間と切磋琢磨しながら総合力を習得します。最終的には卒業研究の成果を分かりやすく発表すると共に残された課題について、自らの考えを簡潔に表現できる力を身に付け、卒業後にどのような課題にも対応できる問題解決能力と向上心や協調性を併せ持つ人材の育成を教育目標に設定しています。

なお、教員免許状の取得を目指す学生は「教職科目」も履修します。また、副専攻として「農業経済経営基礎」を設定し、農業経済や経営、マーケティング等についても専門的に学ぶことができます。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、農学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等を通して教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【動物科学科】

農学部動物科学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科では、専門学修へ円滑な橋渡しを行うため「学部共通科目」を通じて、学部や学科の教育課程や学術研究に対する理解、情報に関するリテラシーの養成等を通して、農学的視野の拡大と農学的基礎知識や技術を応用する力の養成を意図しています。

本学科では、「動物生命科学関連科目」により動物の体内で生じている現象やそのメカニズムについて学び、その知識を生命現象の解明に役立てていく力を培います。また、「動物飼育・生産科学関連科目」を通じて動物の改良や飼育方法を科学的に学ぶとともに、畜産物の適正な生産について創造する力を養成します。加えて、これらの知識と理解を基に「動物フィールド実習関連科目」を通じて、実際に動物を扱い、適正に飼育し、加えて地

域の生態系と調和して動物を生産するための理論と技術を実践的に身に付けます。さらに、生産された畜産物をより価値を高め、安全に加工するための理論と技術を「食品科学関連科目」を通じて修得します。

一方、上記の科目群で学んだ内容を基礎に、「人と動物の関係学関連科目」を通じて、伴侶動物、野生動物、実験動物、動物園動物等、家畜以外の動物についての知識も深め、これらの動物と人との新しい関係を創造し実践する能力を養成します。

これらの科目群と平行し、初年次から4年次までを通じて段階的に開講される「応用動物科学総合科目」を通じて、学部や学科の教育課程や学術研究に対する理解、キャリア意識の形成、実験科学の基礎の修得、情報に関するリテラシーを養成します。さらに、動物および食に関する文化を理解し、動物科学の社会的意義を踏まえた上で科目群間の相互的かつ体系的関連性を考究するとともに、自主的学習能力や問題解決能力を醸成し、社会に役立つ理論や技術を創造し実践する力を総合的に養成します。

本学科の教育課程は、4年間を通じた繋がりのある学習経験が積めるよう段階的に体系化され、「自ら考え」、「周囲と協力して取り組み」、「新しいことにチャレンジ」、「1つのことを最初から最後まで成し遂げる」ことを意図したアクティブラーニングを可能な限り活用し、批評的、論理的、創造的、省察的、実践的に思考し活動するための力を身に付ける教育を実施します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、動物科学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【食生命科学科】

農学部食生命科学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科では、「学部共通科目」を通じて、学部や学科の教育課程や学術研究に対する理解、実験科学の基礎の修得、農学的視野の拡大と農学の基礎知識や技術を応用する力の養成を意図としています。

本学科では、「食品科学関連科目」により、食品がどのようにして作られ、食べ物の成分が人の健康とどのように関係して影響を与えるのかを科学的に学び、食品についてライフサイエンスの視点から考える力を培います。また、「生命科学関連科目」を通じて、生物（動物・植物・微生物）の生命現象について、化学的、生態学的、分子生物学的に基礎から応用までを学び、生命現象を科学的に理解できる基礎力を養成します。

これらの知識と理解を基に「食生命科学基礎科目」においては、食健康科学・予防医学分野、発酵・食品加工学分野、生命科学分野の各実験を通し、専門的な実験理論や分析技術を実践的に身に付けます。また、実際に肉加工品、乳加工品、農産加工品等の食品製造に関する実習を通して加工技術を学び、食品製造の基礎となる食品科学についての理解を深めます。

一方、上記の科目群と並行して、「自然科学関連科目」では低学年からの学習により、自然科学を学び、科学的思考力の基礎を身に付けることで、生命現象を扱う授業の理解を深めることにつなげていきます。また、「農学分野関連科目」を通して幅広い農学的知識を学ぶことにより、生物生産から食品へ、食品から健康へといった本学科の教育の流れをより体系化することを可能とします。

さらに、これらの科目群に加え、高学年から段階的に開講される「食生命科学総合科目」では、最新のバイオテクノロジー技術の修得を通し、食品科学と生命科学における専門知識と新しい技術の理解を深め、それらの内容を社会に役立つ理論や技術力として総合的に

応用できる能力を養成します。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳格な成績評価を行います。

また、学位プログラム単位での学修成果の評価については、食生命科学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

国際文化学部

【地域創造学科】

国際文化学部地域創造学科が定めるディプロマ・ポリシー(学位 DP)を達成するために、学位 DPに基づき、以下に示す教育課程を編成し、学修成果の評価を実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科の専門教育では、学位 DPを達成するために、社会・経済コースと健康スポーツコースの2コースを設置し、下記科目群ごとに学位 DPの達成を目指します。学修のレベルに応じた学位 DPの達成を可能にするために、授業科目に100番台から400番台までグレードナンバーを設定し、グレード100番台(基礎科目標準レベル)、200番台(基礎科目発展レベル)、300番台(専門科目標準レベル)、400番台(専門科目発展レベル)の順で段階的な学修を可能にしています。

- 初年次教育

本学科では、学科での学修を円滑に進められるよう初年次教育に相当する「入門ゼミナールA・B」を開講し、本学部の教育研究上の目的及び養成する人材像と本学科のディプロマ・ポリシーに対する理解促進と文章作成、図書館利用といった学修に必要な要素に対する理解を図ります。

特に、当該初年次教育科目を通じて、「知識・理解」の学位 DPであるグローバルな視野で地域の多様性を理解できるために、グローバルな視点で地域をとらえる素養を養います。

- キャリア教育

学科独自のキャリア教育科目として、「インターンシップ」を開講し、本学科の「技能」に関する学位 DPである専門的な知識を活用し、物事を適切に処理できる技能を養います。

- 専門教育

「知識・理解」の学位 DPは主として講義系科目と実習系科目の学修を通じてその達成を目指し、「技能」と「態度・志向性」の学位 DPは主としてフィールド系科目と演習系科目におけるディスカッションやグループワークを通じてその達成を目指します。

まず、「知識・理解」の学位 DP達成のために、「社会・経済コース」では、グローバルな視野から地域を捉え、地域の特性をグローバルな規模で発信するグローバルなアプローチに基づいて政治学、経済学、社会学に関する講義を開講し、地域社会に関する知識・理解の深化を目指します。次に、「技能」に関する学位 DPである物事を適切に処理できるマネジメント能力と地域の課題を解決する技能を修得するために、2つのコース共通に、フィールドワーク、インターンシップを開講し、フィールド指向、ディスカッション、グループワークによる学びを実践します。さらに、「態度・志向性」の学位 DPであるリーダーシップ、地域社会の課題に対する当事者意識、責任感、協調性、正義感といった地域社会で生きるために必要な資質を身につけるために、フィールドワークやインターンシップに加えて、グループワークをベースとする演習系科目(入門ゼミナール、プレゼミナール、ゼミナール

を必修科目として開講し、1年次生から4年次生まで一貫したゼミナール重視の学修を実践します。本学科における学修の集大成として、3年次から4年次にかけて、ゼミナール・卒業研究を必修科目として8単位分開講します。ゼミナールの研究成果は「卒業研究」にまとめ、その卒業研究は、卒研発表会を実施し、学位 DP の達成度を最終的かつ総合的に評価します。このゼミナール重視の学修により、知識・技能の蓄積にとどまらず、態度・志向性の DP の達成を含めた「人間性に根差す教養力」を養います。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学習成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳正な成績評価を行います。学科のディプロマ・ポリシー(学位 DP)に示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、カリキュラムマップに基づく GPA による学位 DP 達成度の評価に加え、本学部が独自に実施する学生による自己評価と卒業研究指導教員による学修成果の評価による学位 DP 達成度のアセスメントを行っています。その集計結果は、教育内部質保証・FD 活動をとおして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

【国際コミュニケーション学科】

国際文化学部国際コミュニケーション学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、学修成果の評価を実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

本学科の専門教育では、学部・学科のディプロマ・ポリシーを実現するために、外国語キャリアコースと異文化理解コースの2コースを設置します。学修のレベルに応じた学位 DP の達成を可能にするために、授業科目に 100 番台から 400 番台までグレードナンバーを設定し、グレード 100 番台(基礎科目標準レベル)、200 番台(基礎科目発展レベル)、300 番台(専門科目標準レベル)、400 番台(専門科目発展レベル)の順で段階的な学修を可能にしています。

- 初年次教育

本学科では、学科での学修を円滑に進められるよう初年次教育に相当する「入門ゼミナール A・B」を開講し、初年次1年間をかけて、本学部の教育研究上の目的及び養成する人材像と本学科のディプロマ・ポリシーに対する理解促進と文章作成、図書館利用といった学修に必要な要素に対する理解を図ります。この初年次教育においては、本学科の「知識・理解」の学位 DP に掲げています「ユニバーサル人材育成」の必要性について理解を促進します。

- キャリア教育

学科独自のキャリア教育科目として、「インターンシップ」を開講し、環境適応力や人間関係構築力を育成する一環として、キャリア教育を通じた学びを強化します。

- 専門教育

まず、「知識・理解」の学位 DP である「外国語コミュニケーションに関する専門知識」を身につけるために、「外国語キャリアコース」において TOEIC や TOEFL などの英語資格試験に対応した英語4技能(聞く、話す、読む、書く)に関連する授業科目を開講し、英語基礎力を養います。

次に、ビジネスや環境に対応した実践的な英語コミュニケーション科目や英語で専門分野を学ぶ科目を学修することにより、英語を使って仕事を成し遂げる力を育成します。加えて、北海道と往来の多い中国、韓国、ロシアの言語に加え、フランス語、ドイツ語を「各国語」科目として開講し、複数の外国語を学修することで、語学に関する学修を「技能」の学位 DP である「外国語を使って仕事を成し遂げる外国語運用能力」として結実させます。

異文化理解コースでは、「知識・理解」の学位 DP である「異文化理解に関する専門知識」を身につけるために「異文化理解系科目」を開講します。特に、「異文化理解論」と「多文化共生論」を2026年度カリキュラムより新設し、「技能」の学

位 DP である「良好な人間関係を築けるコミュニケーション能力」と「態度・志向性」の学位 DP である「寛容性」を養成します。その上で、「フィールド系科目」を開講し、フィールドワーク、インターンシップ、パブリックワークを単位化し、これら科目の学修により、「知識・理解」、「技能」、「態度・志向性」のすべてに関する複数の学位 DP 達成を目指します。

本学科の学修は必修科目である「ゼミナール」と「卒業研究」から成る「ゼミナール・基幹科目」(8 単位分)において集大成します。「ゼミナール・基幹科目」では、3 年次のゼミナールでの研究成果を 4 年次に卒業研究へと発展させ、卒研発表会を実施し、すべての学位 DP の達成を目指します。このゼミナール・基幹科目を通じた学修の集大成により、知識・技能の修得のみならず、人間関係構築力や寛容性の修得も含めた「人間性に根差す教養力」を養います。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学習成果の評価については、科目ごとにあらかじめ学修成果目標と成績評価基準を策定・明示し、それに沿って担当教員が公正かつ厳正な成績評価を行います。学科のディプロマ・ポリシー(学位 DP)に示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、カリキュラムマップに基づく GPA による学位 DP 達成度の評価に加え、本学部が独自に実施する学生による自己評価と卒業研究指導教員による学修成果の評価による学位 DP 達成度のアセスメントを行っています。その集計結果は、教育内部質保証・FD 活動をとらして教育の質向上のための PDCA サイクルにつなげています。

生物学部

【生物学科】

生物学部生物学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

生物学部は、陸上と海洋の生物を対象とし、実験系分野とフィールド系分野をともに有しています。そして、生命・自然に関する文理融合の学際的知識と専門知識・技術を主体的・複眼的に活用して、課題に自ら取り組み解決する能力の育成を目指します。学部共通科目はこのうち「文理融合の学際的知識」の養成に主に関わり、教養教育として「生命倫理」、「統計・データ分析法」を開講します。キャリア教育としての「インターンシップ」は、大学のキャリア支援部局との協働により実施されます。その他に主専攻科目として学部共通に、「生物学」「化学」「物理学」「数学」等の理系の基盤となる講義科目と実験科目、教職関係科目も開講しています。また初年次教育としての「入門ゼミナール A」「入門ゼミナール B」では、大学での学習環境、習慣に早く慣れ、大学独特の学修方法を知る内容となっています。

生物学科では、分子・細胞レベルから個体群・生態系レベルに至る広範な生物学と、実験生物から野生生物までをカバーした多様な領域の知識と技術を習得するために、専門教育のカリキュラムを、生命科学系と自然生態系に体系化して構成し、各自の学修過程を認識しやすく配置しています。また、両系に関わる生物学の各専門分野の基礎を学ぶことで専門的な内容を深く理解する思考力と探求力を涵養するための学科基幹科目、バイオ技術や多様な動植物を対象とする野外調査を主体的に実践する力を身につけるための実験実習科目、専門性の高い研究を計画的に進めるための知識や技能を修得するための研究演習科目を配置し、4 年間を通じて、能動的学習につながる科目体系を構築しています。

● 学科基幹科目

1 年次に履修する「生体物質の化学」と「多様性生物学」、2 年次に履修する「細胞生物学」と「発生生物学」は生命科学系科目とつながりが深い分野です。一方、1 年次に履修する「フィールドの科学」、「保全生物学」、「北海道の野生生物」、2 年次に履修する「北海道の環境と保全」は自然生態系科目と関連する分野です。また、2 年次に「生物統計解析法」、3 年次に「システム生物解析法」を履修する

ことで、研究データを適切に管理、分析する技能を高めます。

- 生命科学系科目

分子生物学、細胞科学、バイオテクノロジー等の分野から、生命の仕組みを探究するための講義科目で構成されています。1年次には基礎的な「生物化学」、「微生物学」、2年次にはより専門的な「遺伝子とタンパク質の化学」、「分子生物学」、「動物生理学」、「植物生理学」、3年次には生活や産業活動への応用を学ぶための「動物細胞科学」、「植物細胞科学」、「遺伝子工学」、「微生物利用学」、「薬の作用と化学」、「食品科学」などを配置しています。

- 自然生態系科目

生物の過去（系統分類）・現在（生態）・未来（保全）を読み解くための講義科目で構成されています。学科基幹科目とのつながりで、2年次に生物の歴史を明らかにするための「動物系統分類学」や「植物系統分類学」、生物の分布や生活様式を解明するための「動物生態学」や「植物生態学」、野生生物を対象とする野外調査の方法を学ぶ「野生生物調査法」と「地理空間情報解析法」を配置しています。3年次にはより発展的な「行動生態学」や「保全遺伝学」、絶滅の危機に瀕している生物の保護や生物多様性保全などを専門的に学ぶための「環境保全学」を履修することで、より高い専門知識を身につけます。

- 実験実習科目

2年次の必修科目となる「生物学専門実験1、2」の実験実習科目では、ラボでの基本的な実験技術やフィールドでの安全管理や野生生物を対象とする基礎的な調査手法を修得します。それと同時にこれらの実験科目では、読み手に内容をわかりやすく伝える文章作成や、実験データの解析法や可視化について演習的要素を取り入れた学修方法を取り入れることで、学修成果となるレポート課題の改善点や各自の学修過程を振り返ることができます。その後、3年次に「生命科学専門実験」、「分子遺伝・分子生物実験」を履修することで生命科学系の実験研究、「野生生物調査実習」や「分子系統解析実習」を履修することで自然生態系のフィールドワークや実験研究を主体的に実施するための技能を向上させることができます。

- 研究演習科目

3年次に履修する「生物学ゼミナール」、4年次に履修する「卒業研究1、2」、「卒業演習1、2」では、研究計画の策定と実施、成果物の報告等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している課題に主体的に向き合い、目標実現に向けて取り組む力を身につけます。

生物学科では、これらの科目についての学修順序、科目学修分野、学修時期（推奨セメスター）などについての指標をカリキュラムツリーとして提示しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価は、シラバスやルーブリックで示した学修成果目標、成績評価の基準に基づき厳格な成績評価を実施します。

学位プログラム単位の学修成果の評価は、生物学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等をとおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

【海洋生物科学科】

生物学部海洋生物科学科が定めるディプロマ・ポリシーに基づき、以下に示す教育課程を編成し、実施します。

『教育課程・学修方法・学修成果』

生物学部は、陸上と海洋の生物を対象とし、実験系分野とフィールド系分野をともに有しています。そして、生命・自然に関する文理融合の学際的知識と専門知識・技術を主体的・複眼的に活用して、課題に自ら取り組み解決する能力の育成を目指します。学部共通科目はこのうち「文理融合の学際的知識」の養成に主に関わり、教養教育として「生命倫

理」、「統計・データ分析法」を開講します。キャリア教育としての「インターンシップ」は、大学のキャリア支援部局との協働により実施されます。その他に主専攻科目として学部共通に、「生物学」「化学」「物理学」「数学」等の理系の基盤となる講義科目と実験科目、教職関係科目も開講しています。

また初年次教育としての「入門ゼミナールA」「入門ゼミナールB」では、大学での学習環境、習慣に早く慣れ、大学独特の学修方法を知る内容となっています。

海洋生物科学科では、「海を知り、海を活かす」ため、北海道の豊かな自然を利用した教育が展開されます。①海洋や河川の生物について知り、②海洋や河川の生態系と環境について調べ、③海洋や河川の水産資源を維持し増やし、④水産資源を利用するための内容です。その知識と技術を習得するために、専門教育のカリキュラムを環境・生態科学系と水産科学系に体系化して構成し、各自の学習過程を認識しやすく配置しています。生命倫理や環境・生態科学系、水産科学系を通して、学生は多角的な視点を持ち、現代社会の複雑な課題に対して柔軟な発想力を養うことが期待されます。また、両系に共通基礎科目として「海洋生物科学フィールド実習」「海洋生物の調査・分析法」「理系のための文章表現」などを設置し、共通発展科目として「卒業研究入門」「水産・海洋の職業」などを、研究発展分野として「ゼミナール」「卒業研究」などを設置しています。2つの系は相互に関連・融合し、水産業に将来携わる場合にも水圏生態系や水圏環境に関する知識を活かして活躍できる人材の養成を展望しています。

【環境・生態科学系（海を知る）】は、海や河川・湖沼の生態系について学ぶとともに、水の化学成分や波・流れなどの環境を調べる方法を修得するように構成され、それらの専門知識を修得する講義科目と実験系の技術を修得する実験科目が設定されています。基礎分野としては「海洋物理」「海洋化学」「海洋生態学」「生物多様性学」「河川生態学」「亜熱帯海洋フィールド実習」「亜寒帯海洋フィールド実習」などを配置し、発展科目としては「生物海洋学」「浮遊生物学」「海洋堆積学」「沿岸環境学」「浮遊生物学実験」「河川生態学実験」「海洋化学実験」「沿岸環境学実験」などを開講し、海洋環境・生態系の専門性を身につけます。また、「水族館学」を開講し、博物館や水族館などの展示施設で活躍できる人材を育成します。

【水産科学系（海を活かす）】は、水産生物のからだの構造や仕組み、進化と体系とともに漁場造成や種苗生産、資源管理など、水産生物の増殖や管理方法を学びます。また、水産物の加工法や流通についても学び、海を活かす技術を培います。基礎分野としては「魚類学基礎」「水産生物学」「水産増殖学」「大型海洋動物学」「野外調査実習（フィッシング）」などを配置し、発展分野としては「魚類体系学」「魚類生理・生化学」「海洋哺乳類学」「海洋生物資源化学」「食品流通・管理学」「魚類体系学実験」「水産生物学実験」「魚類生理・生化学実験」「大型海洋動物学実験」「海洋生物資源化学実験」などを開講し、水産生物や水産技術、食品流通の専門性を身につけます。

【研究演習科目】3年次に履修する「基礎ゼミナール」、「研究基礎ゼミナール」および「卒業研究基礎」、4年次に履修する「ゼミナール1、2」、「研究ゼミナール1、2」および「卒業研究1、2」では、海洋生物科学における研究の理解、データの適切な管理・分析に加え、これらのプレゼンテーション等によって、ディプロマ・ポリシーで設定している課題に主体的に向き合い、目標実現に向けて取り組む力を身につけます。

海洋生物科学科では、これらの科目についての学修順序、科目学修分野、学修時期（推奨セメスター）などについての指標をカリキュラムツリーとして提示しています。

『学修成果の評価方法』

授業科目ごとの学修成果の評価は、シラバスやルーブリックで示した学修成果目標、成績評価の基準に基づき厳格な成績評価を実施します。

学位プログラム単位の学修成果の評価は、海洋生物科学科のディプロマ・ポリシーに示されている「知識・理解」「技能」「態度・志向性」に関して、ルーブリックによる観点別評価、修得単位数・GPAによる分析評価、授業についてのアンケート等を用いた学生による自己評価により、学修成果の評価を行っています。その集計結果は、FD活動等とおして教育の質向上のためのPDCAサイクルにつなげています。

入学者の受入れに関する方針（公表方法：各学部学科ページに記載
<https://www.u-tokai.ac.jp/education-research/undergraduate-department/>）

（概要）

文学部

【文明学科】

『求める学生像』

文学部文明学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

人類の歴史と文化の多様性を踏まえつつ、自らの問題意識に即して現代社会の諸問題を的確に捉え、論理的に分析・考察し、様々な表現形式を通じて積極的に発信していく能力をもつことが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

現代社会の変動を見極めながら、独自の観点を持ち、また現代社会に存する多様な価値観を尊重しながら積極的にコミュニケーションをはかり、主体的に社会と関わっていく態度をしめすことが望ましい。

【歴史学科 日本史専攻】

『求める学生像』

文学部歴史学科日本史専攻の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文学部歴史学科日本史専攻で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科では、文系の学問を学ぶ上で必要な論理的な思考力を身につけるとともに、自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

日本史上のさまざまな歴史事象を体系的に理解し、論理的に思考するために、人文科学や社会科学などの広範な知識を総合的に思考して判断し、その成果を適切な方法で表現する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

歴史的な視点で現代社会の課題を捉え、よりよい社会の構築に関与するために、多様な価値観を尊重し、豊かな人間関係と協調性を育みながら、学修や社会活動などに主体的に取り組む態度が期待できること。

【歴史学科 西洋史専攻】

『求める学生像』

文学部歴史学科西洋史専攻の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文学部歴史学科西洋史専攻で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、理系の知識・技能と文系の知識・技能を総合して応用できること、及びそれらの発信ができることが望ましい。特に、現在の社会や科学技術がいかなる歴史的過程を経て形成されたかという思考に基づいて発信できることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を理解し、友好的な人間関係を構築できること、物事に対して主体的に取り組む態度、及び失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとする忍耐力をもつことが望ましい。

【歴史学科 考古学専攻】

『求める学生像』

文学部歴史学科考古学専攻の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、文学部歴史学科考古学専攻で定められたディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校までに学ぶ基礎的な文法を習得し、そのうえで高校段階までの十分な文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことを望みます。

国語では、高校での国語の履修を通して、高校段階までの十分な文章理解力、文章表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことを望みます。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることを望みます。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることを望みます。

(2) 思考力・判断力・表現力

自らの先入観にとらわれず、知識や思考の幅を広げることに旺盛な意欲を持ち、論理的な思考による問題解決能力の向上に努力を惜しまない人であることを望みます。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

人間を理解しようとする広い視野を持ち、他者との対話に積極的であること、また、自己に対しては自省的であり、忍耐力と社会性を兼ね備えること、こうした人材像に共鳴する人であることを望みます。

【日本文学科】

『求める学生像』

文学部日本文学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文学部日本文学科で定められたディプロマ・ポリシーで求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

国語では、高校での古典から現代文まで幅広い科目の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。また読書習慣を持っていることが望ましく、日頃より主体的に日本語・日本文学に親しむ姿勢が望まれる。

英語では、高校の英語の履修を通して英語の基礎的な文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

日本語・日本文学を論理的に分析・考察するために、日本文化全般や現代社会における様々な問題を主体的に発見し、それを総合的に思考し判断する力と、適切に表現する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

日本語・日本文学に対し様々な角度から考察・分析し、学びにおいても多様な他者と協力し、学んだ成果を他者に対して積極的に発信することへの意欲を期待できること。

【英語文化コミュニケーション学科】

『求める学生像』

文学部英語文化コミュニケーション学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもって自主的に取り組める人材。

文学部英語文化コミュニケーション学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語力の文章理解力、表現力、コミュニケーション力を身につけて運用できるようにしておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の履修を通じて、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

世界に存在する多様な文化や価値観を主体的に学び、また自分の考えや判断を自らの言葉で表現し、他者に効果的かつ適切に伝わるように構成し発信するための工夫や努力を主体的に行えることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

英語圏の文化を含め、世界に存在する多様な文化や価値観の違いを尊重する開かれた態度や寛容性を持ち、友好的な人間関係を構築できること、物事に対して主体的に取り組む態度、及び失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとする忍耐力をもつことが望ましい。

文化社会学部

【アジア学科】

『求める学生像』

文化社会学部アジア学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人物。および、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人物。

(1) 『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』 知識・技能

国語については、高校での履修を通して基本的な読解力と文章作成能力を養っておくことが望ましい。

社会については、高校での履修を通して、歴史の見方や世界の地理について基礎的な知識を身につけるほか、政治・経済、倫理、現代社会への関心を深めておくことが望ましい。

英語については、高校での履修を通して、基礎的な文法はもちろんのこと、積極的にコミュニケーションを図っていく姿勢を身につけておくことが望ましい。

数学・理科については、高校での履修を通して合理的、論理的な思考、判断の大切さについて理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

論理的なものごとを考え判断し、豊かに表現していくことが期待できること。

(3) 主体性をもって多様な人びとと協働して学ぶ態度

とくにアジアについて学ぶことを前提として、多様な価値観を理解し、友好的な人間関係のもとで協力して困難な課題に対して果敢に挑戦していくことが期待できること。

【ヨーロッパ・アメリカ学科】

『求める学生像』

文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校での科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。とりわけ、世界史については、ヨーロッパとアメリカの歴史の知識を身につけておくことが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

ヨーロッパ・アメリカに関する歴史・文化・社会に対して幅広い関心を持ち、それらに関する知識を応用して、ものごとを判断し、表現することが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

グローバルな志向性を持ちながら、積極的にものごとに挑戦し、多様な価値観を持つ人々との共生の道を探ることが期待できること。

【北欧学科】

『求める学生像』

文化社会学部北欧学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文化社会学部北欧学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

広い視野と柔軟な発想力、批判的考察力を身につけるために、ものごとを総合的に思考し判断をくだす力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

めざすべき共生社会の一員として多様な価値観を受容し、自らの生き方や社会との関わり方を主体的に構想することが期待できること。

【文芸創作学科】

『求める学生像』

文化社会学部文芸創作学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文系の知識・技能を総合して応用できること、特に文学を含む芸術全般に対する深い理解を有してそれらを表現することが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を認め、人間性の様々な側面を包括的に理解することで、友好的な人間関係を築くことができること、それらの力を優れた文学を含む芸術作品に接して会得できること。

【広報メディア学科】

『求める学生像』

文化社会学部広報メディア学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文化社会学部広報メディア学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

メッセージの社会的価値（政治的・経済的・文化的価値など）を理解するために、さまざまなメディアを比較検討して意見の多様性を総合的に見極める力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

メディアの違いや立場の多様性を理解し、他者との対話やコミュニケーションを大切にしながら、問題意識を持って主体的に取り組むことが期待できること。

【心理・社会学科】

『求める学生像』

文化社会学部心理・社会学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文化社会学部心理・社会学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

現代社会の仕組みや課題について問題関心をもつこと、それらについて多角的な視点で考えようとする、そこで考えたことを主体的に発信しようすること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

一人ひとりが違った個性や価値観をもつ個人であることを尊重しようとする姿勢。

教養学部

【人間環境学科】

『求める学生像』

教養学部人間環境学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲を持った人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校の英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校の国語の科目の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会（世界史、日本史、地理、歴史総合、政治・経済、倫理、公共）の科目の中から選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

理科では、高校での理科（生物、化学、物理、地学、科学と人間生活）の科目の中から選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

人間を取り巻く環境について基本的知識を理解し、持続可能な社会に向けてSDGsに関連する広範な知識を総合的に習得し、思考し判断する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して働く態度

多様な価値観を理解し、良好な人間関係を築くことができること、物事に対して挑戦的に取り組むこと、及び、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとする事が期待できること。

【芸術学科】

『求める学生像』

教養学部芸術学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語科目の履修を通して、英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語科目の履修を通して、日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会（世界史、日本史、地理、政治・経済、倫理、現代社会）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

芸術については、音楽か美術かデザインの少なくとも一つの専門内容に関する基礎的な知識や実践能力を身につけておくことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

身体を通じた実体験から思考しようとする意欲(身体指向)。

現代社会で求められる芸術の役割を、常に模索し判断しようとする意欲(社会指向)。

自身の成果を、他者に、社会に呈示(表現)しようとする意欲(発表指向)。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

自身の適性を自覚し、それに合った専門能力を自ら磨く意欲を持ちながらも、芸術の他の分野領域にも興味を持ち理解し、他分野の仲間達とも協働して創造しようとする姿勢。

児童教育学部

【児童教育学科】

『求める学生像』

児童教育学部児童教育学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校の英語の科目の履修をととして英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修をととして日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会（世界史、日本史、地理、政治・経済、倫理、現代社会）の科目の中から選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学（1A、2B）及び理科（生物、化学、物理）の中から選び、自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、文系の知識・技能と理系の知識・技能を総合して応用できること、及び、それらを発信できることが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を理解し、良好な人間関係を築くことができること、物事に対して挑戦的に取り組むこと、及び、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとするものが期待できること。

体育学部

【体育学科】

『求める学生像』

体育学部体育学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

初等・中等教育で学ぶ文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

また、初等・中等教育で学ぶ論理的思考力、数学的計算力、客観的な観察力を身につけておくことが望ましい。

さらに、学校体育や運動・スポーツ指導に必要な基礎的な実技能力および保健体育科に関する基礎知識を身につけておくことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

体育・スポーツに関する諸問題を人文社会科学、自然科学の学問を用いて理解するために、文系・理系に偏ることない知識を持ち、柔軟な思考力と総合的な判断力が期待できること。また、自らの思考を文章や図表等を通じて的確に伝える表現力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

身体運動の実践とスポーツ科学の探求に関して、多様な価値観と自分自身の役割を理解し、様々な人々や組織と協調して主体的に取り組むことが期待できること。

【競技スポーツ学科】

『求める学生像』

体育学部競技スポーツ学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

体育学部競技スポーツ学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

初等・中等教育で学ぶ文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。また、国際的なコミュニケーション能力も身につけておくことが望ましい。

初等・中等教育で学ぶ論理的思考力や客観的な観察力を身につけておくことが望ましい。

また、競技スポーツ学科では、学科の専門内容に関する基礎知識と実技能力を身につけておくことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

競技スポーツを通じて、自己の競技力向上に留まらず、アスリート、コーチ、トレーナーの広範な知識や技能を総合的に思考し判断できる素養を持ち、スポーツ界をリードできる表現力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

競技スポーツを学ぶ者として、多様な価値観や他者との関係性を理解し、自らの活動を通して主体的に社会に貢献しようとする意欲と能力が期待できること。

【武道学科】

『求める学生像』

体育学部武道学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

体育学部武道学科で定められたディプロマ・ポリシーで求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

初等・中等教育で学ぶ文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。また、国際的なコミュニケーション能力も身につけておくことが望ましい。

初等・中等教育で学ぶ論理的思考力や客観的な観察力を身につけておくことが望ましい。また、武道学科では、学科の専門内容に関する基礎知識と実技能力を身につけておくことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

体育・スポーツ科学、武道に関する諸問題について、広い視野から総合的に物事を思考し判断する力、また筋道を立てて自己の考えを表現する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

体育・スポーツや武道の実践を通して多様な価値観を容認し合い、その活動に対して意欲的に取り組んだり、失敗や挫折を乗り越えて目標達成のために努力する力が期待できること。

【生涯スポーツ学科】

『求める学生像』

体育学部生涯スポーツ学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

体育学部生涯スポーツ学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

初等・中等教育で学ぶ文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。また、国際的なコミュニケーション能力も身につけておくことが望ましい。

初等・中等教育で学ぶ論理的思考力や客観的な観察力を身につけておくことが望ましい。

また、生涯スポーツ学科では、学科の専門内容に関する基礎知識と実技能力を身につけておくことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

生涯スポーツを通じて目指す健康で豊かな生活と現状の諸問題を理解するために、柔軟な思考力と総合的な判断力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

体育・スポーツ科学を学ぶ者として、価値観の多様性と共生（インクルージョン）を受容し、生涯スポーツを自ら実践し、生涯スポーツに関わる諸問題の解決に主体的に取り組む態度が期待できること。

【スポーツ・レジャーマネジメント学科】

『求める学生像』

体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲を持った人材。体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科で定められたディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

初等・中等教育で学ぶ文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。また、国際的なコミュニケーション能力も身につけておくことが望ましい。初等・中等教育で学ぶ論理的思考力や客観的な観察力を身につけておくことが望ましい。

特に、スポーツ・レジャーマネジメント学科においては、その専門性をより高めるために総合的な英語力を有していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、総合的かつ科学的思考による経験を通じた判断力、及び、具体的に伝達できる発信力が期待できること。

また、個々人のライフスタイルに必要なスポーツ・レジャーをマネジメントすることによるクオリティ・オブ・ライフ（QOL）の向上に対する興味・関心を持ち、新たな知識・技能を積極的に実践できる力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を容認して友好的人間関係を築くことができ、その活動に対して効果的なマネジメントを図ることに努め、挑戦的に取り組むことができ、さらに活動時に生じる失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようと努力が期待できること。

健康学部

【健康マネジメント学科】

『求める学生像』

健康学部健康マネジメント学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校の英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが求められます。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが求められます。

地理・歴史、公民の科目では、高校での地理・歴史(世界史探究、日本史探究、地理探究など)の科目や公民(公共・政治・経済など)の科目の中から選択し、個々の項目の内容を理解していることが求められます。

数学と理科は、健康の総合性を理解する上で必要な自然科学的な知識として数学(数学Ⅰ・数学Ⅱなど)及び理科(生物・化学など)を幅広く理解していることが求められます。

(2) 思考力・判断力・表現力

文系の知識・技能と理系の知識・技能のどちらかに偏ることなく学ぶことによって、健康と社会について、柔軟に思考・判断し、自らの考えを発信できることが求められます。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

様々な国や地域の文化から多様な価値観を理解する姿勢、目標達成のために良好な人間関係を築きながら挑戦的に取り組む姿勢が求められます。また失敗や挫折を乗り越えながら、自ら学ぶ意欲も求められます。

法学部

【法律学科】

『求める学生像』

法学部法律学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

法学部法律学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での地歴・公民の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、文系の知識・技能と理系の知識・技能を総合して応用すること及びそれらを発信することが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観に寛容であり、インクルーシブな人間関係を築き、失敗や挫折を恐れず物事に挑戦しようとする意欲を有していること。

政治経済学部

【政治学科】

『求める学生像』

政治経済学部政治学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲を

もった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校（あるいはそれと同等レベル）での科目履修を通じて、文章理解力、表現力、コミュニケーション能力の基礎を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校（あるいはそれと同等レベル）での科目履修を通じて、日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力の基礎を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校（あるいはそれと同等レベル）での科目履修を通じて（社会の科目の中から数科目を選択し）、政治、経済に関する内容の基礎を理解していることが望ましい。

数学および理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

政治・行政・国際社会で発生する様々な課題に対して自分なりに考え、どのような解決策が望ましいかを文系・理系の知識・技能を総合して判断し、適切に表現できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

グローバル社会における諸問題を解決するために、自ら積極的に物事に対して取り組み、多様な価値観を理解・共有して友好な人間関係を構築できること、および目標を実現するために継続的に努力すること。

【経済学科】

『求める学生像』

政治経済学部経済学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校（あるいはそれと同等レベル）での科目履修を通じて、文章理解力、表現力、コミュニケーション能力の基礎を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校（あるいはそれと同等レベル）での科目履修を通じて、日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力の基礎を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校（あるいはそれと同等レベル）での科目履修（世界史、日本史、地理、政治・経済、倫理、現代社会の中から数科目）を通じて、政治、経済に関する内容の基礎を理解していることが望ましい。

数学および理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

経済現象や経済問題に関連した社会で発生する様々な課題に対して自分なりに考え、どのような解決策が望ましいかを文系・理系の知識・技能を総合して判断し、適切に表現できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

経済問題を解決するために、自ら積極的に物事に対して取り組み、多様な価値観を理解・共有して友好な人間関係を構築できること、および目標を実現するために継続的に努力すること。

経営学部

【経営学科】

経営学部経営学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校(あるいはそれと同等レベル)での科目履修を通じて、文章理解力、表現力、コミュニケーション能力の基礎を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校(あるいはそれと同等レベル)での科目履修を通じて、日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力の基礎を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校(あるいはそれと同等レベル)での科目履修(世界史、日本史、地理、政治・経済、倫理、現代社会の中から数科目)を通じて、政治、経済、経営に関する内容の基礎を理解していることが望ましい。

数学および理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

社会で発生する様々な課題に対して自分なりに考え、どのような解決策が望ましいかを文系・理系の知識・技能を総合して判断し、適切に表現できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

自ら積極的に物事に対して取り組み、多様な価値観を理解・共有して友好な人間関係を構築できること、および目標を実現するために継続的に努力すること。

国際学部

【国際学科】

『求める学生像』

国際学部国際学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。ディプロマ・ポリシーで求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語については、高校(あるいはそれと同等レベル)での科目履修を通じて、文章理解力、表現力、コミュニケーション力の基礎を身につけておくことが望ましい。

国語については、高校(あるいはそれと同等レベル)での科目履修を通じて、日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション力の基礎を身につけておくことが望ましい。

社会については、高校(あるいはそれと同等レベル)での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科については、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

世界の様々な文化や多様な価値観に対する許容力を持ち、他の人の意見に耳を傾けるとともに自分の考えを表現できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

新しいことへの挑戦を恐れずに自ら積極的に物事に対して取り組み、多様な価値観

を理解・共有して人間関係を構築できること、また目標を実現するために継続的に努力できること。

観光学部

【観光学科】

『求める学生像』

観光学部観光学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。観光学部観光学科で定められたディプロマ・ポリシーで求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の科目の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

問題・課題に対して多角的視点で考え、どのような解決策が望ましいかを文系・理系の知識・技能を統合して判断し、第三者が理解できるよう分かりやすく的確に表現できる能力を身につけていることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を理解・尊重し、他者に共感して友好な人間関係を構築し、物事に挑戦的に取り組み、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようと継続的に努力する姿勢を持てることが望ましい。

情報通信学部

【情報通信学科】

情報通信学部情報通信学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材であって、情報通信学部情報通信学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して基礎的な英語の文章理解力、文章表現力、会話能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを利用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物）の科目の中から選択した科目について、その各項目の内容を理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

情報通信学の知識や技術を活用するだけでなく、文理融合の観点から、人文・社会科学系の知識・技能も総合して応用できること、および、それらの発信ができることが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

情報通信システムの開発、実装には、多くの過程があり、かつ多くの専門領域の

人々との協働作業が必要となる。情報通信学科ではプロジェクト実習でこれらの学修を進めるが、その際、多様な価値観を理解し、友好な人間関係を築くことができること、物事に対して挑戦的に取り組むこと、および、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとする事が求められる。

理学部

【数学科】

『求める学生像』

理学部数学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

数学については、数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B・数学Cを全て履修していることが必須である。さらにこれらの履修を通して計算方法や証明方法を習得するだけでなくそれらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

英語については、高校での英語の科目の履修を通して英語を使った文章読解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

理科については、高校での理科の科目の中から数科目を履修しており、自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

国語及び社会については、標準的な知識を幅広く習得していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

代数学・幾何学・解析学・統計学の広範な知識を使い、総合的に思考し判断する能力を身につけることが期待できる素養があること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

数学的な視点から社会や自然の諸問題を考えるだけでなく、様々な価値観や立場・役割を理解し、物事に対して主体的に取り組むことが期待できること。

【情報数理学科】

『求める学生像』

理学部情報数理学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、理系の知識・技能と文系の知識・技能を総合して応用できること、及び、それらの発信ができることが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を理解し、友好な人間関係を築くことができること、物事に対して挑戦的に取り組むこと、及び、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとするこ

とが期待できること。

【物理学科】

『求める学生像』

理学部物理学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学及び理科では、得意分野と不得意分野があまりなく幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

物理学では論理的に自然現象を理解することが重要である。1つの自然現象を様々な角度から論理的に考えることができる思考力、思考の結果として得られた答えが正しいかどうかを論理的に見極める判断力、自分の思考過程や結論を論理的にわかりやすく他者に伝える表現力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

実験などでは学生同士や学生と教員とのコミュニケーションも大切で、多様な価値観や立場・役割を理解し、物事に対して他者と協力しながら主体的に取り組むことが期待できること。

【化学科】

『求める学生像』

理学部化学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

理学部化学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語：高校における英語の学習を通じて、文章の読解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけていることが望ましいです。

数学：数学の公式や計算方法を理解し、それらを応用できる能力を身につけていることが望ましいです。

理科：高校の理科の科目から複数の科目を選択し、それぞれの基本的な概念を理解していることが望ましいです。

国語・社会：理系分野の学習に必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましいです。

(2) 思考力・判断力・表現力

化学の知識を活かして、物事の観察や洞察を深める力を養い、学んだ知識を基に社会の課題を発見し、解決する能力が期待されます。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働する態度

化学を学ぶ過程で、自らの考えを整理しつつ、他者の意見を柔軟に取り入れながら意見をまとめる力を養うこと。また、社会で協調して生きる力を涵養できることが期待されます。

情報理工学部

【情報科学科】

『求める学生像』

情報理工学部情報科学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

現代社会における情報科学の様々な課題、ニーズを柔軟に理解する能力を有している。

英語では、高校での英語の履修を通して英文法、文章読解、基礎的な英単語や熟語、リスニングを身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な読解力、表現力、文化的な知識を幅広く身につけていることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

数学や理科などの高校の科目を通して論理的思考能力を身につけておくことが望ましい。また、歴史や地理、倫理など高校の社会科目を通して物事の良し悪しを判断する力、国語や英語などを通して文章を正しく理解し実験で得た結果や自分の考えを正確に他者に伝えられる表現力があることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

高校のクラブ活動や委員会活動、ボランティア活動などを通して、他者の考えを聞き、また他者に自分の考えを伝え、ともに1つの目標達成に向けて協力しようとする態度を身につけておくことが望ましい。

【コンピュータ応用工学科】

『求める学生像』

情報理工学部コンピュータ応用工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

物事の原理や仕組みを論理的に思考する力、物事の良し悪しが判断できる力、それら自分の考えを相手に伝えられる表現力があることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

グループワークなどにおいて、他者の考えを聞いて理解し、他者に自分の考えを伝え、ともに一つの目標達成に向かって協力しようとする態度があることが望ましい。

【情報メディア学科】

『求める学生像』

情報理工学部情報メディア学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

情報理工学部情報メディア学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

物事を論理的に志向する力、物事の良し悪しが判断できる力、自分の考えを相手に伝えられる表現力があることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

グループワークを行う際に、相手に自分の考えを明確に伝え、また相手の考えを尊重し、1つの目標に向かって協力しようとする態度があることが望ましい。

建築都市学部

【建築学科】

『求める学生像』

建築都市学部建築学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくこと。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身につけておくこと。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物）の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していること。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していること。

(2) 思考力・判断力・表現力

都市・建築空間創出のためには、文理融合の視点が必要。建築の専門知識のみならず、文系・理系の広範な知識を総合的に思考し判断する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観や立場・役割を理解し、自分と自分以外の人及び社会システムと健全な関係を築くことができ、都市・建築空間創出の活動に主体的に取り組むことが期待できること。

【土木工学科】

『求める学生像』

建築都市学部土木工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると

期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくこと。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらに応用できる能力を身につけておくこと。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物）の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していること。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していること。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、土木技術に関係する理系と文系（経済学、社会学等）それぞれの知識や技能を総合して応用できること、及び、それらを表現できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

社会基盤整備に必要な市民との円滑な合意形成等のためにも多様な価値観を理解し、友好な人間関係を築くコミュニケーションができること、物事に対して挑戦的に取り組むこと、および、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとする事。

工学部

【航空宇宙学科 航空宇宙学専攻】

『求める学生像』

航空宇宙学専攻は、航空機、ロケット、人工衛星などの開発に携わり、社会に貢献できる人材を育成します。本専攻で学ぶ過程で「体系的な専門知識」「実証的探究力」「ICT活用能力」「グローバル対応力」を身につけ、航空宇宙分野および社会の発展に貢献する人材へと成長して頂きたいと考えています。

航空宇宙学専攻のディプロマ・ポリシーや教育目標をご理解頂き、以下のような資質や意欲を1つ以上持つ学生の入学を歓迎します。

1. 航空宇宙への関心と意欲

航空機、ロケット、人工衛星、空、宇宙に興味があり、この分野で将来活躍したいという夢を持つ人。この関心が、高度な専門知識の修得と航空宇宙分野の発展への貢献につながります。

2. 数学・物理の基礎力

数学や物理が好きで、それらに応用することに意欲的な人。この基礎力が、航空工学・宇宙工学・宙空環境科学の専門知識の土台となります。

3. 実験・ものづくりへの興味

実験やものづくりに興味があり、理論と実践の両方に取り組む意欲がある人。この姿勢が、実証的探究力を育み、社会的課題に挑戦する力につながります。

4. 国際的な視野

英語を含めた幅広い学習に意欲的で、国際的な視野を持ちたい人。この姿勢が、グローバルな環境で活躍できる素養を育みます。

5. 協働性と主体性

チームで協力して課題に取り組むことが好きな人。この協働性が、多様な人々と共に社会変革を担う力となります。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

数学：高校で学ぶ数学の基本的な公式や計算方法を理解していることが望ましい。

これは、航空宇宙分野の専門知識を修得するための不可欠な基盤となります。

物理：高校で学ぶ物理基礎・物理（力学、熱、電磁気など）の基本法則を理解していることが望ましい。

これは、航空機・ロケット・人工衛星の設計・開発・運用の専門知識につながります。

英語：基本的な読解力とコミュニケーション能力があることが望ましい。

これは、航空宇宙分野の英語の書籍や学術論文を読むとき、また、国際的な場で英語を使ってプレゼンテーションを行うときの基礎となります。

情報：基本的なコンピュータやスマートデバイスの操作スキルがあることが望ましい。

これは、高度情報社会に対応できる総合力を養うことにつながり、航空宇宙分野の問題解決に応用されます。

(2) 思考力・判断力・表現力

- 自然現象や技術的な課題について総合的かつ論理的に考える力があることが望ましい。

これは、高等学校などで学ぶ、「総合的な学習（探究）の時間」を通じて身に付く力であり、社会的課題や航空宇宙技術特有の課題に取り組む際の基礎となります。

- 問題解決のために筋道を立てて考える力があることが望ましい。

これは、高等学校などで学ぶ、「総合的な学習（探究）の時間」を通じて身に付く力であり、得られたデータの分析と解釈、結果に対する批判的考察を通して解決へのプロセスを導き出す基盤となります。

- 自分の考えを分かりやすく表現する力があることが望ましい。

これは、高等学校などで学ぶ、「総合的な学習（探究）の時間」を通じて身に付く力であり、実験結果や研究成果を学術的・技術的文書としてまとめ、プレゼンテーションする能力につながります。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

- さまざまな背景を持つ人々と協力して学ぶ姿勢があることが望ましい。

これは、多様な価値観や立場・役割を理解し、自分と自分以外の人及び社会システムと健全な関係を築くための基礎となります。特に航空宇宙分野では世界との関わりが強く、国際的なプロジェクトでの協働につながります。

- 自ら進んで課題に取り組む意欲があることが望ましい。

これは、高等学校などで学ぶ、「総合的な学習（探究）の時間」を通じて身に付く力であり、卒業研究やゼミナールで求められる、自ら研究テーマを設定し課題発見・解決能力を高める基礎となります。

- 新しいことを学び続ける好奇心があることが望ましい。

これは、航空機、ロケット、人工衛星、空、宇宙に興味や好奇心があり、本専攻で4年間にわたり継続的に学び続ける姿勢を養い、社会変革を担う人材への成長につながります。

『入学者選抜の基本方針』

入学者選抜では、上記の資質や能力を東海大学の多面的な選抜方式で評価します。航空宇宙学専攻は、航空・宇宙の技術を通じて社会に貢献したいという皆さんの挑戦を期待しています。

【航空宇宙学科 航空操縦学専攻】

『求める学生像』

工学部航空宇宙学科航空操縦学専攻の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミ

コミュニケーション能力を十分に身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解しておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

航空技術からヒューマンファクターにおよぶ幅広い領域を理解するために、自然科学や社会科学などの広範な知識を総合的に思考し判断すると共に適切に表現する力を持つことが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観や立場・役割を理解し、自分と自分以外の人及び社会システムと健全な関係を築くことができ、また、目標に向かって確固とした意志をもって主体的に取り組み、かつ、チームでの協調的取り組みに積極的になることが望ましい。

【機械工学科】

『求める学生像』

工学部機械工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

工学部機械工学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

高校卒業時における基礎的な学力が期待できること。

数学では、これまでに学んできている数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、これまでに学んできている理科（物理、化学、生物）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。特に、物理を選択していることが望ましい。

英語では、これまでに学んできている英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

機械工学の専門知識を理解するために、自然科学や科学技術などの広範な知識を総合的に思考し判断する力が期待できること。また、自らの考えを他者に的確に伝えられる表現力が期待できることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観や立場・役割を理解し、自分と他者及び社会システムと健全な関係を築くことができ、異なった分野の他者とも連携しながら、物事に対して主体的に取り組むことが期待できること。自ら問題を発見して課題を創出し、その課題に対して最後まで粘り強く取り組む姿勢が期待できることが望ましい。

【機械システム工学科】

『求める学生像』

工学部機械システム工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらに応用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から物理を中心に数科目を選択し、個々の項目の内容のみならず、それらの繋がりを理解していることが望ましい。

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な読解と表現（コミュニケーション）能力と、文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

機械システム工学の専門知識を理解するために、数学や物理などの自然科学の知識やそれらを活用した科学技術などの知識を基に総合的に思考し判断する力が期待できること。また、他者に自らの考えを的確に伝えることができる表現力を持つことが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

機械システム工学に対して強い関心と学びに対する意欲があることが望ましい。また、様々な価値観、立場、役割を理解し、多様な人々と協働し、主体的に物事に取り組むことができることが望ましい。

【電気電子工学科】

『求める学生像』

工学部電気電子工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

工学部電気電子工学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらに応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

電気工学、電子工学、情報・通信工学の基本的な知識を理解するために、自然科学の広範な知識を総合的に思考し判断する力を発揮することが期待できる人材が望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

社会の一員として誠実に行動でき、目的に応じて必要な情報を取得し多様な考えを取り入れ、それを基に自分の考えをまとめ、目標に向かって主体的に取り組むことが期待できる人材が望ましい。

【医工学科】

『求める学生像』

工学部医工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ強い意欲をもち、かつ、工学部医工学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけるのに十分な基礎学力を有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語は、高校の英語科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学は、高校の数学科目の履修を通して定理の証明、公式の導出、計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校の理科（物理、化学、生物）の中から複数科目を選択し、自然現象とその背景にある原理や法則を理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

生体医工学を科学的根拠に基づいて理解するのに必要な論理的思考力と判断力を持ち、医学と工学の境界領域を意識して学ぶために努力できる人材が望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

医工学科の教育内容は多様な周辺分野と関連するため、みずから進んで情報収集し、さまざまな人々と交流できる積極性を持つ人材が望ましい。

【生物工学科】

『求める学生像』

工学部生物工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。および、工学部生物工学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して、文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科の科目の中から複数科目を修得し、個々の項目の内容とともに、それらの繋がりを理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要となる読解力と表現・コミュニケーション能力を有し、社会的・文化的な背景に関する知識を持っていることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

社会における生物学および化学の役割を理解するために、知識・技能を活用し、自然科学や社会科学などの知識を踏まえて総合的に思考・判断し、様々な問題に対する解決方法を模索できる人材が望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観やそれぞれの人がおかれた立場・役割を理解・尊重するとともに、他者や異なる社会システムと健全な関係を築くことができ、解決すべき課題に対して逃げることなく積極的にかつ主体的に取り組むことができる人材が望ましい。

【応用化学科】

『求める学生像』

工学部応用化学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

工学部応用化学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

国語および社会は、理系の学問を学ぶ上で要求される定量的な議論や説明に必要な読解力と表現力、文化的・社会的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して、公式や計算方法を理解したうえで、それを応用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から、化学と他の数科目を選択し、個々の項目の内容のみならず、それらの繋がりを理解している

ことが望ましい。

英語では、高校での英語の科目の履修を通して、英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

自然科学や社会科学、工業技術、環境・社会問題の立体的構造を理解するために、広範な知識や技能を活用して総合的な思考と判断を行い、その解決方法を模索することが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を認め、それぞれの立場・役割を理解し尊重するとともに、他者や異なる社会システムと健全な関係を築くことができるために、物事に対して積極的にかつ主体的に取り組み、多様な人々と協働して学ぶ態度を持つことが望ましい。

医学部

【医学科】

医学科の教育研究上の目的及び養成する人材像を理解し、これらを達成するために自ら学ぶ意欲を持った人を求めます。

『求める学生像』

- 本学科の教育研究上の目的と 6 つのコンピテンスを理解し、生命の尊厳を尊重しつつ患者・社会に貢献する意欲をもった人材。
- プロフェッショナリズムを重んじ、生涯にわたり自己研鑽を継続する意志をもった人材。
- ディプロマ・ポリシーで求められている資質・能力を、身につけられると期待できる適性と基礎学力を十分に有する人材。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

1. 知識・技能

高等学校段階で習得すべき基礎学力（理科・数学・英語など）を十分に身につけ、医学の学修や研究に応用できる素養を身につけておくことが望ましい。

2. 思考力・判断力・表現力

論理的に思考・判断でき、自らの考えを発信できる能力を身につけておくことが望ましい。

3. 態度（主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）

他者の意見を傾聴し、尊重しながら、積極的に学んでいく態度を身につけておくことが望ましい。

【看護学科】

『求める学生像』

医学部看護学科は、本学科の教育目的である「さまざまな健康レベルの人が、あらゆる生活の場で、その人らしい健康な生活を支援する看護が実践でき、温かな人間性をもつ専門職の育成」に共感し、自ら学ぶ意欲を持った人材を求めます。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

国語、英語、数学、理科、社会の科目の知識を幅広く理解していることが望ましい。

国語及び英語では、高校での国語及び英語の履修を通して文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物）の科目の中から複数科目を履修し、

選択した科目の内容を理解していることが望ましい。

社会では、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

既に学び得た知識や技能を通して、社会に起こるさまざまなことに興味を持ち、考えを深め判断し、相手を尊重しながら自分の考えを発信できる能力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多くの学習を通して表現力を身につけ、多様な価値観や立場・役割を理解し、さまざまな人々と協働し、物事に対して主体的に取り組むことが期待できること。

海洋学部

【海洋理工学科 海洋理工学専攻】

『求める学生像』

海洋学部海洋理工学科海洋理工学専攻は、海洋を中核とする地球システムで生起するさまざまな自然現象を対象とし、そのメカニズムなどを探求します。また、人類を含む生物圏のハビタビリティを考慮した海洋開発を通して、持続可能な人類社会の構築に貢献したいと考えています。

したがって、このような本専攻の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲を持った人の入学を期待しています。そして、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を身に付けられると期待できる学力を有する人を幅広く受け入れます。

『入学者に求める知識技能、思考力、判断力、表現力、態度』

(1) 知識・技能

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましいです。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身につけておくことが望ましいです。

英語では、高校での英語の科目の履修を通じて、文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましいです。とりわけ国語は、論理的な思考の源泉ですので極めて重要です。

(2) 思考力・判断力・表現力

海洋に関する諸問題は、理学的のものであれ、工学的なものであれ、極めて複雑でかつ広範囲なものです。したがって、経験や理論に根ざした「知識」を総動員してじっくりと思考し、合理的な根拠に基づいて論理的に判断することが求められます。しかし、このような思考・判断は一朝一夕に身につくものではありません。本専攻は、このような思考・判断ができるようになりたいと考える人を広く受け入れます。

(3) 主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度

海洋理工学専攻は、海洋に関する理学・工学を学ぶ専攻です。海洋に関する理学・工学は自然と人間の関わりを学ぶという側面が極めて大きいです。言い換えれば、社会からその有用性が強く求められているということです。社会からの有用性とは、まさに「高い市民性」＝多様な人々と共同して学ぶ態度にほかなりません。この高い市民性もまた、一朝一夕に身につくものではありません。本専攻は、このような市民性を身につけたいと考える人を広く受け入れます。

【海洋理工学科 航海学専攻】

『求める学生像』

海洋学部海洋理工学科航海学専攻の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

海洋学部海洋理工学科航海学専攻で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

英語では、高校での英語の科目の履修を通して文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の科目の履修を通して、日本語文章の精確な読解力、論理的文章構成能力、多様な表現力を身に付けておくことが望ましい。

その他の科目においては、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的・社会的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

海運界、海事関連産業が抱える多様な諸問題を理解するために、自然科学や人文社会学などの広範な知識を総合的に思考し判断する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

海運界や海事関連産業で海技従事者として活躍するために必要な能力の修得を通して、多様な価値観や立場・役割を理解し、自分と自分以外の人及び社会システムと健全な関係を築くことができ、物事に対して主体的に取り組むことが期待できること。

【水産学科】

『求める学生像』

海洋学部水産学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

海洋学部水産学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科学科（物理、化学、生物、地学）の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語では、読解、文章作成を行う上での文構成の理解技能と表現力を身に付けておくことが望ましい。

社会では、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

水生生物を生物資源として持続的に活用するために、多様な水生生物についての科学的な基礎知識と水生生物の保護・育成・食品への利活用、水圏環境の保全などの広範な科学の知識を総合的に思考し判断・表現できる力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観や立場・役割を理解し、自らが社会の一員であることを認識し、水圏環境システムや食品が有するさまざまな課題に対して主体的に取り組むことが期待できること。

【海洋生物学科】

『求める学生像』

海洋学部海洋生物学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材及びディプロマ・ポリシーで求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解したうえで、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

環境・社会問題の構造を理解するために、自然科学や社会科学などの広範な知識を総合的に思考し、判断する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

種々に変動し、多様さが増す価値観のもと、それぞれの立場や役割を理解し、自分、他者及び社会システムと健全な関係を構築でき、主体的に物事に取り組む姿勢を有することが望ましい。

人文学部

【人文学科】

『求める学生像』

人文学部人文学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

人文学部人文学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して、英語の文章理解力、表現力といったコミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力といったコミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

社会では、高校での社会（世界史、日本史、地理、政治・経済、倫理、現代社会）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

人文学の観点から、知識や技能を総合して応用でき、それらを発信できることが、期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観を理解し、友好的な人間関係を築くことができること、物事に対して挑戦的に取り組むこと、失敗や挫折を乗り越えて目標を実現しようとするのが期待できること。

文理融合学部

【経営学科】

『求める学生像』

文理融合学部経営学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

国際ビジネスのシーンで活躍できることも想定して、英語では、文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

経営学科は社会科学系の文系学科であるので、国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

社会では、数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。できれば公民科目である公共や倫理、政治経済の学習をしておくことが望ましい。

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

現代社会の仕組み、特に経済や経営の仕組みを理解した上で、どのような経済、経営が望ましいのか、という価値判断をする志向性を身に付けておくことが必要である。経済や経営において、社会や環境への配慮がなされているのかを問う姿勢を持つことが望まれる。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

俯瞰的で複眼的視点で、能動的・主体的に物事に対して取組み、多様な人々と健全な関係を築き、他者と協働して学ぶことを目指すことが望まれる。

【地域社会学科】

『求める学生像』

文理融合学部地域社会学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

文理融合学部地域社会学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。特に漢字の読み書きの練習を十分にしておくことが望ましい。社会では、高校での社会の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。さらに、書籍、テレビやネットのメディア、新聞等を通して、国内外の政治・経済、国際関係、文化や各種メディアの表現方法の違いについて常に考える習慣を身に付けておくことが望ましい。

数学及び理科では、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。特に、地球環境問題への関心を持つことが望ましい。

情報では、パソコンの基本操作と ICT 関連の基本用語を理解するとともに、最新の情報通信機器やネットワークサービス等の動向への関心を持つことが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文理融合の観点から、理系の知識・技能と文系の知識・技能を総合して地域づく

りに応用できること及びそれらを表現できることが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

寛容性を持って友好な人間関係を築くことができること、バランス感覚をもちながら、物事に対して挑戦的に取り組むこと及び失敗や挫折を乗り越えて、よりよい地域社会の実現に資するような目標を実現することが期待できること。

【人間情報工学科】

『求める学生像』

文理融合学部人間情報工学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。特に

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

電気電子・情報技術や医療技術ならびに環境保全に関わる社会の諸問題を捉えてその構造を理解するとともに、文系と理系の知識と技術をもって対応できる能力、およびそれらを他者に対して的確に伝えることができる能力を身に付けることが期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観、立場と役割を理解できる寛容性を有し、自身と社会の良好で健全な関係を築き、協調できること。また社会の複雑な問題の解決に積極的に取り組むことが期待できること。

農学部

【農学科】

『求める学生像』

農学部農学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。並びに、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学、農業と環境）の科目の中から複数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

生命や環境に関心を持ち、農業や社会の問題解決に取り組むために、自然科学や

社会科学等の多様な知識を総合的に思考し判断する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観や立場・役割を理解し、自分と自分以外の人及び社会システムと健全な関係を築くことができ、物事に対して主体的に取り組むことが期待できること。

【動物科学科】

『求める学生像』

農学部動物科学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科（物理、化学、生物、地学）の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

動物生産から畜産物加工利用までの一連の過程、最新の動物生命科学、人と動物との関係を理解するために、自然科学や社会科学等の広範な知識を総合的に思考し判断する力が期待できること。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

文理融合的な柔軟で幅広い視野で社会を俯瞰し、多様な価値観や立場・役割を理解し、自らの意見を持って、動物科学に対して主体的に取り組むことが期待できること。

【食生命科学科】

『求める学生像』

農学部食生命科学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。及び、ディプロマ・ポリシーで求められている能力を、身に付けられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身に付けておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身に付けておくことが望ましい。

理科では、高校での理科の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

文系と理系の知識・技能を統合した文理融合的な視野に立って食の重要性や生命の尊さについて考え、自らの意思をもって判断し、自らの表現方法で発信できることが求められます。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

食の重要性や生命の尊さについて自ら学ぶ意欲をもち、多様な価値観をもってい

る人々と良好な関係を保ちながら、失敗や挫折を乗り越えて目標を達成しようとする姿勢が求められます。

国際文化学部

【地域創造学科】

国際文化学部地域創造学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

国際文化学部地域創造学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

1) 英語について

- ① 高校における英語科目の履修を通じて、英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。
- ② 英検、TOEIC、TOEFL、GTEC などの外部試験を受験していることが望ましい。

2) 国語について

- ① 高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。
- ② 作文・小論文作成のトレーニングを積んでおくことが望ましい。

3) 社会について

- ① 社会では、高校での社会の科目を幅広く理解していることが望まれる。
- ② 新聞の国際欄を読んで記事の内容を理解できることが望まれる。

4) 数学及び理科について

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

1) 論理的思考力について

中学校の数学で学んだ図形の証明問題（合同、相似）を用い、「前提—論拠—結論」という論理的思考のパターンを理解しておくことが望ましい。

2) 判断力について

自身の住む地域が直面している問題を特定し、それに対する解決方法を考察するトレーニングを積んでおくことが望ましい。

3) 表現力について

新聞の社説を書き写し、論説文の構成や表現パターンを理解しておくことが望まれる。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

1) ボランティア活動について

学校内や地域のボランティア活動に積極的に参加し、社会の課題に対して当事者意識を身につけておくことが望ましい。

2) リーダーシップとマネジメントについて

リーダーシップとマネジメントに必要な要素を理解しておくことが望ましい。

【国際コミュニケーション学科】

『求める学生像』

国際文化学部国際コミュニケーション学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

国際文化学部国際コミュニケーション学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者に求める知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

1) 英語について

- ① 高校における英語科目の履修を通じて、英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。
- ② 英検、TOEIC、TOEFL、GTEC などの外部試験を受験していることが望ましい。

2) 国語について

- ① 高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。
- ② 作文・小論文作成のトレーニングを積んでおくことが望ましい。

3) 社会について

- ① 社会では、高校での社会の科目（世界史、日本史、地理、政治・経済、倫理、現代社会）を幅広く理解していることが望まれる。
- ② 新聞の国際欄を読んで記事の内容を理解できることが望まれる。

4) 数学及び理科について

数学及び理科は、文系の学問を学ぶ上で必要な自然科学的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

1) 論理的思考力について

中学校の数学で学んだ図形の証明問題（合同、相似）を用い、「前提—論拠—結論」という論理的思考のパターンを理解しておくことが望ましい。

2) 判断力について

自身の住む地域が直面している問題を特定し、それに対する解決方法を考察するトレーニングを積んでおくことが望ましい。

3) 表現力について

新聞の社説を書き写し、論説文の構成や表現パターンを理解しておくことが望まれる。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

1) ボランティア活動について

学校内や地域のボランティア活動に積極的に参加し、社会の課題に対して当事者意識を身につけておくことが望ましい。

2) リーダーシップとマネジメントについて

リーダーシップとマネジメントに必要な要素を理解しておくことが望ましい。

生物学部

【生物学科】

『求める学生像』

生物学部生物学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

生物学部生物学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

数学では、高校での数学の科目の履修を通して公式や計算方法を理解した上で、それらを応用できる能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科の科目の中から数科目を選択し、個々の項目の内容を理

解していることが望ましい。

国語及び社会は、理系の学問を学ぶ上で必要な文化的な知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

生命科学の進歩にともなって現代社会に生じる医療、環境、食品などの生命倫理の諸問題について文理融合の視点から本質の理解をめざし、自らの論理的思考と創造的考察を外部に発信する意欲を持つことが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

生命倫理の諸問題や生物多様性の喪失が喫緊の課題となっている現代において、困難な課題に主体的に向き合い、他者の価値観と自己の役割を理解し、多様な人々と協働して学ぶ姿勢を持ち続けることが望ましい。

【海洋生物科学科】

『求める学生像』

生物学部海洋生物科学科の教育目標を理解し、この目標を達成するために自ら学ぶ意欲をもった人材。

生物学部海洋生物科学科で定められたディプロマ・ポリシーで、求められている能力を身につけられると期待できる基礎学力を十分有する人材。

『入学者にもとめる知識・技能・思考力・判断力・表現力・態度』

(1) 知識・技能

英語では、高校での英語の科目の履修を通して英語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

理科では、高校での理科の科目の中から教科目を履修を通して学科の専門内容に関する項目を理解していることが望ましい。

国語では、高校での国語の履修を通して日本語の文章理解力、表現力、コミュニケーション能力を身につけておくことが望ましい。

また、海洋生物科学科では、数学、社会や理科のなかでも生物以外の知識を幅広く理解していることが望ましい。

(2) 思考力・判断力・表現力

海洋生物と環境生態系を理解するため、自然科学分野の広範な知識を総合的に思考し判断する力が期待できること、分離融合の観点から文系及び理系の知識・技能を総合的に応用し、それらを表現できることが望ましい。

(3) 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

多様な価値観や立場・役割を理解し、友好的な人間関係を築くことができること、物事に対して主体的に取り組めること、豊かな世界観と倫理観を備え、海洋環境と人間活動の調和に貢献しようとする意識を持っていることが望ましい。

②教育研究上の基本組織に関すること

公表方法：<https://www.u-tokai.ac.jp/about/organization/>

③教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

a. 教員数（本務者）							
学部等の組織の名称	学長・副学長	教授	准教授	講師	助教	助手 その他	計
－	6 人	－					6 人
文学部	－	22 人	9 人	3 人	0 人	0 人	34 人
文化社会学部	－	28 人	18 人	7 人	0 人	0 人	53 人
教養学部	－	15 人	12 人	1 人	0 人	0 人	28 人
児童教育学部	－	12 人	5 人	3 人	1 人	0 人	21 人
体育学部	－	28 人	18 人	7 人	2 人	0 人	8 人
健康学部	－	7 人	8 人	2 人	3 人	0 人	20 人
法学部	－	13 人	6 人	4 人	1 人	0 人	24 人
政治経済学部	－	14 人	5 人	9 人	0 人	0 人	28 人
経営学部	－	9 人	3 人	6 人	0 人	0 人	18 人
国際学部	－	8 人	6 人	3 人	0 人	0 人	17 人
観光学部	－	10 人	5 人	2 人	0 人	0 人	17 人
情報通信学部	－	13 人	6 人	3 人	0 人	0 人	22 人
理学部	－	32 人	9 人	2 人	0 人	0 人	43 人
情報理工学部	－	16 人	9 人	4 人	0 人	0 人	29 人
建築都市学部	－	16 人	9 人	4 人	0 人	0 人	29 人
工学部	－	49 人	24 人	14 人	0 人	0 人	87 人
医学部医学科	－	117 人	82 人	126 人	238 人	0 人	563 人
医学部看護学科	－	9 人	8 人	10 人	6 人	0 人	33 人
海洋学部	－	32 人	14 人	4 人	2 人	0 人	52 人
人文学部	－	6 人	5 人	3 人	0 人	0 人	14 人
文理融合学部	－	23 人	18 人	3 人	1 人	0 人	45 人
農学部	－	16 人	9 人	5 人	1 人	0 人	31 人
国際文化学部	－	13 人	5 人	4 人	2 人	0 人	24 人
生物学部	－	16 人	4 人	1 人	1 人	0 人	22 人
教養部	－	1 人	8 人	7 人	0 人	0 人	16 人
附置研究所	－	55 人	32 人	16 人	11 人	36 人	150 人
b. 教員数（兼務者）							
学長・副学長		学長・副学長以外の教員					計
0 人		605 人					605 人
各教員の有する学位及び業績 （教員データベース等）		公表方法：大学ホームページ TOP ＞ 教育・研究 ＞ 研究支援・体制 ＞ 研究活動・ライセンス検索 ＞ 教員研究活動情報の検索 https://tokaihyoka-kokai.tsc.u-tokai.ac.jp/search/index.html?lang=ja&template=templatel					
c. F D（ファカルティ・ディベロップメント）の状況（任意記載事項）							

--

④入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

a. 入学者の数、収容定員、在学する学生の数等								
学部等名	入学定員 (a)	入学者数 (b)	b/a	収容定員 (c)	在学生数 (d)	d/c	編入学 定員	編入学 者数
文学部	370 人	425 人	114.9%	1480 人	1701 人	114.9%	若干名	0 人
文化社会学部	450 人	497 人	110.4%	1800 人	1995 人	110.8%	若干名	0 人
教養学部	190 人	205 人	107.9%	760 人	800 人	105.3%	若干名	0 人
児童教育学部	150 人	162 人	108.0%	600 人	630 人	105.0%	若干名	0 人
体育学部	540 人	566 人	104.8%	2160 人	2260 人	104.6%	若干名	1 人
健康学部	200 人	221 人	110.5%	800 人	833 人	104.1%	若干名	0 人
法学部	300 人	363 人	121.0%	1200 人	1370 人	114.2%	若干名	0 人
政治経済学部	400 人	432 人	108.0%	1600 人	1803 人	112.7%	若干名	1 人
経営学部 (湘南・品川キャンパス)	230 人	240 人	104.3%	920 人	1029 人	111.8%	若干名	0 人
国際学部	200 人	212 人	106.0%	800 人	899 人	112.4%	若干名	4 人
観光学部	200 人	201 人	100.5%	800 人	889 人	111.1%	若干名	0 人
情報通信学部	240 人	247 人	102.9%	960 人	1053 人	109.7%	若干名	1 人
理学部	320 人	360 人	112.5%	1280 人	1399 人	109.3%	若干名	0 人
情報理工学部	300 人	306 人	102.0%	1200 人	1303 人	108.6%	若干名	1 人
建築都市学部	340 人	385 人	113.2%	1360 人	1419 人	104.3%	若干名	0 人
工学部	820 人	870 人	106.1%	3280 人	3549 人	108.2%	若干名	1 人
医学部医学科	118 人	118 人	100.0%	708 人	726 人	102.5%	0 人	0 人
医学部看護学科	95 人	96 人	101.1%	380 人	398 人	104.7%	若干名	0 人
海洋学部	350 人	339 人	96.9%	1400 人	1390 人	99.3%	若干名	0 人
人文学部	180 人	155 人	86.1%	720 人	611 人	84.9%	若干名	0 人
経営学部 (熊本キャンパス)	0 人	0 人	%	0 人	6 人	%	0 人	0 人
基盤工学部	0 人	0 人	%	0 人	2 人	%	0 人	0 人
文理融合学部	300 人	332 人	110.7%	1200 人	1149 人	95.8%	若干名	3 人
農学部	230 人	221 人	96.1%	920 人	837 人	91.0%	若干名	3 人
国際文化学部	190 人	208 人	109.5%	760 人	750 人	98.7%	若干名	0 人
生物学部	150 人	175 人	116.7%	600 人	661 人	110.2%	若干名	0 人
合計	6863 人	7336 人	106.9%	27688 人	29462 人	106.4%	若干名	15 人
(備考) 経営学部（熊本キャンパス）と基盤工学部は学生募集停止のため入学者なし。								

b. 卒業者数・修了者数、進学者数、就職者数				
学部等名	卒業者数・修了者数	進学者数	就職者数 (自営業を含む。)	その他
文学部	342 人 (100%)	18 人 (5.3%)	245 人 (71.6%)	79 人 (23.1%)
文化社会学部	427 人 (100%)	7 人 (1.6%)	336 人 (78.7%)	84 人 (19.7%)
教養学部	188 人 (100%)	6 人 (3.2%)	149 人 (79.3%)	33 人 (17.6%)
児童教育学部	133 人 (100%)	2 人 (1.5%)	125 人 (94.0%)	6 人 (4.5%)
体育学部	523 人 (100%)	20 人 (3.8%)	390 人 (74.6%)	113 人 (21.6%)
健康学部	186 人 (100%)	6 人 (3.2%)	159 人 (85.5%)	21 人 (11.3%)
法学部	262 人 (100%)	3 人 (1.1%)	201 人 (76.7%)	58 人 (22.1%)
政治経済学部	372 人 (100%)	8 人 (2.2%)	312 人 (83.9%)	52 人 (14.0%)
経営学部	192 人 (100%)	6 人 (3.1%)	164 人 (85.4%)	22 人 (11.5%)
国際学部	152 人 (100%)	5 人 (3.3%)	119 人 (78.3%)	28 人 (18.4%)
観光学部	194 人 (100%)	0 人 (0.0%)	178 人 (91.8%)	16 人 (8.2%)
情報通信学部	263 人 (100%)	35 人 (13.3%)	204 人 (77.6%)	24 人 (9.1%)
理学部	267 人 (100%)	58 人 (21.7%)	172 人 (64.4%)	37 人 (13.9%)
情報理工学部	307 人 (100%)	50 人 (16.3%)	232 人 (75.6%)	25 人 (8.1%)
建築都市学部	324 人 (100%)	55 人 (17.0%)	257 人 (79.3%)	12 人 (3.7%)
工学部	810 人 (100%)	168 人 (20.7%)	518 人 (64.0%)	124 人 (15.3%)
医学部医学科	111 人 (100%)	0 人 (0.0%)	108 人 (97.3%)	3 人 (2.7%)
医学部看護学科	98 人 (100%)	0 人 (0.0%)	98 人 (100.0%)	0 人 (0.0%)
海洋学部	314 人 (100%)	47 人 (15.0%)	245 人 (78.0%)	22 人 (7.0%)
人文学部	149 人 (100%)	2 人 (1.3%)	136 人 (91.3%)	11 人 (7.4%)
文理融合学部	269 人 (100%)	7 人 (2.6%)	233 人 (86.6%)	29 人 (10.8%)
農学部	155 人 (100%)	22 人 (14.2%)	117 人 (75.5%)	16 人 (10.3%)
国際文化学部	175 人 (100%)	3 人 (1.7%)	150 人 (85.7%)	22 人 (12.6%)
生物学部	119 人 (100%)	12 人 (10.1%)	95 人 (79.8%)	12 人 (10.1%)
合計	6332 人 (100%)	540 人 (8.5%)	4943 人 (78.1%)	849 人 (13.4%)

(主な進学先・就職先) (任意記載事項)
(備考)

c. 修業年限期間内に卒業又は修了する学生の割合、留年者数、中途退学者数（任意記載事項）					
学部等名	入学者数	修業年限期間内 卒業・修了者数	留年者数	中途退学者数	その他
	人 (100%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
	人 (100%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
合計	人 (100%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)
(備考)					

⑤授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

(概要) 本学では、教育課程年度ならびに開講授業科目毎にシラバスを作成・公表している。 シラバスの内容は、学科目、科目キーワード、科目と関連する実務経験、アクティブラーニング科目、地域志向による学修内容、他科目との関係、科目の要旨・概要、実務経験に基づく学修内容、アクティブラーニングによる学修内容、地域志向による学修内容、大学全体レベルの DP、学位プログラムレベルの DP、本科目の学修成果目標（ラーニングアウトカム）、成績評価の基準・方法、課題・試験・レポート等のフィードバック方法、履修上の注意点、教科書、参考図書・その他の教材、授業スケジュールである。 シラバスは、担当教員がシラバスデータベースシステム上で上記項目を入力後、科目管理者が点検・承認するというプロセスを経て公開される。 公表時期については、当該授業科目開講前に本学ホームページへ掲載し、広く周知している。

⑥学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

(概要) 各科目の成績評価の客観性や厳格性を担保するために、シラバスに成績評価の基準が明記され、適性に成績評価がなされている。 また、学修成果の評価のひとつとして GPA 制を導入しており、修得単位数と合わせて、学修の評価基準となっている。 本学は、創立者松前重義の示した建学の精神を受け継ぎ「明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性をもった人材を育てること」を目指している。そのために、大学として、教育目標と学位授与方針及び育成する人材像（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー）として明確に設定している。 ディプロマ・ポリシーの内容は次の通りである。 専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解し、文理融合の幅広い教養を身につけ、学則に定める修了要件を満たすとともに、自らの考えをもち、時代の変化
--

に合わせて積極的に社会を支え、改善していく自主性や創造性を身につけたと認められるものに学位を授与する。

学位授与方針を、本学の学修をととして身につけるべき社会的実践力「4つの力（12構成要素）」は下記のとおりである。

<自ら考える力>

対象を見据え、その本質を掘り下げ、可能性を広げる力（学習力、思考力、探求力）

<集い力>

多様な人々の中で生き、その集団の形成・維持に寄与する力（関係構築力、コミュニケーション力、アイデンティティ獲得）

<挑み力>

困難な問題に主体的に向き合い、解決・達成に向け踏み出す力（問題発見力、構想力、行動力）

<成し遂げ力>

目標達成の途中で生じる失敗や挫折を乗り越えて、目標に近づく力（セルフマネジメント、継続力、改善・修正力）

なお、卒業要件については、学則並びに授業要覧に、卒業単位数を修得し、所定の試験に合格すること等が明示されている。学部及び大学での卒業判定会議を行っており、卒業判定を適切に行うための措置がなされて、適切な学位授与が行われている。

学部名	学科名	卒業又は修了に必要な単位数	GPA制度の採用 (任意記載事項)	履修単位の登録上限 (任意記載事項)
文学部	文明学科	124 単位	有・無	単位
	歴史学科	124 単位	有・無	単位
	日本文学科	124 単位	有・無	単位
	英語文化コミュニケーション学科	124 単位	有・無	単位
文化社会学部	アジア学科	124 単位	有・無	単位
	ヨーロッパ・アメリカ学科	124 単位	有・無	単位
	北欧学科	124 単位	有・無	単位
	文芸創作学科	124 単位	有・無	単位
	広報メディア学科	124 単位	有・無	単位
	心理・社会学科	124 単位	有・無	単位
教養学部	人間環境学科	124 単位	有・無	単位
	芸術学科	124 単位	有・無	単位
児童教育学部	児童教育学科	124 単位	有・無	単位
体育学部	体育学科	124 単位	有・無	単位
	競技スポーツ学科	124 単位	有・無	単位
	武道学科	124 単位	有・無	単位
	生涯スポーツ学科	124 単位	有・無	単位
	スポーツ・レジャーマネジメント学科	124 単位	有・無	単位
健康学部	健康マネジメント学科	124 単位	有・無	単位
法学部	法律学科	124 単位	有・無	単位
政治経済学部	政治学科	124 単位	有・無	単位

	経済学科	124 単位	有・無	単位
経営学部	経営学科	124 単位	有・無	単位
国際学部	国際学科	124 単位	有・無	単位
観光学部	観光学科	124 単位	有・無	単位
情報通信学部	情報通信学科	124 単位	有・無	単位
理学部	数学科	124 単位	有・無	単位
	情報数理学科	124 単位	有・無	単位
	物理学科	124 単位	有・無	単位
	化学科	124 単位	有・無	単位
情報理工学部	情報科学科	124 単位	有・無	単位
	コンピュータ応用 工学科	124 単位	有・無	単位
	情報メディア学科	124 単位	有・無	単位
建築都市学部	建築学科	124 単位	有・無	単位
	土木工学科	124 単位	有・無	単位
工学部	航空宇宙学科	124 単位	有・無	単位
	機械工学科	124 単位	有・無	単位
	機械システム工学科	124 単位	有・無	単位
	電気電子工学科	124 単位	有・無	単位
	医工学科	124 単位	有・無	単位
	生物工学科	124 単位	有・無	単位
	応用化学科	124 単位	有・無	単位
医学部	医学科	193 単位	有・無	単位
	看護学科	124 単位	有・無	単位
海洋学部	海洋理工学科	124 単位	有・無	単位
	水産学科	124 単位	有・無	単位
	海洋生物学科	124 単位	有・無	単位
人文学部	人文学科	124 単位	有・無	単位
文理融合学部	経営学科	124 単位	有・無	単位
	地域社会学科	124 単位	有・無	単位
	人間情報工学科	124 単位	有・無	単位
農学部	農学科	124 単位	有・無	単位
	動物科学科	124 単位	有・無	単位
	食生命科学科	124 単位	有・無	単位
国際文化学部	地域創造学科	124 単位	有・無	単位
	国際コミュニケーション学科	124 単位	有・無	単位
生物学部	生物学科	124 単位	有・無	単位
	海洋生物科学科	124 単位	有・無	単位
G P A の活用状況（任意記載事項）		公表方法：		
学生の学修状況に係る参考情報 （任意記載事項）		公表方法：		

⑦校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

公表方法：

<https://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/>

<https://www.u-tokai.ac.jp/education-research/tokai-university-library/>

⑧授業料、入学金その他の大学等が徴収する費用に関すること

学部名	学科名	学年	授業料 (年間)	入学金	その他	備考（任意記載事項）
文学部	文明学科	1 年	1,261,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
	歴史学科	2 年	1,216,000 円			
	日本文学科	3 年				
	英語文化コミュニケーション学科	4 年				
文化社会学部	アジア学科	1 年	1,261,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
	ヨーロッパ・アメリカ学科	2 年	1,216,000 円			
	北欧学科	3 年				
	文芸創作学科	4 年				
	広報メディア学科	4 年				
	心理・社会学科					
教養学部	人間環境学科	1 年	1,354,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
		2 年	1,269,000 円			
	芸術学科	3 年				
		4 年				
児童教育学部	児童教育学科	1 年	1,354,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
		2 年	1,269,000 円			
		3 年				
		4 年				
体育学部	体育学科	1 年	1,354,000 円	150,000 円	50,000 円	生涯スポーツ学科は、実習費が別途かかります。 〈参考〉 2024 年度：1 年次 42,000 円 2 年次 55,000 円 2025 年度：1 年次 44,000 円程度 その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
	競技スポーツ学科	2 年	1,269,000 円			
	武道学科	3 年				
	生涯スポーツ学科	4 年				
	スポーツ・レジャー マネジメント学科					
健康学部	健康マネジメント学 科	1 年	1,354,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
		2 年	1,269,000 円			
		3 年				
		4 年				
法学部	法律学科	1 年	1,261,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円
		2 年	1,216,000 円			
		3 年				
		4 年				

政治経済学部	政治学科	1 年	1, 272, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 227, 000 円			
	3 年					
	4 年					
経営学部	経営学科	1 年	1, 272, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 227, 000 円			
		3 年				
		4 年				
国際学部	国際学科	1 年	1, 272, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 227, 000 円			
		3 年				
		4 年				
観光学部	観光学科	1 年	1, 272, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 227, 000 円			
		3 年				
		4 年				
情報通信学部	情報通信学科	1 年	1, 469, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 354, 000 円			
		3 年				
		4 年				
理学部	数学科	1 年	1, 469, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
	情報数理学科	2 年	1, 354, 000 円			
	物理学科	3 年				
	化学科	4 年				
情報理工学部	情報科学科	1 年	1, 469, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
	コンピュータ応用工学科	2 年	1, 354, 000 円			
		3 年				
	情報メディア学科	4 年				
建築都市学部	建築学科	1 年	1, 469, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 354, 000 円			
	3 年					
	土木工学科	4 年				
工学部	航空宇宙学科 (航空操縦学専攻)	1 年	1, 770, 000 円			2～3 年次に、留学中における授業料（参考：2025 年度は約 \$ 117, 789）、渡航費、生活費、燃料費などが別途かかります。 その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年	1, 655, 000 円			
		3 年				
		4 年				

	航空宇宙学科 (航空宇宙学専攻)	1 年	1,469,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円		
	機械工学科	2 年	1,354,000 円					
	機械システム工学科	3 年						
	電気電子工学科	4 年						
	医工学科							
	生物工学科							
応用化学科								
医学部	医学科	1 年	2,148,000 円	1,000,000 円	3,302,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円 ・教育運営費 632,000 円 ・教育充実費 520,000 円 ・施設設備費 2,100,000 円		
		2 年	2,148,000 円		3,622,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円 ・教育運営費 632,000 円 ・教育充実費 840,000 円 ・施設設備費 2,100,000 円		
		3 年						
		4 年						
		5 年						
		6 年						
	看護学科	1 年	1,649,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円		
		2 年	1,379,000 円					
		3 年						
		4 年						
海洋学部	海洋理工学科	1 年	1,469,000 円	150,000 円	131,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円 ・実習実技費 81,000 円		
	水産学科	2 年	1,354,000 円					
		3 年						
	海洋生物学科	4 年						
人文学部	人文学科	1 年	1,261,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円		
		2 年	1,216,000 円					
		3 年						
		4 年						
文理融合学部	経営学科	1 年	990,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円		
	地域社会学科	2 年	950,000 円					
		3 年						
	人間情報工学科	4 年						
農学部	農学科	1 年	1,395,000 円	150,000 円	50,000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25,000 円		
	動物科学科	2 年	1,345,000 円					
		3 年						
	食生命科学科	4 年						

国際文化学部	地域創造学科	1 年	1, 119, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年				
	国際コミュニケーション学科	3 年	1, 107, 000 円			
		4 年				
生物学部	生物学科	1 年	1, 354, 000 円	150, 000 円	50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		2 年				
		3 年	1, 234, 000 円			
		4 年				
	海洋生物科学科	1 年	1, 354, 000 円	150, 000 円	120, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円 ・教育実習費 70, 000 円
		2 年	1, 234, 000 円		91, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円 ・教育実習費 41, 000 円
		3 年			50, 000 円	その他欄計上費用 ・休学在籍料 1 学期につき 25, 000 円
		4 年	1, 234, 000 円			

⑨大学等が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

a. 学生の修学に係る支援に関する取組
(概要) 1. 修学に関する支援体制を、指導教員制度を基本として構築し、成績不振の学生、休学及び退学希望の学生等の早期把握に努め、適切な指導助言を行う。 2. 障がいのある学生については、「東海大学障がい学生支援に関する指針」に基づき支援を行う。 3. 各種奨学金制度の充実を図り、経済的困窮及び、自らの成長のために活用する学生に対し支援を行う。 4. 各種奨学金制度の運用にあたっては「奨学金が必要な学生に公平に採択される仕組み」「種類を減らし分かりやすい制度」であることに留意する。 5. 海外派遣留学、キャンパス間留学、チャレンジプロジェクト等の正課内外の取組みに対して、奨学金及び支援金等の経済的支援を行う。 6. 大学院生の学修・研究活動を支援するために、各種奨学金制度及び、研究補助金制度等の充実を図る。
b. 進路選択に係る支援に関する取組
(概要) 各キャンパスのカレッジオフィスのキャリア就職担当では、就職活動を行う3年次・4年次の学生や大学院生のみならず、入学早々の段階から学年に応じて学生1人ひとりの就職・進路に関して、きめ細かい様々なサポートを行う。 これまで実施してきた「学生の就職指導も教育の一環」の精神と実績を活かし、学生諸君の就職支援のほか、将来に向けたキャリアデザインの支援が本学の柱であると考えている。全学部設置されたキャリア就職委員会、教務担当、校友会、ご父母で構成される後援会、同窓会と連携し、より良い学生諸君の希望する進路が実現できるよう、様々なプログラムを用意している。具体的には、キャリア教育プログラム（低学年次生用、高学年次生用）、専

門スタッフによる個別進路および就職相談、東海 JOB-LEAGUE などの独自の職業体験プログラム、就職ガイダンス、資格取得等の就職活動支援講座など様々なプログラムを学内で開催している。

c. 学生の心身の健康等に係る支援に関する取組

(概要)

学生の心身の健康、保健衛生等に関わる特徴的な活動としては、本学は各キャンパスに設置する学部・収容人員に基づき対応しており担当日数は異なるが精神科および内科の保健管理医やカウンセラーにも相談できる体制を維持している。

クラブ活動が盛んなキャンパスにおいては定期健康診断の他に、心電図や採血などを追加した運動部学生を対象としたクラブ健康診断を実施し安全なクラブ運営に寄与すると共にアスリートへの多方面からの支援体制の構築を目指している。また、カリキュラムに応じた特殊健康診断も実施している。その他にも、救急法講習会の開催や、心肺蘇生法訓練用的人形及び AED トレーナーの貸し出しなど学生の安全を守るための啓発活動ともに学生自らの活動への支援も行っている。

⑩教育研究活動等の状況についての情報の公表の方法

公表方法：

<https://www.u-tokai.ac.jp/information/public-information/>

○総合知を育成するための学生の学びの充実に向けた取り組み

● 入学後の文理横断型の教育、複線的・多面的な学び

「現代文明論」を、全学共通必修科目として設定し、大学全体の教育課程の中核と位置付けている。「現代文明論」により、「文系」「理系」という枠組みを超えて、特定の学問分野にとらわれない、文理融合の教育を進めている。

「現代文明論」は、学生に、現代社会における文と理を超えた諸問題の存在に気づかせ、その構造を理解させて、その解決につながるような新しいものの見方を得させるという目標を持つものである。毎回、異なる分野を専門とする授業担当者が内容を構成して講義を行っている。

同じく全学共通必修科目である「現代教養科目」は、さまざまな学問分野の中に新たな魅力を見いださせ、将来的に仕事の間や生活の間において異分野にいる人間とのコミュニケーションを円滑に取り、協同を深めていけることを目指している。「何を学び、身につけることができたのか」を説明しやすいように、語学系、異文化研究論系、スポーツ・フィットネス系、文理共通系、情報(AI)系、リメディアル系、社会的実践力系、留学生向け科目を、原則として 6 科目（あるいは、1 単位科目を含む場合は原則として計 12 単位）ごとに一つの「現代教養副専攻ユニット」として編成し、さらに、学位プログラムの達成をより効果的にする仕組みとして、学科（専攻・課程）が履修を推奨とする現代教養副専攻ユニットを指定することも可能としている。

また、他学部・他学科科目を、主専攻科目として認定できる「指定ユニット」制度がある。これは、学位プログラム毎に設定されたディプロマ・ポリシーの達成に加え、常に変化し複雑化する現代社会に柔軟に対応し、学生の新しいアイデアや考えを即時にカリキュラムに反映し、力を身に付けていく制度である。

さらに、全国にまたがって 7 キャンパスを持つ本学のスケールメリットを最大限に活用するために、キャンパス間留学制度が設置されている。他のキャンパスに一定期間留学することにより、幅広い視野と深い教養を身に付けることを目的としている。本制度

は、学生本人が所属するキャンパスとは異なる遠方のキャンパスで学ぶ制度（近隣キャンパスでの履修者は対象外）であり、科目の履修に関する位置付けとしては、他学部・他学科の授業科目を履修することが基本である。なお、本制度を利用することにより、奨学金が給付される場合もある。

- 全学的なデータサイエンス教育等の総合知を育成するための学生の学びの充実に向けた取り組み

理系教育研究センターが主に **STEM** 教育について担い、全ての学生を対象に自然科学、情報技術に関する知識・技術・経験の獲得を目指した科目を配置している。情報技術・情報科学については、基礎的な情報処理の知識やプログラミング、技術に関する授業から情報社会を支えるデータサイエンス、人工知能の知識及び技術に関する授業を段階的に配置し、**DX** 人材としての基礎知識・基礎技術を養う。

これら情報系の科目は、社会 **ICT** 副専攻、東海大学数理・データサイエンス・**AI** 教育プログラム（**TMDA**）の科目としても展開されている。

自然科学については、理工系以外の学生に対しても科学的な思考力を身につけてもらうため、講義と実習とをブレンドしたアクティブラーニング型の科目を設置している。

備考 この用紙の大きさは、日本産業規格 A 4 とする。

(別紙)

※ この別紙は、更新確認申請書を提出する場合に提出すること。

※ 以下に掲げる人数を記載すべき全ての欄（合計欄を含む。）について、該当する人数が1人以上10人以下の場合には、当該欄に「－」を記載すること。該当する人数が0人の場合には、「0人」と記載すること。

学校コード (13桁)	F113310103233
学校名 (〇〇大学 等)	東海大学
設置者名 (学校法人〇〇学園 等)	学校法人東海大学

1. 前年度の授業料等減免対象者及び給付奨学生の数

		前半期	後半期	年間
支援対象者数 ※括弧内は多子世帯の学生（内数） ※家計急変による者を除く。		5326人（3190）人	4301人（2652）人	4301人（2652）人
内 訳	第Ⅰ区分	1284人	941人	
	(うち多子世帯)	(271人)	(182人)	
	第Ⅱ区分	616 人	468人	
	(うち多子世帯)	(114人)	(75人)	
	第Ⅲ区分	410 人	310人	
	(うち多子世帯)	(91人)	(79人)	
	第Ⅳ区分（理工農）	302人	266人	
	第Ⅳ区分（多子世帯）	566人	430人	
	区分外（多子世帯）	2148人	1886人	
家計急変による 支援対象者（年間）				29人（－）人
合計（年間）				4330人（2656）人
(備考)				

※ 本表において、多子世帯とは大学等における修学の支援に関する法律（令和元年法律第8号）第4条第2項第1号に掲げる授業料等減免対象者をいい、第Ⅰ区分、第Ⅱ区分、第Ⅲ区分、第Ⅳ区分（理工農）とは、それぞれ大学等における修学の支援に関する法律施行令（令和元年政令第49号）第2条第1項第2号イ～ニに掲げる区分をいう。

※ 備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

2. 前年度に授業料等減免対象者としての認定の取消しを受けた者及び給付奨学生認定の取消しを受けた者の数

(1) 偽りその他不正の手段により授業料等減免又は学資支給金の支給を受けたことにより認定の取消しを受けた者の数

年間	0人
----	----

(2) 適格認定における学業成績の判定の結果、学業成績が廃止の区分に該当したことにより認定の取消しを受けた者の数

	右以外の大学等	短期大学（修業年限が2年のものに限り、認定専攻科を含む。）、高等専門学校（認定専攻科を含む。）及び専門学校（修業年限が2年以下のものに限る。）	
	年間	前半期	後半期
修業年限で卒業又は修了できないことが確定	73人	人	人
修得単位数が「廃止」の基準に該当 （単位制によらない専門学校にあっては、履修科目の単位時間数が廃止の基準に該当）	57人	人	人
出席率が「廃止」の基準に該当又は学修意欲が著しく低い状況	0人	人	人
「警告」の区分に連続して該当 ※「停止」となった場合を除く。	一人	人	人
計	119人	人	人
(備考)			

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

上記の(2)のうち、学業成績が著しく不良であると認められる者であって、当該学業成績が著しく不良であることについて災害、傷病その他やむを得ない事由があると認められず、遡って認定の効力を失った者の数

右以外の大学等		短期大学（修業年限が2年のものに限り、認定専攻科を含む。）、高等専門学校（認定専攻科を含む。）及び専門学校（修業年限が2年以下のものに限る。）			
年間	0人	前半期	人	後半期	人

(3) 退学又は停学（期間の定めのないもの又は3月以上の期間のものに限る。）の処分を受けたことにより認定の取消しを受けた者の数

退学	一人
3月以上の停学	0人
年間計	一人
(備考)	

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

3. 前年度に授業料等減免対象者としての認定の効力の停止を受けた者及び給付奨学生認定の効力の停止を受けた者の数

(1) 停学(3月未満の期間のものに限る。)又は訓告の処分を受けたことにより認定の効力の停止を受けた者の数

3月未満の停学	0人
訓告	0人
年間計	0人
(備考)	

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。

(2) 適格認定における学業成績の判定の結果、停止を受けた者の数

	右以外の大学等	短期大学(修業年限が2年のものに限る、認定専攻科を含む。)、高等専門学校(認定専攻科を含む。)、及び専門学校(修業年限が2年以下のものに限る。)	
	年間	前半期	後半期
GPA等が下位4分の1	114人	人	人

4. 適格認定における学業成績の判定の結果、警告を受けた者の数

	右以外の大学等	短期大学(修業年限が2年のものに限る、認定専攻科を含む。)、高等専門学校(認定専攻科を含む。)、及び専門学校(修業年限が2年以下のものに限る。)	
	年間	前半期	後半期
修得単位数が「警告」の基準に該当	27人	人	人
GPA等が下位4分の1	802人	人	人
出席率が「警告」の基準に該当又は学修意欲が低い状況	0人	人	人
計	803人	人	人
(備考)			

※備考欄は、特記事項がある場合に記載すること。